

海冬レイジ
Illustration
るるお

14

Facing
"Violet
Silver"

傷
つかない

機巧少女は
マシンドール

Unbreakable Machine Doll



14

Facing
"Violet
Silver"

機巧少女は

傷つかない

海冬レイシのるるお

「……ごめんね。でも私は、
今でも貴女が大好きよ」



「わたくしたち……
もう〈お友達〉ではありません」



「おまえたちはっ……
なぜ……邪魔をする……!!
消えろ!」

「対抗手段が
あるんだな?」

『あるわ。分
三〇秒、時間を頂戴!』



「……マスター、それでは」

「おまえたちが
なぜ『有る』のか。
いかにして『在る』のか。
ことの起こりと終わりを、
今より語ろう」

かくて、(愚者の聖堂)にて、
赤羽天全は語り始めた――

MF文庫 J

マシンドール

機巧少女は傷つかない14

Facing "Violet Silver"

海冬レイジ

口絵・本文イラスト ● るろお

編集 ● 池本昌仁

contents

Prologue 夢の中で

Chapter 1 望みを叶えられる者

Chapter 2 奪え

Chapter 3 かくも愛すべき

Chapter 4 過去の自分に回帰する

Chapter 5 暗転

Chapter 6 デウス・エクス・マキナ

Chapter 7 銀色すみれ

Epilogue 夢から醒めて



花柳斎硝子

国内外に名を轟かせる絶代の人形師。真真に復讐の機会を与えた。



小紫

夜々の妹。(雪月花)の花。甘え上手で元気いっぱい!



いろり

夜々の姉。(雪月花)の雪。最近恋に目覚めてボンコツ気味。



夜々

自称「雷真の妻」。花柳斎秘蔵の真作(雪月花)の月。



赤羽雷真

極東出身の人形使い。一門の仇を討つためマグナスの命を狙う。

機巧少女は傷つかない

登場人物紹介

日本軍



炎垂

マグナスが造った原型人形。雷真の妹(雛子)にそっくり!



主門日輪

名門いざなぎ流の剣術師。華族の姫君にして雷真の許婚。

魔術師協会



グリゼルガ

前回の夜会を制した迷宮の魔王。夏城、雷真を弟子にした。



イオネラ

17歳で工学部教授の天才少女。花柳斎の熱烈なファンを自称。



キシバリ

機巧物理学の教授で雷真の担任。その正体は(疾十字)の戦士。



シャルロット・ブリュー&シグモンド

ブリュー伯爵家の元令嬢。父祖伝来の(魔劍)は破壊力抜群。

監視

監視



マグナス

赤羽一門を滅亡させた男。天才的人形使いにして超一流の人形師。



アンリエット・ブリュー

シャルの妹。銀面鏡の手で情實使いとして覚醒。



黒衣帝エドマンド

闇道を歩む野心の王。常人には理解しがたく、あだ名は(狂犬)。



ラザフォード

19世紀最強の魔術師にして学院長。神性機巧を放している。



ロキ

(剣帝)の異名を取る実力者。姉のために魔王を目指す。



ラレイ

ロキの実姉。いつもガラム犬13頭に囲まれている。巨乳。

薔薇の師団(結社)

これまでのおはなし

機巧文明華やかなりし20世紀初頭。ひとりの日本男子が至高の自動人形を引き連れ、王立機巧学院の門をくぐった。滅亡した赤羽一門、何より妹の仇を討つために……。ギユネス強奪を目論む灰薔薇シスマを退け、無事(要石)を得た雷真。夜会はレイと日輪が脱走し、残る相手はシャル、ロキ、マグナスのみ。このまま何事もなく行けるなら、魔王の玉座も夢ではないが……?



アリス

ラザフォードの娘。父のためにあれこれ暗躍。半身が機巧。



ゾーネチカ

(女帝)とあだなされる才媛。気品はあるが、気性は激しい。

世界中から俊英が集まる、魔術の最高学府。4年に1度(夜会)を開催し、「同時代で最も優れた才能」に魔王の称号を与える。ラザフォードの就任後、神性機巧開発を強力に推進中。

王立機巧学院

Prologue 夢の中

「やっぱり夜々^{やや}が一番ですね。可愛い^{かわい}し強いし気がつくし面倒くさくないし！」

最後のは違うだろ、と雷真^{らいしん}は心で突っ込む。

無意識に抱きしめている物体の柔らかさと温み^{ぬく}に、えも言われぬ心地よさを感じている。これは一体何だ？ 枕ではないようだが……？

野生動物なみの感覚を持つ雷真も、灰薔薇^{はいばら}シスマとの激闘に疲れ果て、普通に寝ほけていた。ほんやりした頭で考える。昨夜は一体、どうしたのだったか――

確か、復旧作業もそこそこに、形だけの夜会に参加して、寮に戻った。

怪物ギユネスが暴れ回った後では、当然ながら観客もなく、雷真は〈待機義務〉を果たしただけ。昨日はソーネチカ^{ソネチカ}が日輪^{ひのわ}とフレイをくだし、残るはロキとシャルのみ。二人とは今日、マグナスへの挑戦権を賭けて戦うことになるだろう。

そして勝ち残った者が、明日マグナスに挑む。

だんだん頭が冴えてくる。それでも愚図^{ぐずぐず}愚図と枕^{（?）}に頬擦^{ほおず}りしていると、不意に殺気を感じた。枕^{（?）}がそれに反応し、

「雷真はまだ眠っています！ お引き取りください！」

トゲのある声で言った。……うん、認めよう。これは枕ではなかった。

夢であることを願ったが、誰かが冷たい声を出し、雷真の願望を否定する。

「聞いていた通りの下衆ですな。任務を完遂せず、肉欲を満たしていたなど」

それは、はつきり軽蔑しきった、火垂の声だった。

マグナスが所有する〈戦隊〉の一体。雷真とも浅からぬ縁がある。

火垂はもうベッドの横にいる。相棒がこんな距離まで接近を許したのは、雷真が相棒を抱き枕にしていたからだ。夜々は動かず、嬉々として抱きしめられていた。

雷真はそっと夜々を離し、言い訳がましく言った。

「……まったく言い訳できねえ状況だが、言い訳させろ。俺も限界だったんだ」

「なるほど。理性の限界——」

「体力の限界だ！ 魔女が相手だったんだぞ？ 精魂尽き果ててんだよ！」

「雷真!? いつの間に魔女相手の火遊びなんて~~~~~っ」

「夜々は想像力の限界を超えてる！ つーか、俺の寢床に入ってくんな！」

「そんなこと言って、あんなに激しく夜々を求めてた・く・せ・に♡」

夜々は恥ずかしそうに頬を押さえ、体をくねらせた。火垂の視線がますます冷たくな

る。誤解を解くのは不可能だと判断し、雷真はのっそり起き出した。外はまだ暗い。時刻は午前五時を回ったくらいか。「元氣そうだな、火垂。朝っぱらから何の用だ？」



「少し考えればわかるでしょう。おまえを学院長のもとへ案内します」

「ああ……例のお宝をさっさと寄越せって話か」

ソーネチカから譲り受けた秘宝〈虚無石〉を、学院長に提出しなければならない。

今さらながらに、雷真らいしんは躊躇ちゆうちよを覚えた。虚無石は〈イブの心臓〉の元となったもので、神性機巧マシンドールの誕生にも関わる要石。硝子しょうこは日本軍に提出することを拒み、結社に亡命した。せつかくラザフォードの手から離れたというのに、再び戻していいものか。

（だが、この石と引き換えに、夜々ややを救えるかも知れない）

そういう約束だ。石を渡す代わりに、学院が〈レーテの水〉を入手する。あの靈藥エリクサーがあれば、治療法が見つかるまで、夜々の時間を停めることができる。

逡巡しゆんじゆんしていると、かっぱう着姿の乙女が顔を出した。

「雷真殿、朝餉あさげの支度ができております」

夜々の姉いりりだ。いりりは火垂はたるに気付いていたようで、厳しい目を向けた。

「ここで何をしている。殿方の寝室に侵入など言語道断だぞ。まして、私にひと言の挨拶あいさつもないとは……水臭いではないか」

すねているらしい。雷真はコケそうになりながら、

「火垂は学院長の使いなんだ。ちょっと今から行ってくる。夜々、準備しろ」

「はい！」

夜々は嬉し^{うれ}そうに手を挙げ、身支度を始めた。

「いりり、火垂の相手をしてくれ。俺は顔を洗ってくる」

「えっ、あ、はい——ほ、火垂、その、最近、どうなのだ？」

いりりが妙にぎこちない世間話を始める。火垂はうるさそうにしたが、まんざら嫌でもないようで、言葉少なに受け答えしていた。

二人の様子を微笑^{ほほえ}ましく思いながら、雷真は部屋を出て、洗面所に向かった。

顔を洗って、外を見る。夜の闇が薄らぎ、ぼんやりとした朝もやが広がっている。

（……長い一日になりそうだな）

いや、するのだ。雷真の頭にはもう、こなすべきプランが整理されつつある。

この《長い一日》を、できれば無傷で切り抜けなければならない。そうでなければ夜会で勝てず、引いては天全^{てんぜん}も倒せず、魔王^{ワイスマン}になれない。

（もう、俺一人の命じゃないからな）

この肩には相棒の命もかかっている。ひどい重圧だったが、不快ではない。不思議と力が沸^わいてくるのを感じながら、雷真は相棒のもとへ戻った。

自分が夢を見ていることを、シャルは自覚していた。

夢の中で、シャルは自分ではなく別の少女だった。プリュー邸の中庭、〈妖精の庭〉がある薔薇園で、泣きそうな気分になっている。

膝を抱えていると、誰かが声をかけてきた。

「シャーリー？ どうしたんだい？」

「伯爵さま……ぐすつ」

歴代のプリュー当主の誰か、だろうか。シャルは全員の肖像を見ているが、逆光がまぶしく判別できない。ただ、自分の胸が高鳴るのを感じた。

（この子……恋をしてる……）

シャルにもなじみのある感覚なので、すぐにわかる。この男性に心配されて、嬉しいのだ。若い伯爵は少女のとなりまできて、笑いかけてくれた。

「また個人教授のお願いにきて、断られたのかな？」

「……どうして認めてくださらないのでしょうか。私、真剣ですのに」

「すまない。母は厳格というか、潔癖でね。父はそれで追い出されたようなものさ」

「存じております！ ではつまり、私が不潔だから、ということですか？」

伯爵は困ったような顔をして、慰めるように言った。

「母の印章術は自学自習なんだ。君も自分で勉強してごらん」

不勉強を指摘され、少女は恥ずかしくなった。しかし、へこたれず、

「あの……でしたら、伯爵さまが教えてくださいますか？」

「私が？ うーん……実は私は、しばらく英国を離れるつもりなんだ」

少女は奈落に突き落とされたような気がした。

「な——なぜですか？」

「さて。私も母の厳しさに息が詰まったのかな？」

冗談めかした返事。不満が伝わったのか、伯爵は真剣な表情で言い直した。

「大陸に渡り、エレインさまの足跡を追いかけるつもりだ。プリュー伯爵なんて呼ばれても、まだまだ名前負けしているからね。その名に相応しい魔術師たるには何が足りないのか。先達の生き方に学んでみようと思うんだ」

伯爵の目はもう、少女を見てはいない。はるか彼方かなたの、まだ見ぬ異国に向けられている。横顔は澀刺はつらつとした魅力にあふれ、輝いて見えた。

自分のような小娘に止めることはできそうもない。だから、こうたずねた。

「次はいつ、お会いできますか？」

「そうだね。まあ数年は戻らないつもり——」

「……………っ」ぐすつ。

「……一年後に一時帰国するよ。そのときに会おう」

気遣ってくれた！ 少女は嬉しくなって、はしゃいだ声を出す。

「一年！ お約束ですね？」

「……いや、それはちょっと待ってくれ。旅先で何が起こるかわからないし」
「まあ、ひどい！ 子どもだと思って、その場しのぎのことを！」

怒って、笑う。伯爵に会えないのは寂しかったが、彼の優しさに包まれて、少女は幸福だった。自分はきつと待てる。一年なんて、あつと言う間だ。

だが、一年経っても、二年経っても、彼は戻ってこなかった。

そして三年目、彼が帰国したとき――

そのとなりには、少女の知らない、美しい女性の姿があったのだ。

『ちよつとシャル！ 寝ぼすけ娘！ いつまで寝てんのよ！』

罵声に叩き起こされ、シャルは覚醒した。体が上下にふわふわしている。ずいぶん不安定な場所で寝ていると思ったら、シグムントの背中だった。

眼下は見渡すばかりの海で、水平線に朝陽がのぞいている。冬の上空なので、凍えてもおかしくないが、不思議と暖かい。疑問に思っていると、守護精霊が怒った。

『私のおかげよ！ 自分で呼び出したくせに、守護精霊をなめてるの？ ああ、召し使
い扱いしてるってわけ？ さっすが、元貴族さまは違うわねえ？』

「ありがとう、ロッテ。おかげで凍死せずに済んだわ」

まったくお礼を言おうと、ロツテは舌を出して霧散した。どつと疲労がのしかかってくる。守護精霊は精霊使いと不可分の存在であり、当然ながら、魔力はシャルが支払う。

シグメントが感心したように言った。

「シャルよ。何気なくやっているが、これは大したことだぞ。通常、意識のない魔術師は魔力を放出しない。意図せず發揮してしまい、予知夢や騷霊現象を引き起こすこともあるが——君のこれはもつと自覺的なものだろう?」

「うーん……私も勉強が足りなくて、よくわからないのよね……。できるかなって思ったことができる。精霊術^{ジン・マストリー}って、万事がそんな感じよ」

「まさに『魔法』か。歴代のプリュー家当主は皆、精霊に親しんだものだが、君にはまた別の加護が働いているような気がする」

「プリューと言えど、^{やし}お邸の夢を見ていたの。あれは、お父さまの夢……だったのかしら? だとしたら、私が生まれる前の設定よね」

「ほう。ロツテが活動中に見た夢だ。単なる夢ではないかも知れん」

「本当にあったことかも、ってこと?」

「うむ。あの邸にはエレイン以後、幾人もの精霊感応力^{エゴリズムセンス}が沈着している。ロツテが記憶の残滓^{ざんし}を引き継いでいる可能性はある。どんな夢だった?」

「よく……思い出せないわ。切ないような——だけど、幸せだったようにも」

そのとき、進行方向の輝きに気付いた。

陸地が見える。湾に沿って街が広がり、家々の屋根が朝陽に輝いていた。

「リヴァプール！ 帰ってきたわ！」

灰薔薇と巨人ギユネスの暴威に耐え、機巧都市はいまだ健在だった。

仲間たちは見事、防衛しきったのだ。学院も消滅していない。

そちらの様子を探ろうと、精霊たちに働きかけ、意外な賑やかさに気付く。

学生総代オルガが中心となり、学生たちが崩れた道路を復旧させている。その作業の合い間に、決して少くない人数が、こちらの方角を気にしていた。

「どうやら、君の帰還を待っているようだな」

「えっ？ 私を？」

「驚くことはあるまい。君の集めた日光が、勝利に貢献したということだ」

寒気を吹き飛ばすくらい、あたたかな熱がシャルの胸に広がった。

「まだ発見されていないようだ。派手に凱旋といくか？」

「……いえ。高度を下げて。こっそり帰りましょう」

あるじ
主の心情を敏感に察し、シグムントは学生たちの視線を避けるように進路を変えた。

湾を大きく迂回して、低空飛行で市街地に入る。

学生たちの気持ちを、シャルは素直に受け取ることができない。

（だって今の私は……薔薇の手先だわ……！）

駅前広場に軟着陸。シグムントが仔竜こりゅうの姿に戻り、ぐったりする。一晩中飛んでいたの、彼も疲労の限界だ。シャルは仔竜を抱き上げ、そつと言った。

「無理をさせてごめんね。今日はお肉を奮発するわよ」

「……それはありがたい。寮に戻る前に、雷真らいしんを探るか？」

シャルは寂しい気分でかぶりを振った。

「ううん、いいわ——って、何で会わなくちゃならないのよ！ 何の義務よ！」

「安否の確認は自然なことだ。それに、会えるうちに会っておいた方がいい」

会えるうちに。その言葉が、嫌な重みをもってシャルにのしかかった。

「……それでも、会わない。今会ったら、きつと甘えちゃうもの。あいつ、今が一番大事なときよ。今夜ロキを倒せるか——明日マグナスを倒せるか」

彼の旅の集大成とも言える、最後の大舞台。この大事なときに、プリュー姉妹がまたも足を引っ張るなんて、そんなことはあつてはならない。

孤独な覚悟を抱き、忍び込むように学院に戻る。女子寮の裏手に着いたところで、友達ともだちの姿を見つけた。どうやら、シャルがそちらからくると知っていたらしい。

何もおかしいことはない。彼女は占術に長けた、いざなぎ流いざなぎりゅうの陰陽師だ。

「ヒノワ！」

シャルは小走りで友達のもとへ向かう。その途中で、日輪ひのわの表情が翳かげっていることに気付いた。急速に不安が広がるのを感じながら、あくまで普段通りに言う。

「大丈夫？ 寒くない？」

返事がない。だが、シャルはめげずに、微笑ほほえみかけた。

「私を待っててくれたのよね？」

「……はい。シャルロットさまにお訊ききたいことがあって……不躰ふしつけなのですが」

「何でも訊いて。私たち、友達でしょう？」

そうあって欲しいという願いを込めた言葉。だが、日輪は問いには答えず、切りつけるように、鋭く訊いた。

「シャルロットさまは、雷真らいしんさまを、好いていらつしやるのですか？」

シャルの頬ほおが、どうしようもなく熱くなった。日輪ひのわは雷真の婚約者——そう思うと、恥はずかしさと申し訳なさで、息ができないほど苦しい。

「やはり……そうなのですね？」

質問の形を取っているが、それはもう質問ではなかった。

「……ごめんなさい」

日輪は両手で口を多い、大粒の涙をこぼした。

鳴咽おえうをこらえている。シャルはいたたまれなくなり、そして疑問に思った。

なぜ、日輪が泣く？

雷真が彼女を大切に想おもっていることは、周囲の少女たちに痛いほど伝わっている。日輪に泣かれるのは心外だ。泣きたいのはむしろ、シャルの方……。

かすかな反発が伝わったのか、日輪は泣き濡ぬれた顔を上げ、強く言った。

「わたくしたち……もうお友達ではありません」

その言葉は、シャルの胸に深々と突き刺さった。

涙で視界がにじむ。それでも無理やり笑顔を作って、シャルは訊きいた。

「私……知らないうちに……貴女あなたを傷つけちゃったのかしら……？」

「……違います」

「じゃあ、私が……あいつのこと、好きになったから……？」

日輪はそうだと、違ちがうとも言わなかった。

ただ哀かなしい眼めで、こちらを見ていた。

説得は無意味なのだと、シャルは直観で理解する。上辺を取り繕って、無理に維持する友達ごっこに、意味があるとも思えない。だけど——もう本当にこれっきりなら、最後にこれだけは伝えたい。

「……ごめんね。でも私は、今でも貴女が大好きよ」

どちらかともなく、二人の頬を涙が伝う。

ごく短い時間、少女二人は泣きながら見つめ合った。

「間土里、きたりま征！」

日輪が転移の式神を召喚し、地中に潜る。

日輪の気配が完全に消えると、シャルはもう我慢できず、しゃくり上げた。

「ず、ずいぶん狭量きようりやうじゃないっ……同じ人を好きになっただくらいで絶交なんて！」

「……よせ、シャル」

「そんな心の狭い人、こ、こっちから……願い下げよ！ だって私、魔女に言い負かされて、言いなりで……こんな子、友達じゃない方がヒノワのため……っ」

「シャル！」

シグムントの語気が強くなる。これ以上自分を傷つけるなど、そう言っている。

それからシャルが泣き止やむまで、シグムントは辛抱強く待っていてくれた。

「少しは落ち着いたか？」

「うん……ごめんなさい……貴方あなたも、疲れてるのに……」

「気にすることはない。君が泣いているときは、泣き止やむまで側そばにいる」

そうだった。シグムントはこれまでも、ずっとそうしてくれていた。

嬉しいと思う一方、どうしようもなく寂しくなった。

この状況は、かつてと同じだ。雷真らいしんと出会う前、シグムントのほかに誰だれも頼ることができず、理解してくれる者もなく、孤独に耐えていたあの頃ころと。

「アンリに……会いたい……！」

「会いに行けばいい。だが、君が会いたいののは以前のアンリだな」

また涙が込み上げる。シグムントは苦笑して、あやすように言った。

「見たままが真実とは限らない。君たち姉妹と同じように」

「……ヒノワも薔薇ばらに利用されてるから、あんなこと言った……って意味？」

「人に言えぬ弱みを握られた可能性もある。であれば、ほかに理由をつけるしかあるまい。どのみち、今は互いに忍耐のときだ」

シグムントの言うことは、いつももつともだ。

シャルは孤独を胸に抱き、仮眠を取るため自室に向かう。

幸せな夢など見たくなかったのに、夢の中の妹と友達は、ひどく優しかった。

Chapter 1 望みを叶えられる者

1

事の発端は三日前にさかのぼる。

その日、シャルはシグムントを帽子に乘せ、学院を散歩していた。

新学院長グローリアを追放、ラザフォード復権から約一週間。各学部、寮とも機能を回復している。ただし、一部の被害は壊滅的であり、貴重な研究資料や実験器具を失い、すっかり意気消沈した教授もいるそうだ——イオネラのことだが。

シャルは学院復興の様子を横目に見ながら、シグムントに言った。

「学院はおおむね元通り。あとは……アンリのことだけね」

「あまり気に病むな。君まで臥^ふせってしまったては、アンリを支える者がいなくなる」
「わかってるわ。わかってるけど、五日も意識が戻らないなんて……」

銀薔薇から奪い返したアンリは、五日経^たっても眠ったままだった。

シャルはあきらめず、毎日医学部に通っている。今も病室に向かうところだ。

医学部に到着してみると、医師や看護師が駆け回っていた。

「何の騒ぎかしら？ アンリの部屋……の近くみたいだけど」

「アンリに何かあったのかも知れん。急げ！」

シグムントが帽子から飛び立つ。シャルも走ってアンリの病室を目指した。だが、病室に駆け込もうとするシャルの首根っこを、いきなり誰かがつかまえた。

「止まれ、シャルロット」

赤毛の女教授キンバリー。隠し切れない切迫感を漂わせている。

「キンバリー先生——放してください！ アンリに何があったの!?」

「騒ぐな。意識が戻ったんだ」

「本当ですかっ？ 早く会わせて！」

「面会謝絶だ。家族であつても、会わせることはできない」

「どうして!? せっかく意識が戻ったのに……！」

動揺するシャルの肩を抱き、キンバリーは論すように言った。

「アンリエットの体は健康だ。治療が済めば、すぐに会えるとも。今は専門家に任せろ。医学部の教授が総出で治療に当たっている」

「総出で？ どうして、そんな大掛かりな……？」

キンバリーは『しまった』という顔をした。その苦しげな顔を見て、シャルは急に冷静になった。キンバリーは決して意地悪をしているわけではない。何か、アンリとシャ

ルを会わせられない理由があるのだ。

シャルは大人しく聞き分け、頭を下げた。

「……わかりました。お心遣い、ありがとうございます」

「やけに聞き分けがいいな。素直すぎる君は、かえって不気味だが」

「それはもう一万回くらい言われました！」

キンバリーは普段の皮肉げな表情に戻り、シャルの小鼻を突ついた。

「そのくらい素直な方が魅力的だぞ。私は今から学外に行かねばならないのだが——学部長に念を押しておく。アンリエットは私にとっても大事なメイドだ」

優しい言葉に、少しだけ安心する。

キンバリーと別れ、きた道を戻りながら、シャルは医学部を振り返った。

「アンリ、大丈夫かしら……?」

シグムントがシャルの帽子に戻ってきて、慰めを言った。

「今、ちらりとのおいできた。あのぶんなら、悲観することはない」

「ほんと!? 元気だったの?」

「命に別状はないだろう。身を起こし、座っていた」

「よかった……! だけど、だったらどうして会わせてくれないのかしら?」

「意識を失う前、アンリの記憶は混乱していただろう?」

シャルが銀薔薇ばらたいじと対峙した、あのとき。アンリはグロリアの部下として、シャルの前に立ちはだかった。あのときのアンリは――

「機械みたいに冷たくて……それに、私たちがわからないみたいだったわ」

「記憶障害か、精神に傷を負った可能性もある。今すぐ君と会い、あれこれ言われるのは、必ずしもよいこととは言えない」

もつともだ。シャルはうつむいて、涙をこらえた。

「無力だわ……。いつだって、心はアンリの力になりたいのに……!」

実際は逆、なのかも知れない。今に限ったことではなく、シャルが側そばにいと、アンリは苦しくなってしまうのかも知れない。

思えば幼少のみぎりより、アンリはどこか、シャルに遠慮していた。

アンリがわがままを言ったことがあっただろうか？ 父母や祖母の前でさえ、常に姉を立てて、一歩引いていた気がする。

アンリにとって、シャルはどのような存在なのだろう？

ひょっとして、劣等感を刺激するだけの、疎ましい存在……なのでは？

「まさか、アンリが……私に会いたくないって……言ったのかしら」

「何を馬鹿ばかな。アンリが君を嫌っていると言うのか」

「だって、アンリの精霊術ジン・マスタリーを見たでしょう？ ラスターカノンを精霊力のみで弾はじい

た……あんな力を持つ存在、守護精霊に決まってるわ」

「その可能性は高いが……それがどうした？」

「生前、お祖母さまが言ってたの。守護精霊は精霊使いの心を映す鏡、使い手の心のありようを顕すんだって。ロツテは〈鏡〉の性質を持つ——それはたぶん、私の自己愛や虚栄心の顕れよ。だって私、子どもの頃からずっと思ってたもの。人からよく見られたいとか、誇れる自分でありたいとか！」

シャルは名門に生まれ、父の才能を受け継ぎ、際立った容貌を持って生まれた。それが知らず知らず、シャルの自尊心——悪く言えば自惚れを育てた。

鏡はおそらく、その寓意。白雪姫の例を引くまでもなく、自己愛は鏡を好むのだ。

「だから、ロツテはきつと、私の虚栄心」

「よせ、そんな言い方は。それに、それは必ずしも悪徳ではない」

「……確かに、こんなふうに言ったら、ロツテがふてくされるかもね」

シャルはちよびり反省し、もう一人の自分に心の中で詫言った。

自己愛や虚栄心が成長をうながすこともある。

誇りを持たなければ、気高くは生きられない。

シャルが正しく導いてやれば、ロツテは美德となり得る存在なのだ。しかし——

「アンリの守護精霊は〈壁〉か〈扉〉に視^みえたわ。きつと、自分を閉じ込めて生きてきたのよ。分厚い壁の向こうに気持ちを隠して……ずっと！」

妹にそうあることを強いたのは、姉のシャルでは？

シグムントは嘆息し、珍しく厳しい調子で言った。

「シャル。君のそれは優しさだろうが、過ぎればアンリへの侮辱^{おじよく}となる」

「ぶじょ——どうしてよ!? 私はただ、私の存在がアンリを傷つけるのかもって！」

「傷つくこともあるだろう。だが、常に氣遣^{きざい}ってもらわなければならぬほど、アンリはか弱い存在なのか？ まして、彼女が君の才能を憎み、失敗を喜ぶと？」

「——」

「彼女には彼女の人生がある。それは彼女のもので、君が代わってやれるものではない。過剰な氣遣^{きざい}いは、アンリを子ども扱いするのと同じだ」

シグムントの言葉は、シャルの胸に深く響いた。

アンリの人生はアンリのもの。立ち足^{たちあし}はだかる困難も、痛みも、劣等感も、アンリが己の力で乗り越えて行かなければならない。それはシャルの問題ではないのだ。

無力感を覚える一方、肩の荷が降りたような清々^{すがすが}しさもあった。

妹を信じるべきだ。シャルがロツテを受け入れたように、アンリもいつか……。

「もう考えるな。今は教授たちに任せ、アンリの快復を祈ろう」

「……そうね。もし先生たちにできないなら、やった本人に治療法を訊きましょう」

「馬鹿な！ 危険だ！」

珍しくシグムントが声を荒らげる。シャルは笑って言った。

「いきなり本人にぶつかるともいらないわ。王立協会に泣きつければ、GLRの内部資料を開示してもらえるかもしれないし」

「General Laboratory of The Royal Society——王妃お抱えの研究機関だな」

「エドマンド王は強欲よ。研究成果を狙って、とつくに接收しているはず」

「……やはり賛成しかねる。あの男にも関わるべきではない」

「まあ、いざとなればの話よ」

口ではそう言ったが、シャルは本気でその手段を検討し始めていた。

（おあつらえ向きに、ライシンが王さまと顔見知りだわ。仲介を頼んで……）

『愚息に問い合わせるような手間、要りはしませんよ』

合成音声でそう言われ、シャルとシグムントは硬直した。

ゆっくりと、恐怖に引きずられるように振り向く。

荒れた庭園の中央、かつて樹木の迷路があった場所に、彫像が立っている。

——いや、彫像ではない。金属の輝きを放つ、機械仕掛けの自動人形だ。

周辺の空気が黒く濁って見えるほどの魔性を帯びている。フェイスにあたる部分に聖

母の微笑が彫刻されていて、その美しさがかえって不気味だった。

『嬉しいではありませんか。そなたの方からわたくしに謁見を希望するとは』

「この人形、まさか……だけど、そんなわけ——！」

偽者を疑う。グロリアは軍に拘束されたはずだ。今も牢獄につながれているはず。

あたりの気配を探る。これが銀薔薇の自動人形なら、使い手が付近に潜んでいるだろう。しかし、それらしい人影は見当たらない。魔力が送られてくる気配も、ない。

「シャル……どうやらあれは、魔女の〈影〉だな」

シグムントが翼を広げ、油断なく相手の出方を見た。

「かつて見たことがある。本人はこの付近ではなく、遠方に身を潜めている」

「じゃあ、この人形は使い魔みたいなもの？」

それでも、大した度胸だと思う。つい先日、学院から追い出されたばかり。学内はまだぴりぴりしているのに、『国家転覆を謀った叛逆者』が使い魔を寄越すとは。

だが、考えようによつては、探す手間が省けたとも言える。

「丁度よかったわ。シグムント、この人形を捕まえましょ——」

言い終わる前に、もう人形が眼前に迫っていた。

とっさにシグムントを向ける。相手は魔力の盾を至近距離で展開し、射線を塞いだ。

ここでラストカノンをぶつ放せば、滅元素の吹き返しにシャルに降りかかる。

砲撃をためらった瞬間、機械人形は防御を解き、シャルの首をつかんだ。

喉笛に指がかかり、いつでも握りつぶせる体勢となる。

手もなくひねられ、シャルは愕然がくぜんとした。思い返せば、金薔薇アストリッドと対峙たいじしたときも、このくらいの力量差を感じた。かなり力をつけたつもりだったが、それでもまだ、魔女とはこれほどの差があるのか。

『性急なこと。静かになさい。妹に会いたくないのですか？』

「——!?」

人形はシャルの首から手を離し、穏やかな口調で言葉を続けた。

『わたくしは以前、そなたを愛せそうもないと言った。ですが、そなたには励む選択肢もある。わたくしの寵ちやうを得られるようにね』

「寵ですって？ そんなもの！」

『わたくしは何も、そなたに不正を働けと言うつもりはありません。むしろ、その逆
——手袋持ガントレットちに相応ふさわしい矜持きやうぢをもって、全力で夜会に臨みなさい』

「……どういう意味？」

『そなたが魔王ワイズマンとなるならば、妹を返してあげましょう。かつてのあの子をね』

まっすぐにシャルを見る。そして、意外なほど真摯しんしな声音こゑで言った。

『わたくしは神性機巧マシンドールの国外流出を防ぎたい。それが帝国の利益だからです。立場は違

えど、そなたもわたくしも、この国を愛する気持ちは同じはず」

そこは本当に反論できない。シャルはこの国を愛している。だからこそ、排斥はいせきされても国に留とどまったし、いつかブリュウの名譽を回復したいと願っていた。

しかし――

「お断りよ。魔女の言いなりになんて、ならないわ」

流されてはいけない。これが〈魔女の誘惑〉、これこそが連中の手口だ。

『では、夜会に手を抜くと？ それは不正ではありませんか？』

「仮に私が棄権したって、文句を言われる筋合いじゃないわ」

『あくまで逆らいますか……。まあ、妹の様子を見て、よく考えるがよい』

「へえ、会わせてくれるの？ 一体、どんな法外な代償を要求するつもり？」

『その程度に対価など求めません。好意で取りはからってあげましょう』

――のち後にわかることだが、このときの魔女の言葉に偽りはなかった。

叛逆者はんぎやくしやが何をどうやったのかは知らないが、シャルは翌日にはアンリとの面会を許され、変わり果てた妹の姿を目撃することになる。

さておき今、魔女は見透かしたようにこう言った。

『アンリエットの豹変ひょうへんは一時的なもの。以前の彼女を取り戻すことは可能です』

「ほ………本当？」

言ってしまったから、そのすぐるような声に、自分で腹を立てる。

「間違わないで。私は貴女あなたに従うわけじゃない。ただ……友達と約束してるの。ライシンを倒して、あいつの代わりにマグナスを討つって」

「わたくしはそれでも構いません。薔薇ばらの魔女は悪を為なすことも恐れませんが、契約には誠実なものです。悪魔がそうあるようにね」

本当、なのだろうか。自分の心が傾くのを感じ、シャルは戒めるように言った。

「私が魔王ワイズマンになって、軍に参加しても、貴女や黒衣帝こくいていが非道をお命じになれば、すぐ裏切るわよ。私はプリュー伯爵家のシャルロットなんだから」

敵対的な視線を叩たたきつける。だが、グローリアは怒らず、懐かしそうに笑ったのだ。

『潔いさぎよいこと。それでこそイライザの孫、エドガーの娘よ』

シャルは戸惑った。グローリアのその言葉は、本当に、ほんの少しだけ——
嬉うれしかったのだ。

2

雷真らいしんは火垂ほたるに導かれ、夜々ややと二人で学院長のもとへ向かった。

前に行く火垂の足取りに迷いはない。やや早足で、前だけを見て歩いて行く。黒基調のドレスは夏と同じで薄着だが、寒さを感じている様子はない。

「なあ、火垂」

「……………」

「無視すんな。昨日の実戦には参加しなかったのか？」

「答える義理はありません」

そっぽを向く。夜々はむっとしたようだが、雷真はむしろ微笑ましく思った。妹も昔、ケンカするたび、こんな態度を取っていた。

笑みがこぼれた瞬間、振り向きざまの貫き手がきた。雷真は軽くかわし、

「やると思った。沸点低いな、相変わらず」

「不愉快です。そのような卑猥な目で私を見るなど」

「卑猥!? 雷真~~~~~!」

「どこまでもお約束な連中だな! これは優しい目だっつってんだろ!」

雷真は乙女二人を前に押しやり、別のことを言った。

「火垂。夜会の前にさ、おまえのご主人さまに会わせてくれないか」

火垂と夜々が、まるで姉妹のように、そろって目を丸くした。

「……おまえがマスターを公然と襲撃するつもりなら」

「早とちりするな。言葉が通じるんなら、一度話してみたいと思ったただけだ。思えば俺は、あいつと一度もまともに話してねえ」

本当にただの一度も、兄の口から真相を聞いていない。

「色々訊いてみたいと思ってな。たとえば、火垂おまえが何者なのか、とかさ」

「私が何者であろうと、おまえには関係ありません」

「あるんだよ。おまえ、前に訊いたろ？俺とマグナスがどういう関係なのかって。知りたくないか、その答え。俺と、おまえが、ひょっとしたら——」

「そのような揺さぶりは無意味です」

火垂が振り返る。ヴェールの向こうには、意外に晴れやかな表情があった。

「私はマスターの造りたまひしスコードロン《戦隊》。それ以上でも以下でもない」

揺るぎない信念を秘めた声。かつて地下空洞で会ったときは様子が違う。あときは、マグナスの本意をはかりかね、迷っているようにも見えたのだが。

「そうか。……なら、いい」

揺さぶりが空振りに終わり、落胆したかと言えば、そうでもない。

（迷いが晴れてよかったな、火垂）

優しい気持ちで雷真の胸を満たす。焦らずとも、マグナスとの対決は間もなくだ。

雷真は宿敵のことを頭から追い出し、無言で火垂の後について行った。

火垂は学院長公邸ではなく、大講堂に入った。奥まった区画に進み、地下へと降りる。うす暗い通路を幾重にも折れ、複雑なルートでさらに深部へ。なぜこんな奥まった場所に案内されるのか疑問に思っていると、にこやかな挨拶が聞こえた。

「おはよう、ライシンくん。早朝から呼び出してすまなかった」

通路の奥、鉄扉の前に学院長が立っている。好々爺然とした笑みとは裏腹に、素手で熊を殺せそうな、圧倒的な迫力を醸し出していた。

「〈お遣い〉は果たしてくれたようだな。さあ、約束のものをこちらに」
その言葉に、雷真は応じる素振りを見せなかった。

男二人の視線がかち合う。二人の気迫に押され、夜々と火垂がじりつと下がった。

「……ふむ、確かにこれは公平フェアではないな。まずは入りたまえ」

学院長が鉄扉に手をかざす。魔力を放つと錠前が外れ、扉がひとりでに開いた。

あちら側には、こちら側と同じような、細長い通路が続いていた。

学院長に続いて扉をくぐる。火垂はついてこようとはせず、その場で一礼した。学院長は『ご苦勞』というふうに手を振り、魔力で扉を閉じた。

扉が閉まると、耳に痛いほどの静寂が襲ってきた。壁におぼろげな照明がともし、三人の影を頼りなく揺らす。歩きながら、ラザフォードとはけた調子で訊いた。

「体の調子はどうだね？ 灰薔薇との戦闘で負傷したのではないかな？」

「いや、俺は全然、大丈夫だ」

「それはよかった。薔薇の魔女に無傷で勝利とは、ずいぶん腕を上げたものだ」

夜々は誇らしげに胸を張ったが、今の雷真らいしんには皮肉にしか聞こえなかった。

「……俺一人じゃ、どうしようもなかったよ」

「謙虚だな。それがまた好ましい。この際だから、礼を言わせてくれ。ありがとう、君には幾度か助けられた」

「——俺が、学院長あんだを、助けたって？」

「そうとも。そして娘もまた君の世話になった」

「そっちはお互いさまだ。アリスがいなけりや、俺が戻る場所とはつくになくなって。金薔薇のときも、昨夜だって」

「そうだろう。そして、私も幾度か君を救っている。違うかね？」

「……ああ」

自覚している。政治的に都合の悪いこと、国際問題になりそうなことは、すべてこの男に押しつけてきた。それも〈お願い〉したのではなく、強制的に巻き込んできた。それはある意味、子どもが親を利用するのに似ていた。

「ええと……その節はドーモ……デシタ」

ラザフォードは吹き出した。薄暗い廊下に楽しげな笑い声が響く。

「なに、礼には及ばんよ。そして、私は言葉を信用しない。私自身が幾度となく、口先で他人を欺いてきたからな」

「詐欺師宣言かよ。まさか、今回のこれも詐欺ってことはねえよな？」

「ゆえに、言葉ではなく行動で見極める。君は実際に虚無石を奪還した。ならば私も行動で示さねばならん——入りたいまえ」

いつしか通路は突き当たり、大きな扉の前に出ていた。

先ほどの堅牢な鉄扉とは違い、細工が施されただけの木戸。封印されている様子もなく、ラザフォードは普通にノブをひねって開けた。

途端に、猛烈な魔力が噴き出してきた。地獄の熱波にあぶられたら、こんな脅威を感じるだろうか。恐るべき魔性に、夜々も雷真もとつさに顔をかばう。

部屋の内装は適度に華美で、暖炉とテーブル、毛足の長い絨毯、壁にはタペストリーがかかっている。地下深くに存在することをのぞけば、何の変哲もない応接間だ。

先ほどから感じている、恐るべき気配の発生源は、少女だった。

つややかな黒髪が美しい。椅子に浅く腰掛け、手袋をはめた手で優雅に紅茶をすすっている。肌は白磁のように白く、アイラインは黒。雷真と同年代に見えたが、まとう魔性は明らかに歳月を経た者のそれだった。

見た目と雰囲気とがそぐわない、このちぐはぐな存在に、雷真は心当たりがある。

「おい、学院長……！　こいつ、どう見ても薔薇の魔女……！」

かたんつ、と魔女がカップを置く。それだけで威圧され、雷真は口をつぐんだ。

魔女が顔を上げると、黒髪がさらりと揺れ、濃厚な蘭の香りが漂った。

「こいつとは無礼極まりますわね。常ならば、問答無用で殺しているところすわ」

夜々の体がたちまち強張る。ただし、戦闘が起ることはなかった。

「ですが、おまえはまだ殺しません。確かめたいこともありますしね」

「……確かめたいこと？　何だ？」

マスカラをのせたまつ毛の下で、黒い瞳が冷たく光る。それからたつぷり五秒、魔女は雷真を観察した。そして結局、『確かめたいこと』を言わなかった。

その代わり、見せつけるように左手の甲を突き出した。

薔薇のレリーフが施された金の指輪。雷真が持っているものと同じ意匠だが、散りばめられた石の色が違う。雷真のは蒼、これは黒。つまり彼女こそ――

「黒薔薇……！」

「そう。わたくしがセフィラ・バルゼル・アブラクサス」

控えめな胸に手を添え、魔女はにんまりと微笑んだ。

「おまえの望みを叶えられる、世界で唯一の存在ですわ」



同刻。魔術師協會リヴァプール支部の医務室で、キンバリーは目を覚ました。

昨日、灰薔薇から奪還した建物だ。補修作業の槌の音が聞こえてくる。

焦点の定まらない視界に、美しい東洋人の顔が突き出される。

「あら、もう気がついたの？　灰十字の戦士さまは不死身なのかしら」

花柳斎硝子。口がろくに動かないキンバリーは、「……だるい」とだけ答えた。

「それはそうでしょうよ。まだ麻酔が効いているわ」

「私は……どうなった……？」

「ご自分で見てみたら？」

手鏡を取り出して、キンバリーの周囲を見せてくれる。

まだ手術台の上だ。まず血で汚れたガーゼや鉗子が目に入り、次に自分の右腕が目に入り、そのまま視線を流してしまいたいようになって、あわてて戻す。

爆破されたはずの腕が、ある！　包帯を巻かれ、固定具で保護されていて、筋肉が落ちて貧弱だが、キンバリーの意志に反応して、指先がわずかに動いた。

「馬鹿な……！」

「まあ、ご挨拶。花柳斎の手業を『馬鹿な』ですって」

「どのくらい……経った……？ 私たちが、救出されてから……」

「まだ昨日のことよ。私たちが救出されたのは」

つまり、ほんの数時間で、もう腕がついている。つくづく信じがたい。

「そうか……フレイのガラムを……治療したときと……同じか」

この腕は人工細胞〈精瑠〉で合成されたものだろう。それにしたって――

「馬鹿げた……素晴らしさだ……！」

「それなら許してあげましょう」

硝子はおどけた調子で言った。

「だけど、そんなに感動しないで。それはまだ仮止めの段階。組織の定着には一週間以上かかるし、元通り扱うには何年も鍛錬が必要。それと、しばらく絶対安静ね」

「……貴女あなたのご厚意に感謝する。だが、私は……行かねば」

ベッドから転げ落ちそうになるのを、硝子が素早く支えてくれた。

「……貴女は馬鹿がお嫌いじゃなかったの？」

あきれたと言うより、怒った顔で硝子は言った。

「こんな体でどこへ行こうとおっしゃるの。無理をするともげちゃうわよ。この花柳斎がつけてあげたばかりの、究極の逸品がね」

「だが……私の可愛いメイドに……危険が迫っているんだ……リヴァイアサンがくる前に……行ってやらなければ……！」

意味がわからず、硝子は困惑したようだ。

だが、一から説明するのは守秘義務違反。キンバリー自身、手術の前に仲間の話を漏れ聞いただけで、状況が把握できているとはいえない。

それでも、もどかしさに身悶えしながら、とにかく訴えた。

「魔女がくるんだ……！ 急がなければ……あの姉妹が……消される……！」

「落ち着いて。とにかく外出は不可能よ。立って歩ける体だと思おうの？」

「ならば……立って歩かせてくれ……！」

「あきれた。坊やみたいな無茶を言うわ」

「……今でこそ、いっぱしの魔術師だが……私はもともと、無力な少女兵だった」

硝子が怪訝そうにする。キンバリーは自嘲を浮かべて、続けた。

「だから……なのかな。天の高みにある兄より、泥の中でもがく弟の方を……。輝かしい才能を持つ姉より、目立たない妹の方を……可愛いと思ってしまう」

魔術の世界は実力の世界。才あるものがもてはやされ、力なきものは無視される。

だからこそ。

「弱者が見捨てられてはいけないんだ……それは、強者が報われるのと同じくらい重要

な……もうひとつの〈世界の真理〉なんだ。私は……せつかくつけてもらった腕を捨てても、アンリエットを護りたい……！」

「――ずるい人。そんな、坊やみたいなこと言われたら」

硝子の唇が、ひとときわ優美な曲線を描いた。

「是非とも、手助けしたくなつちやうじやない」

「協力して……くれるのか？」

「この花柳斎かりゆうさい、仕事を途中で放り出すのは嫌いな。その腕の経過、見届けさせてもらうわ。それに――私もだんだん、貴女あなたが好きになってきたのかしらね」

キンバリーが先日言った言葉を、そのまま返される。心身ともに弱っているの、その言葉は胸に染み、柄にもなく涙腺がゆるんだ。

「……ありがとう。では、急いで学院に」

「無茶はいけませんね、鶯うぐいすの。せつかく拾ってもらった命ですよ？」

甘噛ががみのような叱責が飛んでくる。

部屋の入り口に、法衣姿の美少年が立っていた。その背後には、厳しい顔をした金の瞳の魔術師がいる。キンバリーの実質的上司、山鳩やまばとと呼ばれる男だ。

少年は無邪気な笑みを浮かべている。他方、硝子は警戒の目を向けた。

「貴方あなた……ここの地下牢ろうで一緒にいたわね」

「ご挨拶が遅れました。改めまして、私が〈時の翁〉フアザータム 教父ルドウィクス一七世です」

いっそ腹が立つくらい穏やかな声で、教父が自己紹介する。

「驚の彼女を救ってくださってありがとうございます。貴女の技術が禁忌かどうかはさておき——彼女が口走ったことを説明いたしましょう。リヴァイアサン——レヴィヤタンの方が通りがよいかも知れませんが」

「そうしていただけると助かるわ。それは自動人形？」オートマトン

「平たく言えば、そうです。ただし、昨日のヨルムンガンドや通常の〈伝説級〉レジェンズ のように、伝承になぞらえて造られたものではありません」

「伝説級でなければ、何だと？」

「〈神話級〉マイス です」

その単語が意味するところに、硝子しょうこも思い至ったようだ。

「……本物、だとも？」

「断言はできませんが。各地の洪水神話に関わるとされ、紀元前から在ると言われる最古の人形です。当時は自動人形という言い方をしませんでしたし、〈イブの心臓〉ルイ に類するシステムを持つのかどうかもわかりません」

教父は軽く首をすくめ、困り顔で微笑ほほえんだ。

「嫌になりますよね。いくら神性機巧の誕生前夜——〈予見〉された魔蝕の年とは言え、生みの苦しみにもほどがあります。金薔薇は〈万物流転〉と〈金の林檎〉。灰薔薇は虚無石の製法。黒薔薇は冥界の統帥権。そして銀薔薇は神話のレヴィヤタン——有力な薔薇は皆恐るべき秘法を隠し持っていて、それがこの土壇場で出るわ出るわ……」

そこで言葉を切り、茶目ちやめつ気けたつぷりに片目をつぶる。

「失礼、年を取ると愚痴っぽくなっていけませんね？」

「そこで同意を求めないで頂戴ちやうだい。それに、お年を召しているようには見えないわ」

「薔薇たちと同様、この姿にも秘密があるので。そのお話はまた今度にして——連中がレヴィヤタンを使うとなると、ですよ？ 推測される目的は、ひとつです」

「……何を、どうするとおっしゃるの？」

「全滅させるつもりです。この都市に存在する、生きとし生ける者すべてを」

室内の音が消える。硝子はキンパリーを抱いたまま、硬い声で訊いた。

「……そんなことをして、魔女に何の利益があるの？」

内部にいたからこそ、硝子には理解できないようだ。魔女は何より実利を求める。必要とあらば大量殺人も辞さないが、益のない殺戮さつりくにはコストをかけない。まして銀薔薇は英女王の地位を欲していた。自国で大量殺戮もないだろう。

教父は『ごもつとも』という顔でうなずき、厳かに言った。

「（最後の薔薇の狂い咲き）——ご存知かと思いますが、薔薇たちは夜会を使って賭け

をしています」

「そうらしいわね。金薔薇さまの遺産と薔薇株を巡って、と聞いたわ」

「それが彼らの思惑ならば、夜会の進行は邪魔すまい。武力闘争もあるまい。私たち長老連中は、そうたかをくくっていたのですが」

一旦言葉^{いったん}を切り、小さくため息をつく。

「よくも悪くも、金薔薇は上手く結社を取りまとめていました。彼女の不在で抑制が利かなくなつたようでして。今は直接的な手段も辞さない危うさがある」

「薔薇が、薔薇を……攻撃する？」

なるほど、都市を壊滅させるということは、ほかの薔薇の影響を排除し、学院をつぶし、滞在中のエドモンドや、この教父を攻撃するということでもある。いい方に転ぶとは限らないが、この一手にはリスクに見合うだけの実利があった。

「そう……だんだん読めてきたわ。その神話級とやらが実在したとして、神話に語られるような〈滅び〉をもたらすには、相当な腕前の魔術師が必要でしょう。誰にでも扱えるものなら、もっと早く、別の局面で繰り出していたはず……」

「さすがは人形師の先生。おっしゃる通りです」

「何の因果か、銀薔薇さまの手元には、類稀な資質を持つ精霊使いの姉妹がいる」

「特に妹の方はもうブリーユー始祖エレインのそれに迫る。彼女の代名詞〈精霊女王〉の資格さえ、その身に宿したと思います」

「……それが何だか私は知らない。だけど、貴方たちのやろうとしてることはわかるわ。可哀相な女の子が人類の脅威となる前に、消しちゃおうって魂胆ね？」

硝子は皮肉たっぷりに笑った。誰も否定しないので、今度は眉を吊り上げた。

「そんなの、うちの坊やが許さないわ。貴方の大事な〈予見の子〉が！」

「彼が食い止めてくれるなら、私としても不満はないのですが」

意外なことを言われる。鼻白む硝子に、教父は申し訳なさそうに付け加えた。

「先日、夢を見ましてね。今日あたり彼が血だまりに沈むという——ああ、これは予見ではありません。ですが、私は少しばかり、勘が鋭い方の魔術師でして」

勘が鋭いどころか、〈預言者〉の系譜に連なる予知能力者だ。もったいぶった言い回しにキンバリーは苛立ちを覚えたが、硝子はむしろ戦慄したようだった。

恐らく、これから、雷真の身に何かが起こる。

先の視えない闇の中、キンバリーは雷真と、そしてアンリの身を案じた。

（何だ、この状況……？）

悠然と敵地に座す黒薔薇。その自信と迫力に、雷真は完全にのまれていた。

となりの夜々もカチコチに固まっている。こうして向き合ってみると、敵の怖さがよくわかる。魔力の総量も、出力も、恐らくは積んできた場数も違う。

だが、雷真が本当に怖れているのは、魔女の強さではない。本当に恐ろしいのは、彼女の機嫌を損なった途端、希望の芽が枯れるという事実だ。

「……この魔女さんは、本物なのか？」

その問いには、魔女本人が答えた。

「無論、本物ですわ。悪徳の魔術師にそそのかされ、誘い出されたのです」

「悪徳とは心外ですな。私はこれで品行方正——とは言えますまいが」

二人が含み笑いを漏らす。会話はなごやかなのに、雷真の冷や汗は止まらない。

ほとんど本能で、確信する。これは、本物だ。

その前提に立ってみると、こんな地下室に呼ばれた理由がわかる。学院の魔女を招き入れているなど、世間に知られるわけにはいかない。

大人しく虚無石を差し出すと、ラザフォードはゆったり首を上下させた。

「確かに私が望んだものだ。奪われたものとは、別の品のようだが——確かに君は約束を果たした。今度は私が約束を果たす番だな」

黒薔薇ばらに向き直り、慇懃いんぎんな調子で語りかける。

「黒薔薇さま。貴女あなたがお持ちの〈レーテの水〉に関して、お願いがございます」

「ほう。一応、『何ですか?』とは訊きいておきましょう」

「浴槽いっばい一杯の量を融通していただきたいのです」

「それだけのためにわたくしを呼び出したと? この黒薔薇を?」

「恐れ入ります」

うやうやしく礼をする。雷真も頭を下げ、夜々ややもあわててそれにならった。

黒薔薇は穏やかな笑みを浮かべ、

「寝言は寝てから言うものですわ」

それから雷真を見やり、問い詰めるように言った。

「それとも何か、吊り合う代償を提供できますの?」

「……俺おれが提供できるものは、ない」

雷真はテーブルに両手をつき、ひたいをぶつける勢いで訴えた。

「だが、欲しい。どうか譲ってくれ。この通りだ!」

「お話になりませんわね。『何でもします』くらい、言えないものですか?」

「……言えない。あんたたちには……協力できない」

苦渋の末の、結論だった。雷真が結社に手を貸す選択肢はない。エドマンドに協力して王宮を襲撃した際、身に染みて感じたことだ。

「おまえ……いざとなれば、力尽^づくで奪えろと考えてますわね？」

「……できるかどうかは、わからない。ただ、やるしかないなら……やる」

挑戦とも取れる雷真のものいいに、黒薔薇は怒るのではなく、愉快そうにした。

「傲岸^{ごうがん}ですわ。ですが、はつきりものを言う子どもは嫌いではありません」

黒薔薇は愉快そうに笑って、ラザフォードに言った。

「では、ラザフォード。支払いはおまえ持ちですわね？」

「そのようすな。今すぐ私に差し出せるものとなると」

二人の魔術師の視線が卓上の宝石に行き着く。雷真はぎょつとした。

「おい！ まさか要石^{それ}を魔女さんに渡すつもりじゃねえよな……!?」

「そうであったとして、君に止める権利があるかね？」

言い返せない。だが、それはただの宝石ではないのだ。イブの心臓に関わる秘宝である以上に、ソーネチカが母から受け継いだ、言わば形見の品のはず。

ソーネチカは雷真^{らいしん}を信じてくれている。少なくとも、結社に手を貸すような人物だとは思っていない。彼女が託してくれたものを結社の魔女に渡していいのか。だが、そもそも夜々^{やや}のために譲り受けたものであり……。

雷真は煩悶した。自分では結論が出せず、未練たらしくラザフォードに問う。

「それを渡しちまって……大丈夫なのか？ あんたにも不利益は……あるだろ。ギユネスとかいうあの巨人の、制御に関わるとかって話……だよな？」

「君は約束を果たしたのだ。私もまた、約束を果たさねばならん」

真摯な口ぶり。夜々が感じ入ったように息をのむ。一方、雷真はラザフォードの狙いに今さら気付き、愕然とした。

これは誠意ではない。ラザフォードは最初から、こうするつもりだったのだ。

石を取り戻す見返りに、黒薔薇と交渉してくれたのではなく――

（黒薔薇と交渉するために、石を持ってこさせた……!?）

あっさり手放すということは、これはもう『なくていい』もの。要らないものを材料に、雷真に灰薔薇を倒させ、恩まで売りながら、レーテの水の秘密を得ようとしている。

（この狸親父……！ これなら、バカ王さまの方がまだマシだ……！）

エドマンドなら、『これからおまえを利用する』と宣言してくれただろう。最近の彼は雷真に対し、よくも悪くも正直なのだ。

果たして、黒薔薇はどう出るか。黒薔薇はゆったりとうなずき、こう言った。

「その石の価値を知らぬ愚か者ではありません。考えてあげましょう」

一歩、前進。雷真はほっとして、丁寧に頭を下げた。

「礼が遅れて、すまない。先日は水のおかげで、俺の相棒が命をつないだ」

「ふ、それを恩義と受け取らないような子どもなら、殺していましたよ」

「……おっかねえな」

「おまえはわたくしに恩があり、そして今なお生命線を握られているのです。そのことを忘れてはなりません」

「……わかった」

「灰薔薇を圧倒した手腕、見事でしたわ」

いきなり誉められ、雷真は面食らった。同じ結社の魔女、言わば彼女の『仲間』を倒したのに、誉められるとは思わなかった。

これはひょっとして——活路ではないか？

「ええと、黒薔薇……サマ？ 失礼を承知で訊きた……ウカガイたいんだが」

こんな言葉遣いを意識したことがあるだろうかというくらい気を遣い、
「だの『shud』だの『may I』だのを駆使して話す。」
[would]

「結社は今、夜会の行方に注目してる——らっしやる——んデスよね？」

ラザフォードの手前、ぼかした言い方をする。黒薔薇はすんなり首肯して、

「薔薇のお遊びが、どうかしましたの？」

「あんたとしては、ほかの薔薇が消え——いなくなっても問題ない……んデスか？」
「言葉に気をつけなさい。薔薇のいさかいなど師団の秩序を乱す愚行です。金色ババアを殺すだけならともかく！」

吐き捨てる。それだけで魔力が爆ぜ、黒い火炎のようなものが吹き上がった。

（『金色ババア』ってのは金薔薇……か？ 仲悪いのか？）

ヤブヘビだったか、と恐縮する雷真に、黒薔薇は意味深長にささやいた。

「とは言え、薔薇たちが勝手につぶれていくのは、わたくしの知ったことではありません。今の師団には……古馴染ふるなじも少なくなりましたしね」

一瞬、黒薔薇の表情に翳りが差したように見えた。

魔女にも『寂しい』という感情があるのだろうか。……いや、ないか。

「そう……デスか。ありがとう、よくわかった……ワカリマシタ」

今ので、二つのことを理解した。

ひとつ。雷真が今日これから魔女を襲撃しても、黒薔薇は気にしない。

もう一つはその逆。ほかの薔薇を蹴落としても、黒薔薇に支払う代金にならない。かえって覚悟が決まった。寝不足が気にならないくらい、気力が満ちる。

話は済んだと思ったのか、黒薔薇が立ち上がった。

「では、わたくしは戻ります。こちらにもいろいろと仕込みがありますの」

「今日の天気は荒れそうですね？」

ラザフォードの唐突な問いに、黒薔薇は亀裂のような笑みを刻んだ。

「大荒れですわ。せいぜいお気をつけなさい」

言い終わるや否や、床にいきなり断崖が生じた。灼熱の熱波とともに、下から巨大な骨の腕が突き出され、黒薔薇をわしづかみにする。

度肝を抜かれる夜々と雷真。異界を通じた転移と察し、雷真はあわてて言った。

「待ってクダサイ！ 水はいつもらえる？ 連絡手段は？」

黒薔薇は艶然と微笑み、こう言って笑った。

「おまえとはもう一度、今夜にでも会いましょう。では、ごきげんよう」

骨の腕が地獄の底へと引き込まれる。割れていた床がすぐさま復元し、何事もなかったように、再び静寂が戻ってきた。

5

黒薔薇の魔力が消え、彼女が存在した痕跡は飲み残しの紅茶だけとなった。

澄まし顔で座るラザフォードに、雷真は殺気を叩きつける。

「……やってくれたな、学院長」

俺たちを利用しやがって、と怒鳴りたかったが、雷真はこらえた。

それこそ、お互いさまだ。道中でラザフォードが言った通り、雷真と学院長はお互いに何度も利用し合ってきたのだ。ラザフォードは口ひげを持ち上げ、

「我慢を覚えたようで、大変結構。先ほどの黒薔薇さまの言葉ではないが、私も君の生命線を握っている。そのことは常に頭に留め置きたまえ」

「……わかつてる。協会に告げ口もしない。けど、これくらいは教えてくれ。昨日の巨人は何だったんだ？ あれが学院の神性機巧なのか？」

「斬新な学説だな」

「俺は灰薔薇と直接話した。あんたの野望の核心に、かなり近付いたと思ってる」

夜々が雷真の袖をつかみ、首を左右に振る。詮索するのはやめろと言っている。だが、雷真は構わず疑問をぶちまけた。

「あんたは灰薔薇に利用されたふりをして、虚無石を精製し、その秘密を解き明かして、あの巨人を生み出した。神性機巧を造るために——そうだろ？」

「その通りだ」

質問した雷真の方が驚いてしまう。あつさり肯定されるとは思っていなかった。

「……あれをどうすりゃ神性機巧になるんだよ？ あれは人造の靈魂なんだろ？」

一転、ラザフォードは沈黙した。雷真は焦れて、

「真円の完全体ってのは何だ？ 灰薔薇がやろうとしてたことは？ あの靈魂が入るだけの、強い肉体があればいいのか？ つまりそれが〈完全なる玉〉——」

一瞬、自力で真理に到達した気がした。

だが、脳裏を駆け抜けたビジョンは、とらえる間もなく消えてしまう。

「聞きたまえ、ライシンくん」

洪みのあるラザフォードの声が、一層低くなった。

「『知は力なり』——大魔術師ベーコンの言葉だ。真理は強大な武器と同じであり、持つべき者、持ち得べき者が持つのでなければ、地上に災いをもたらす。ゆえに、それが強大であればあるほど、真理は大衆に秘されるべきなのだ。〈秘儀〉オカルトというものは、太古からそうして守られてきた。兵器を例に考えてみたまえ。幼児に銃を与えることは正義かね？ 爆弾や毒物を自由に触らせることは？」

幼児にたとえた段階で、あちらに都合のいい論法だ。雷真は可笑しくなった。

「その考え方、協会の〈禁忌〉と同じだな。あんたが軽視しまくってるやつだ」

「……これは一本取られたな」

ラザフォードは塩辛い笑顔になり、ひたいを叩いた。

「人間は己を疑わぬものだ。自分の論には理があると思ってるし、己の価値基準を疑

わないし、トラブルに遭遇したときは、まず相手が悪いと考える」

「そりゃ極論すぎるだろ」

「美醜びしゅうにしても、芸術の論評にしても、人間は好き嫌いよと良し悪しあを混同しがちだ。私もまた無自覚に己の基準を信じ込み、私は禁忌に抵触しても道をあやまたない、と思いつんでゐるわけだな」

耳に痛い言葉だ。雷真らいしんもまた、自分の勝手な基準で、好き放題やってきた。

「私のことは私が責任を取ればいい。だが、大衆にまで広まってしまつてしまうと、とても責任を負えない。だから私は全力で秘密を守る。言っている意味はわかるかね？」

「おまえにも責任が取れないだろ、だから秘密を吹聴ふいちょうするな、ってことか」

「その通りだ。君も人々のため、君自身のために、秘密を守ってくれ」

雷真はうなずき、立ち上がった。

「巨人の話、ありがとよ。正直、ちよつとでも教えてくれるとは思わなかった。それに、あんたが本当に黒薔薇くろばらさんと交渉してくれるのかも、半信半疑だった」

「少しは見直したかね？」

「かなり見直した」

「それは何より。ほかに何かあるかね？」

「アリスに会わせてくれ。俺おれにはあいつが必要なんだ」

「雷真……っ、夜々^{やや}というものがありませんが……！」

ぴきぴきと夜々のこめかみに青筋が立つ。魔術師として腕を上げ、だいぶ考えの深くなった雷真だが、相変わらず夜々に関しては思慮が足りなかった。

引っかかり傷をこさえた顔で、地上に戻る。

「おい、そろそろ機嫌直してくれ。さっきのアレはちょっとかっこつけたただけだぞ。色恋的な意味はないぞ」

「……そのことじゃないです」

夜々はむすつとして言った。

「さっきの雷真、全然らしくなかったです。結社の魔女にへこへこして、へつらつて！」

「……今までが怖いもの知らず過ぎたんだよ」

「まさか、魔女さんが可愛い^{かわい}女の子だったから……!?」

「守備範囲外だ！ 絶対見た目通りの年齢じゃねえぞ！」

もつとも、年齢不詳の硝子^{しょうこ}に鼻の下が伸びるくらいなので、アテにはならない。

「おかしなもんでさ、今になってわかるんだ。シャルがアンリを人質に取られてたときや、お師匠さまがライコネンに堪^たえていたとき、どんな気持ちだったのか……」

あるときは、なぜ抗^{あらが}わないのか、なぜ戦^{たたか}わないのかと疑問に思った。
だが、今なら、わかる。

「人間、どうしても守りたいもんができると、ひどく慎重になるし——そのせいで判断を間違^{まちが}うこともある。気をつけねえとな」

「そんなに必要なんですか、その靈藥^{エリクサー}。夜々がこないだ浸^ひかった液体ですよね？」
きたか。夜々に勘付^{かんづ}かれないよう、細心の注意を払^はって言う。

「必要だ。まあ、保^た険^{けん}だな。硝子^{硝子}さんも欲^ほしがってる」

「時間を止めるんでしたっけ？ その水が今、必要ってことは……」

これはまずい。夜々^{やや}の思考がそこに行きつく前に、ごまかさなければ。

焦^こった結果、とっさに出たのは、真^まっ赤^かな嘘^{うそ}だった。

「〈戦隊〉^{スコードロン}をぶっ倒^{なでしこ}した後でさ、撫子^{なでしこ}の部品を保存したいんだ」

完全な出まかせだったが、口にした瞬間、雷真^{らいしん}自身が衝撃を受けた。

そうか——できる。レーテの水があれば、できる！

だが……保存してどうする？ 禁忌^{バンドル}人形にでも使うのか？

考え込んでいると、夜々が不満げに言った。

「……やっぱり、雷真らしくないです」

「さっきの話か？ あれは大人おとなになったと言ってくれ」

「つまらない大人です！」

「いや、ここから面白くするさ。今日はとびっきりの冒険をやらかすぜ」

「……すごく嫌な予感がしますけど……冒険って？」

「アリスの居場所を訊いたのはそのためだ。今日中に魔女を二人、片付ける」
薔薇ばらを焼き尽くしてでも仲間を護るまもる——その誓いを果たす時がきた。

相棒さほうが言葉を失う。雷真は不敵に笑った。

「藪やぶを突ついて、鬼と出るか、蛇じゅうと出るか——ひとつ、運試しと行こうぜ」

Chapter 2 奪え

1

シャルが銀薔薇の誘いを受けた、その日の夜。

ひのわ
日輪もまた、雷真には言えない、特殊な事情を抱え込むことになった。

「お祖母さま……！」

女子寮の一室。日輪の部屋に、〈お館〉こと土門綺羅がいた。

いざなぎ宗家の当主。還暦を過ぎてなお壮健で、日輪を余裕で上回る魔性を持つ。身の丈三メートルの鬼〈酒呑童子〉の膝に座り、日輪、昂、六連を見下ろしている。

「な、なぜ英国に、お祖母さまが……自ら……！」

「こんわけにはいかん。二、三日中に、あんたの婿を取りますよって」

「婿取り……わたくしが、ですか?」

突拍子もないことを言われた。昂も六連も、互いに顔を見合わせる。

「雷真さまと離縁しろ……ということですか？」

「『離縁』はおかしいな。とうに切れとる」

「しょ、承服いたしかねます！」

普段は口答えなどできない。だが、雷真らいしんのことだけは別だ。

「日輪ひのわは雷真さまの妻、その覚悟で生きております。今さらほかの殿方になど！」

「黙りよし。あんたの東京弁ことばは聞き苦しい」

「な、納得のいく説明をお聞かせください。どうして今さら、そんな話が……。紅翼くれつばの血を一門に迎える——元を正せば、お祖母おばさまが言い出したことです」

「元を正せば、あんたが言うたのやおまへんか？ 大人おとなしゅう嫁に行くてな。土門どもんの娘が、いっぺん口に出して言うたんやで？」

「そ、そのときとは事情が違います。雷真さまは生きてらしたんです。わたくしは結婚をあきらめる必要がなくなりました！」

「ああ、嫌や、嫌や。すっかり色狂いの目エしよる。嫁入り前の華族の娘が、はしたな。誰だれの影響ですやろなア？」

日輪はむっとした。綺羅きらは、雷真が悪影響を与えた、と言いたいのだ。

「そんなつまらないお話のために、お祖母さま自らいらっしゃったのですか？ わたくしの縁談をまとめるためだけに、英吉利イギリスに？」

挑発したが、祖母は揺るがず、薄笑いを浮かべただけだった。

「……どうしてもとおっしゃるなら、わたくし、家を捨てます！」

「あんたはほんま、自分のことしか考えんね」

「そ、そうです。わたくしはその程度の娘です。かような者にお館は務まりません。どうぞ、わたくしを勘当なさつて」

「通らあんっ！」

大音声。凄まじい風圧が飛び、日輪の上体をのけぞらせた。

「そんなん、通らへん。あんた、土門を潰す気かいな？　ひどい親不孝もんもおったもんや。あんたのわがままで、あんたの二親が顔つぶしますえ？」

「……………っ」

「蝶よ花よと育ててもらて、土門に何の恩も感じひんの？　ええ？　ちいつとの恩返しもできひんの？　ええ？」

「け、結婚は一生のことです。それに土門はつぶれません。わたくしのほかにも継ぐべき従姉妹、近しい家柄の者はおりますし——そや、昂かて！」

「阿呆言いな！　一度は跡取りで言われたもんが、色に迷うて御役目をほっぽり出す

——そんなん通るか言うてますのや！　看板に瑕がつく！　家名に泥がつく！」

「そ、それをおっしゃるなら、当初の発表通り、雷真さまをお婿さまにすべきです！」

綺羅はつれなくそっぽを向いた。

「言うて小僧の婿入りは、世間さまにも知られてへんし」

「嘘うそです！ 軍にも傀儡界くわいにも知れ渡っています！」

「知らんなア、知らん知らん。どだい、小僧がわての言うこと聞きますか？ 大人おとなしゆ

う掟おきてに従う？ いっとき《魔王殺しブラッドシン》とまで呼ばれた男やで？」

「それは……」

雷真らいしんは己の決断よに拠よつて生きている。理不尽と感じたら、掟おきてになど従わない。

雷真のような生き方は、集団に不協和をもたすこともある。まして彼は力をつけた。綺羅きらの態度から見て、どうやら一門の重鎮たちも、雷真を危険視しているらしい。

「……ほんに、惜しい話や。赤羽一門あちはんにとっても出来の悪い次男坊、使い道ができて、お互いええこと尽くづしのはずやったんになア」

「惜しいなら……惜しいなら……何で？ 何であきらめな、あかんの……!？」

「当主わてが決めたことや。あんたの意志は関係ないな」

鼻で笑われる。日輪ひのわは一度深呼吸して、表情を消した。

「……左様ですか。ではやはり、わたくしは土門どもんの名を捨てます！」

綺羅の肩から火炎が吹き上がったが、日輪はもうびくともしなかった。

それでどうやら、あちらもごり押しは逆効果とわかったらしい。綺羅は肺をからっぽにするような、深いため息をついた。

「手エのかかる子オやな……。まあ、しゃあないな、わての孫や」

一瞬、綺羅の怒りがやわらいだような気がした。

——気のせいだったのか、綺羅は小馬鹿にしたように笑った。

「今からゆうこと、よう聞きや。いざなぎの〈陰〉、教えたるさかいな」

一瞬、ぞくりと寒気がきた。日輪の卓越した第六感が、激しく警報を鳴らす。

祖母の言葉を聞いてはいけない——気がする。理由はわからないが、それはひどく恐ろしい……聞いたが最後、取り返しがつかない……何かだ。

「わてが何で小僧を欲したか。わてが誰で、何をしたのか。すっかり聞いたらな、あんたはもう小僧に会いたがらんようになる」

「まさか！ そのようなことはあり得ません。たとえ雷真さまが親の仇であらうとも

——両親ともにご存命ですが——日輪は雷真さまについていきます」

「ほう。裏切りも辞さん、ゆう覚悟かいな？」

「いいえ。雷真さまを裏切らないのです」

昂と六連が日輪を案じているのがわかる。だが、同時に、微笑む気配もした。二人と

も日輪の成長を感じたのだろう。そしてそれは、綺羅も同じようだった。

「泣き虫姫が、いっちょ前の口きくようになったわ……。けど、これは曲がらん。あんたがどんだけ惚れ^ほとつても——いや、惚れとるぶんだけ、小僧から遠ざかる」

「遠ざかりません。決して」

「ほな、ためしてみまひよか？」

あんど

侮^あるような視線。綺羅の挑発に、日輪は乗った。

「望むところです！」

愛情を盾に取られて、退^ひけるわけがない。だが、これが誤りだった。

耳を塞いでいれば、知らずに済んだ。知らなければ、幸せでいられた。

そのことを日輪^{ひのわ}が理解したのは、残念ながら、すべてを聞いた後だった。

2

「背中を向けなさい、アリス」

医局の奥の学部長室で、アリスはパーシヴァル教授の診察を受けていた。

言われるまま素肌の背中をさらし、冷たい聴診器にぴくりと震える。四、五か所ほどを探った後、パーシヴァルは息をつき、聴診器を外した。

「問題ないな。雑音もない」

「教授は大げさなんだよ。何ともないさ」

「そう思い込みただけだ。機巧師団に抗うためとは言え、あんな規模の魔素貯蓄を行うなど……。寿命が縮むぞ。おまえさんではなく、私のな」

「……ご心配をおかけしたね。今後は気をつけるよ」

グローリアとの戦いで、アリスは一か月ぶんの魔力を一度に運用した。溜めるだけなら問題ないが、その莫大な量を制御する際、どうしても肉体に負荷がかかる。

アリスの肉体の半分は機巧——魔力を生むのは生身の部分だけなので、魔術師として是不利な体だ。それでも第一級の力を持つのは、ラザフォードの魔性を受け継いでいるから。その才能が無茶を可能にし、かえって肉体を蝕む結果となる。

結果、あの戦いの後で高熱を出し、ずっと寝込む破目になった。

「容態が急変し、昏睡に陥ってもおかしくなかった。二度とあんな無茶をするな」

「僕が無茶をさせられたのは、パパが下手を打ったからさ。教授から嫌みを言っておいてよ。ちくちくと、できるだけねちっこくね」

根負けした様子で、パーシヴァルは苦笑した。

「言っておこう。ほかに気になるところはあるかね？」

「快調だよ。だから訊いておきたいんだけど——僕はあとのくらいもつ、」

カルテを書くパーシヴァルの手が、一瞬、止まった。

「あの日本人形を見て、不安になったか？ おまえさんの方はまだまだ平常。一年、二年でどうこうということはない」

「次の夜会には間に合わない、って意味だよね？」

「そういう意味では——」

「いいんだ。わかつていたことだから。それに、重要なのは次の夜会じゃない。
マシンドール
神性機巧ができるとすれば、この夜会なんだろう？」

「……アリス、ラザフォードはな」

重大な真実を含んでいた——かも知れない言葉を、不意のノックが邪魔した。

パーシヴァルは白髪をかきむしり、少々不機嫌になって訊いた。

「誰だ？」

「おいアリス！ ここにいるんだろ！」

ドアが開く。不作法に顔を出した者は、アリスの半裸を見て飛び上がった。

「うっわ何て格好——つか、パーシヴァル先生の部屋か！ スミマセンデシター！」

「許可する前に開けるなよ、馬鹿」

アリスは余裕ぶって応えたが、思わず胸を隠してしまっていた。彼にはもったきわどい姿も見せているのに、なぜだか、ちよつと……恥ずかしかった。

アリスが恥じらったので、雷真も調子が狂ったようだ。背中を向け、頭をかく。

「悪い、アリス……焦ってたもんで……」

「いえ、気にされることはありませんよ、ミスター・アカバネ」

廊下で待っていた従者のシンが、雷真の背後から澄まし顔で言った。

「お嬢さまは敢えてはだけて、貴方を待っていらしたのです」

「OK、シン、こっちにこい。そのトンチキな口を教授に縫いつけてもらおう」

シンは笑っている。近頃の彼は主をからかって愉しんでいるフシがある。

アリスは咳払いして、普段の余裕を取り戻してから、雷真に言った。

「言っとくけどね、僕は君からプロポーズを受けるまで体を安売りするつもりはないんだ。ギリギリ寸止めの誘惑は積極的にやっていく予定だけだ」

「そんな予定は即刻破棄しろ！」

「そんなふうに堅物ぶって、ソーネチカの誘惑にはメロメロだったじゃないか」
むすつとして言う。冷や汗をかく雷真の後ろで、夜々の髪が逆立った。

「落ち着け夜々！ やましいことは何もなかった！」

「先回りするのが逆に怪しい……！」

「学習の成果だったの！ それよりアリス、しばらくどこ行ってたんだよ？ 女帝さんの話が出ることは、昨日のドンパチを知らないわけじゃねえだろ」

そこまで言って、自分がどこにいるのか、思い至ったような顔をする。

「——おまえも具合、悪いのか？ まさか、ずっと入院して」

「ただの定期健診だよ。君の人形こそ、どうなんだい？」

アリスは巧妙に話をそらす。雷真はパーシヴァルに向き直り、深々と頭を下げた。

「言いそびれてたが、先生。いつぞやは世話になった。あの後、イオが何とかしてくれ
たよ。今はこの通り、俺の相棒も元通りだ」

「ああ……エリアーデがな。彼女は優秀な技師だ」

実はイオネラがやったのではない。アリスは内心、気が気ではなかった。修復したの
が彼の仇で、依頼したのがアリスだと知ったら、雷真はアリスを憎むだろうか？

（……嫌われることを畏れている？ この僕が？）

さっきの恥じらい方といい、あまりに自分らしくない。

気持ちを持て余していると、気を利かせたのか、パーシヴァルが席を立った。

「この部屋は好きに使いなさい。私は病棟に呼ばれている」

アリスはぴんときて、確かめるように訊いた。

「急ぎの患者かい？ 誰？」

「エリクサー霊薬中毒……と思しき患者だ。精神に変調が出ている」

やはり、アンリか。シャルを気の毒に思いながら、アリスはさらにたずねる。

「経過はどうなの？」

「よくない。だが、靈藥のサンプルが手に入りそうなのでな、どうにかする」

教授は現実主義者^{リアリス}で、確証のないことは言いたがらない。それが今、安心させるように言ってくれた。子どもの頃から知っているのも、アリスにとって教授は祖父のようなもの——向こうにもそういう気持ちがあるのかも知れない。

教授が去ると、雷真^{らいしん}が教授の席に座り、アリスの顔をのぞき込んできた。

「やつと会えたな、アリス。もう逃がさねえからな！」

アリスの胸が弾む。しかし顔には出さず、そっけなく答えた。

「よくここがわかったね。僕^{ぼく}がたまたま診察を受けてるなんて、君が知っているはずはないだろう？」

「学院長に訊いたんだ。連絡手段くらい教えとけ。何が『動く前に連絡しろ』だよ」

「……悪かったね。僕は僕で忙しいんだよ」



「なら、あのときの約束はまだ有効か？ 俺の手助けをしてくれるか？」

「おや？ やつとわかったのかな、僕が必要ない存在だってことにさ」

「おまえがいてくれなきゃ、俺は死んじまう」

アリスの頬が熱くなる。反比例して、夜々の視線が冷たくなった。それに引きずられるように、アリスの心も急激に冷める。

（この馬鹿、それをその意味で言っていないからね。むしろ僕が殺したくなるな……！）

「あと、確かめたいこともあった。夜々の修復の件でさ」

「そのことなら、エリアーデ教授が説明したはずだけど？」

「ああ、聞いた。けど、イオのやつ、何か隠してるだろ」

さすがに鋭い。アリスは舌打ちした。

（そのカンのよさを、どうして女心の把握に生かせないんだろうね……！）

「……な、何を怒ってたんだ？ また俺、何かやらかしたのか？」

「別に！ 何も！」むかむか。

「金剛力の埋め込みは、イオがやったんだよな？」

その質問が出る時点で、雷真はもう別の可能性に気付いている。

どう答えればいいのかだろう。沈黙していると、雷真が不審そうに訊いた。

「黙っちまって、どうした？ やっぱおまえ、具合が悪いんじゃない……？」

脈を取ろうとしたのか、雷真の手が伸びてくる。反射的に機械義肢を引っ込めてしま
い、アリスはそんな自分に驚いた。

「あ、悪い。こっちの手は……」

雷真がしくじりに気付いたような顔をする。アリスは笑って、

「手を取るなんて、婚約指輪でも嵌めてくれるつもりだったのかな？」

「ものすごい飛躍したぞ！ その論法だと俺はフォークダンスも踊れないからな！」

「君の相棒はちゃんと動いてる。それはカリューサイも確認済みなんだろう？」

「まあ……な」

「なら、手術の詳細なんか聞いたところで、仕方がないじゃないか」

「そう……だけだよ」

「君が考えているよりエリアーデ教授は優秀ってことだよ。そんなことより、今日は何
をやらかそうって言うんだい？ 剣帝けんていと暴竜テレックスを試合前に闇討ちするかい？」

「闇討ちはする。相手は薔薇ばらの魔女二人だ」

さすがのアリスも、これにはあごが外れた。

意味はわかる。意味はわかるが——こいつは何を言い出したんだ？

「……頭のネジが飛んだかな？ 夜々、君が首を締めすぎたんじゃないの？」

「俺は正気だ。今日中に、魔女二人を倒す。それで、あいつらを救ってやれる」

「シャルロットと、イザナギのプリンセス？」

「そうだ。今度こそは先手を取りたい。……ま、とつくに後手だけだよ」

連中の接触を許した時点で、後手に回っている。だが、雷真は昨日まで皇女ソーネチカを護るので精一杯だった。彼を責めることはできない。

それでも、今日の無謀は責めていい。アリスは厳しく軽拳をとがめる。

「前の時を思い出せ。銀薔薇一人を追い出すのに、あれだけ大掛かりな仕掛けが必要だったんだよ？ 二人同時なら手間は膨れ上がる。それも完全撃破、まして今日中になんて不可能だ。敵の本拠地にどうやって乗り込むつもり？ そもそも」

雷真の胸ぐらをつかみ、引き寄せる。

「君には倒すべき宿敵がいるだろう。魔女を二人も敵に回して、無傷で切り抜けられると思うの？ 腕の一本でも折ってみろ、夜会で剣帝にねじ伏せられるぞ」

雷真はぼかんとしてアリスを見た。アリスはぼつが悪くなり、

「……何だい、阿呆面で」

「いや、本気で心配してくれてんだなと思ってさ。ありがとよ」

いい笑顔で言う。説教を聞く態度ではない。アリスは赤面し、雷真の胸を突いた。

「おいシン。この馬鹿を蹴飛ばして、目を覚ましてやれ」

「ミスター、お嬢さまはもったいぶっているだけで、もう完全に乗り気です」

アリスは座っていた椅子をつかみ上げ、シンに投げつけた。シンの〈完全統制振動〉の前では小石を投げたほどの威力も生まず、椅子はあっさり受け止められる。

だが、確かにシンの言う通り、アリスはもう手段の検討を始めていた。

「……ほっときや一人でやるんだろうし、手伝うしかないだろう。僕を頼るようになっただけ進歩だよ。プリンセスもシャルロットも、知らない仲じゃないしさ」

「助かる！ この際、接吻くらいするからよ！」

ばちーんつと雷真の頬が鳴る。……つい、横っ面を張ってしまった。

「つてええええ！ 今本気で殴ったな！ 頬骨が碎けるぞ！」

「どこまで唐変木なんだい、君は……！ そんな言い方されて喜ぶ女がいるか！」

この男の顔をポコポコにしてやりたい。こんな馬鹿野郎に心底惚れ込んでいるのだから、感情というのはままならない。

夜々がつついと進み出て、わけ知り顔で謝った。

「すみませんアリスさん、雷真ったら本当に女心をわきまえなくて……。夜々の誘い受けもことごとくスルーで最低なんです」

「便乗して不満を言うな！ あとそれは別に最低じゃねえ！」

アリスは腕組みをして、早速、自慢の頭脳を回転させた。

「協力するとしても、絶対的に時間が足りない。市外に出張してる暇もない」

「こっちが行けないなら、あっちにきてもらうのはどうだ？」

「つり出す？ いい着想だけど、相手が大陸じゃ手は出せないよ」

「魔女は近くに潜んでる。あるいは、すぐに出張れる手段を持つてるはずだ」

「へえ。一応訊くけど、その根拠は？」

「連中は夜会を使って賭けをしてる。近くにいなけりゃ、駒の手綱がさばけない。脅し
て言うことを聞かせるにしても、近くにいないと逃げられる」

合理的な推論だ。シャルや日輪^{ひのわ}ほどの魔術師を言いなりにしようと思えば、監視の目
が行き届いていなければならぬ。

「まして連中の狙いは神性機巧^{マシンドール}——誰^{だれ}が手に入れるとしても、最後の最後、力^づ尽くで奪
い取る手が残ってる。なら当然、この近くで様子を見ているはずなんだ」

「いい読みだね。僕^{ぼく}が魔女なら、確実にそうしてる」

策士二人の意見が合う。アリスの頭ではもう、必要なピースは埋まりつつあった。雷^{らい}
真^{しん}が知らない情報も握っているのです、誰の背後に誰がいるのかも予想できている。そし
て、雷真が置かれた立場も、既に見当がついていた。

先ほど雷真は「魔女二人を倒す」と言った。三人ではなく。

（気付いているかい？ 君自身、もう黒薔薇に取り込まれつつあることに）

灰薔薇はいばらが消えた今、主だった薔薇は黒、銀、紫の三人。銀と紫を排除できたら、黒薔薇対エドマンドの決戦となる。奇しくもそれは、ロキ対雷真の構図だ。

（黒薔薇は白い姉弟を抱えている。その上、ライシンにも手を伸ばしつつある……わけだ。確かに、銀薔薇と紫薔薇しばらだけでも、今日中に排除してしまった方がいいな）

雷真の感覚は正しい。夜会の終幕前に、魔女を撃滅するのが利口だ。

「やっぱり気が合うね。僕と君が夫婦になれば、世界征服も可能じゃないか？」

「征服するな！ それに、夫婦じゃなくても協力できるだろ」

「僕のやる気に関わるんだよ。よし——それじゃ最初の作戦を教えるよ」

「頼む。俺おれたちはどうすればいい？」

アリスが語った〈作戦〉を聞いて、今度は雷真と夜々ややのあごが外れた。

3

『お嬢、そろそろ車くんで』

扉の向こうから、ノックとともに昂たげる声がする。

日輪はほんやり顔を上げた。どのくらいの時間、心を閉ざしていたのだろう。窓から

見える太陽は、もう高い位置にある。

昨夜は一睡もできぬまま、綺羅の魔術で学外に避難させられていた。

学友たちの危機を前にして、何もさせてもらえなかった。

唇を噛みしめていると、扉が開き、昴が入ってきた。

「着替えは済んどったか。にしても、なんちゅう小汚い顔や。今からおまえの——」
少し、ためらう。だが、昴は普段通りの笑顔になって、続きを言った。

「旦那さんに会うんやぞ。しゃきつとしいや、しゃきつと！」

「……一体、誰やろね。英国にいてはる人で、土門と吊り合う家柄なんて」

「さあな。軍の人かもわからんし、英国の偉い人ゆうセンもある。同盟国やしな」
その可能性はある。そのくらいの手回しを、綺羅はやってのける。

「ま、すぐに知れるやろ。今から会うてくれはる」

「そ……やね」

うつむいてしまう。昴は一瞬、気の毒そうに顔を歪め、話題を変えた。

「お嬢、今朝方出かけとったな？ 雷真にちゃんと挨拶できたんか？」

「勘違いやめて。雷真さまには会うてへんもん」

「何やて？ ほな誰と——いや、それはええ。おまえ、雷真に言わんで行く気か！」

「言えへんやん！」

ベッドを叩く。日輪はすぐに冷静になり、消え入りそうな声で謝った。

「……かんにん。昴が悪いことあらへんやんね。みんな、うちのせいやのに」

「そや。何もかもあんたのせいやで、日輪」

冷たい言葉が飛んでくる。支度を終えた綺羅が、ひっそり廊下に立っていた。

きちんと結われた髪、友禪染の着物が艶やかだ。

昴が畏まり、顔を伏せる。綺羅は昴に愛想笑いを投げ、厳しく日輪を見た。

「昨夜の試合を見てみい。式王子までお招きして、なんちゅう無様な負け方や。あんたあんとき、いざなぎの看板背負おとったんやで？」

「――」

「『傀儡なんてアテになりまへん、今も昔も日の本はいざなぎの式がお守りします』

わてらがそう言うて守てきたもんが、全部うそやないか。しょーもな！」

許されざる敗北であることは、日輪にも理解できていた。

日本最強を自負するいざなぎ流が、その秘術まで持ち出して、ロシアの機械人形に敗北した。式王子を使わなければ、また印象も違っただろうが……。

昨夜の日輪はすっかり集中を欠いていた。その原因は綺羅の語った（いざなぎの陰）にあるのだが、それを言ったところで言い訳にしかない。

「ほんま口ばっかやで、あんたは。肝心の業前がからきしや」

日輪の視界が涙でゆがむ。やはり何も言い返せない。昂もこぶしを固めている。……彼も悔しいのだ。だが、やはり彼にも口答える資格はない。

「あんたはここらが潮やな。魔性が足らんなら、やや子を生む道具になり」

「……………!？」

「わてが一七のときには、もう御影にお乳やつとつたで。いざなぎ一門はわてが守りま
すさかい、あんたは早う、旦那さまの子を身ごもりや」

日輪はきつく奥歯を噛んだ。完全な道具扱い。これほどの屈辱を感じるのは、生まれ
て初めてだ。だが、それも甘受するしかない。いざなぎ流は力こそがすべて。力なき者
の言い分など、石ころほどの価値もない。

日輪はもう反抗せず、綺羅に従い、廊下に出た。

考えても無駄なら、考えるのをやめよう。苦しいだけの感情なら、殺してしまおう。
日輪はもう、雷真の側にはいられない。

日輪の願いは、彼が無事に、生き延びてくれることだけだ。

虚ろな心に、ふと、早朝のシャルの涙が甦った。

(シャルロットさま……泣いていらした……)

友達ではないと言ったら、シャルは泣いた。そのくらい日輪を好きでいてくれた。
鈍い痛みが胸を刺す。シャルの清純な心に比べると、自分の行動はあまりに醜い。

『今でも、貴女が大好きよ』

（わたくしだって、貴女が好きです！）

好きだからこそ、耐えられなかった。日輪は雷真への想いを断ち切らなければなら
ないのに、シャルはこれまで通りまぶしく輝き、雷真の側にあり続けるなんて……。

今まで通りにシャルと付き合うことは、とてもできない。それでは自分が惨めすぎ
る。もちろん、シャルを拒絶したことも、同じくらい惨めなことだけれど。

にじんだ涙を硬い指が払ってくれる。それは昂の人差し指だった。

昂は氣遣わしげに微笑み、軽口っぽく言った。

『荒んだ顔すな。花嫁のツラやないえ』

「……昂、ありがとう」

「ええ、ええ。おまえはいざなぎ一門を背負って立つ女や。この先もずっと俺らが護
る。俺や六連がな——って、あいつどこ行きよったんや？」

そう言えば、先ほどから六連の姿が見えない。綺羅の耳がぴくりと動いたが、特に何
も言わず、平然と階段を降りて行った。

外の車停めに自動車が待っていて、綺羅がさっさと乗り込む。

日輪も乗り込もうとしたとき、柱の陰から男子学生が現れた。

「お嬢、待ったってください」

普段のおとぼけとは違う、覚悟の決まったような顔で、六連が日輪を見つめている。彼らしくない気迫に、日輪も昂も気圧された。

「……六連？ 何やの？」

「僕はこの縁組に反対や。お館さまには従われへん。昂もそやろ？」

「はあつ？ そんなん言うて、おまえ……何する気いや？」

がこんつ、と金属音が鳴り響き、自動車が浮き上がった。

無論、ひとりでに浮き上がったのではない。誰かが持ち上げている。

犯人は、長い黒髪が綺麗な、和装の乙女だった。

「あれは——夜々さんっ!？」

仰天してしまう。綺羅の乗った自動車を夜々が持ち上げ、ゆさゆさ揺さぶっている。

運転手は恐慌をきたし、座席にしがみついている。百戦錬磨の綺羅でさえ、突然の出来事に狼狽しているようだ。日輪の横で、昂があんぐりと大口を開けた。

「な……んの騒ぎや、これは！」

「悪いな、騒がせて」

日輪ひのわと昴すばるの背後から、知っている声が聞こえた。

気配を完全に殺して、赤羽雷真あかばならいしんが立っていた。

破顔はがん一笑いつしやう。彼はいきなり日輪を抱え上げ、生き生きとして言い放った。

「俺おれの方が先約なんだ。花嫁、もらってくぜ！」

4

先刻、アリスが語った〈作戦〉は――

「プリンスを誘拐しろ。虎口こうこうに突っ込んで、掠め取ってくるんだ」

という、極めて無法なものだった。

相棒の夜々ややは肝をつぶし、雷真もまた若干の怯みひるを感じている。

「日輪を誘拐……って、それはさすがに乱暴すぎねえか？」

「どの口で言うんだい？」

「――だな。俺が前、おまえ相手にやったことだった」

アリスとシンをつり出すため、アンリを誘拐したことがあった。

當時を思い出したのか、アリスはやけに色っぽく微笑ほほえんだ。

「僕たちが運命的な出会いを果たした、あの夜だね」

「何が運命だ！ あやうく俺は殺されかけたぞ！」

「燃える恋に相応ふさわしい展開じゃないか。そのノリでプリンセスも誘拐しちゃえて話だよ。僕らに必要なのは、とにかく戦力みかただよ」

言われて、雷真もアリスの意図に気付く。

「今日は、ずいぶん味方が少ない……」

「そう、キンバリー教授は重傷という話だし」

「こっちから仕掛けようってのに、傍觀主義の協会が手を貸してくれるわけがねえ」

「学院もまた、是が非でも夜会を進めたいから、藪やぶを突つくような真似まねはしない」

「当たり前だが、当事者のシャル、日輪、たぶんロキとフレイも動けない」

「それどころか、彼ら〈魔女の手駒〉は、魔女の味方をするかもしれないね」

「となると、アテにできるのはイオとお師匠さま……だけか」

二人とも頼れる教授だが、たったの二人だ。

だからこそ、味方が要るのだ。勝算のわずかな戦いに命を懸けてくれる者が。

「なるほどな……。日輪をさらって、こっちの味方に引き入れると」

「彼女は君にぞっこん。今は義理と人情の狭間はざまで揺れている状態だけど、君が危険を冒

し、颯爽と助けにきてくれたら、断然こっちになびくだろ」

「何か……乙女心を利用するみたいで、気が進まねえな……」

示し合わせたかのように、夜々とアリスが雷真を突き飛ばした。

「何すんだよ!？」

「どの口で言うんだろうねえ、本当に……!」 「雷真は馬鹿ですつ……本当に!」

二人がかりで責められ、雷真は情けない顔をした。シンがくくつと小さく笑う。

「魔女を二人倒すって言うなら、プリンセスは絶対に必要だ。機巧師団とやったとき、僕は彼女の力を把握してる。彼女となら、どんな手品もやってみせるよ」

いざなぎ流は一騎当千、多彩な式神を多数展開できる。日輪はアリスの戦略を最大限に生かせるし、日輪の術を最大限に生かせるのもまた、アリスだ。

「とりあえず、僕も彼女の従者にコナをかけてみる。二人のうち、片方だけでもこっちにつけば、プリンセスの外堀が埋まるだろう」

雷真は納得して、片方だけ残った魔石のイヤリングをアリスに渡した。

「連絡がつくようにしよう。こいつはおまえが持っていてくれ」

通信用の魔具。アリスにもなじみのある装備のはずだ。アリスはにやりとして、

「愛の直通回線ってわけだね?」

「雷真、夜々にも! 夜々にも赤い糸電話をください!」

「おまえ四六時中一緒じゃねえか！ あとこれ、つながってるのはイオだぞ!?」
夜々の機嫌が悪くなる。ついでにアリスの機嫌も悪くなった。

「もういっそ、この男の口と肛門こうもんを最短で直通させてやろうか」

「アリスおまえまで何を怒ってんだ！ ああもうわけがわからない！ とにかく、言われた通りにやってくる！」

かくして、雷真はあの部屋を飛び出し――

こうして、日輪をさらいにきたのだ。

雷真に抱き上げられたまま、日輪は何度もまばたきを繰り返す。状況が飲み込めず、戸惑戸惑っているらしい。昂たはるもまた、同じような顔をしていた。

彼らの眼前では、綺羅きらを乗せた車が、夜々に持ち上げられている。運転手が転げ落ちるのを待って、夜々はむんつと自動車を投げ飛ばした。

車は石ころのように軽々と、工学部校舎の向こうまで飛んでいく。校舎の向こうで土煙どけんが上がり、激しい破碎音が響き渡った。

エンジンが爆発し、黒煙を噴く。昂おがあきれたようにつぶやいた。

「やりよった……お館さまにあんな狼藉ろうじき働いて……日本に帰られへんぞ……!?!」

「チャンスや、昂！ お嬢連れて逃げまひよ！」

六連が昴の手を引く。昴は当然、怒り出した。

「六連もグルか!? 何しとんのや!」

「雷真はんの気持ちやで! 無下にしたらあかん!」

「そうだ昴。さっさと、ずらかろうぜ」

雷真らいしんがそう言うのと、昴すばるはつかみかかってきた。

「雷真! こんど阿呆あほう! そんなん許されるか! お嬢返せ!」

そこに六連むつらが割り込み、雷真と昴を引き離しにかかる。

「そんな義理ありませんて! お館さまはよそもんを婿に——昴やのおて!」

「それが何や! 俺おれは御家老衆、加茂家の男や! お館さまには死んでも弓引かん!」

雷真の胸がぐつと詰まった。彼の想いおもを知っているだけに、ことさら感じるものがある。日輪ひのわがほかの男のものになるとわかっていても、昴は一門を裏切らないのだ。

「昴……その考えは立派だがな、おまえはもうちよい頭を使え」

「ちよおおお!? 雷真おまえにだけは言われたないわ阿呆!」

「日輪がお館になっちまえば、こんなの、裏切りでも何でもなし」

とんでもない爆弾発言に、昴も、日輪も、絶句した。

「いつかは日輪が継ぐ。政権交代は約束された未来だ。なら、少し予定を繰り上げよ

う。日輪がお館になっちまえば、この謀叛むはんもヤンチャで済む」

「おまえ、そんなん言うて……責任取れんのか？ 縁談ブチ壊して、お館さま放り投ほうりなげて、挙げ句クーデター起こせやなんて……一生、お嬢を護まもる覚悟やな？」

「……それは後で考えよう。今はここを離れて、日輪の安全を確保するのが先だ」
思い込みかもしれないが、日輪と昴の顔に失望が浮かんだような気がした。

二人の沈黙がつらい。ともかく離脱しようと、夜々ややに魔力を送る。

「夜々、しんがりを頼む。すぐに婆ばあさまがくる——」

「ああ、あ、何や、変になりそやわア。車は飛ぶ、阿呆は出よる」

遅かった。ざり、ざり、と草履が地を踏む音がして、土門綺羅どもんきらが戻ってきた。

無論、無傷だ。和装に似合いの静かな歩調だが、全身から黒い火炎が噴ふき上がり、一歩ごとに石畳が焦げる。濃密な瘴氣しやうきに当てられ、雷真の首筋に鳥肌が立った。

「久しぶりやね、赤羽あかばねの小せがれ」

「……ああ。ご無沙汰ぶさたしてるぜ、婆さま」

「若いゆうのんはうらやましいわア。何も考えんと口きけますさけ」

言葉遣いになってない、品のない小僧だ、と言っている。

「生まれが卑いやしいもんでね。そのくらいは大目に見てくれ」

「その卑しいお人が、華族に何の御用どす？」

「見ての通りさ。日輪をもらいにきた」

「ええ度胸やなア……ほんになア……そんなん……」

綺羅の撫で肩が上下する。笑っているのかと思った、その直後――

「通らあんっ！」

鬼の形相で吠える。弾けた魔力が爆風となり、雷真と夜々を煽った。

綺羅の影から巨大な人影が飛び出す。人間の倍はあろうかという体躯の、実体を持つ鬼。綺羅と同じくらいの脅威を感じ、雷真の冷や汗が止まらなくなった。

「何だ、この鬼……!? とんでもねえ……!」

「雷真、日輪さんを連れて逃げてください! ここは夜々が食い止め――」

前に出ようとしたりした夜々に、鬼の鉄拳が炸裂した。

こぶしの振りだけで大地が割れる。びきいんと骨が折れる音を響かせて、夜々が彼方へ吹っ飛ばされた。そのまま砲弾のように飛び、女子寮の外壁を叩き割る。

雷真は愕然とした。まさに、目にも留まらない。巨体に見合わぬ俊敏さだ。

腕の中の日輪が震え出した。呼吸は荒く、過呼吸を起こしかけている。

祖母を怖れているのだろうか。それとも鬼か。

わからないが、雷真は許婚を励ますように言った。

「心配するな。俺が何とかする」

日輪は答えず、青い顔を背けた。まるで雷真の気持ちを拒否するように。予想外の反応だったが、理由を訊いている暇はない。

鬼が今度はこちらに近付いてくる。六連があわてて叫んだ。

「昂！ 雷真はんに加勢しまひよ！」

「阿呆ぬかせ！ そんな途方もないこと！」

「掟よりお嬢や！ 僕がお嬢を毘にかけたとき、昂キレてはったやん！」

「な……せやし、それとこれとは……」

「さあさ、昂さん。ほんやりせんと」

綺羅が耳ざとく聞きつけ、先回りする。

「わてが〈月〉の人形押さえとるうちに、ほんくら嬢、取り押さえたって」

「あ……の……ボク……お嬢の意見も聞いたかな、あかんかなて」

「いらんいらん。本人が言うてましたんえ、婿オ取るてな？」

「そ……ですね……」

昂は両手で印を結び、苦渋の表情で雷真を見た。

「すまん、雷真……。急々如律令——馬士羅、きたりま征！」

呪符をまく。呪符は即座に瘴気をまとい、数十体もの猿の式神となった。

雷真は日輪を抱えていて、両手が塞がっている。夜々はまだ立ち上がってこない。この数の式神に襲われて、素手の魔術師に対処の手段などない——普通は。

しゃらり、と涼やかな音とともに、銀色の風が宙を裂いた。

式神の群れをなで斬りにする。群れは一撃で屠られ、破れた紙切れとなった。

峻厳な冷気をまとい、いろりがふわりと降りてくる。

「去るがいい、魔性の獣ども。おまえたちの黒は雪原を穢す」

いろりが細腕を振るたび氷の刃が伸び、式神を端から消し飛ばす。その姿は舞いのように美しく、それゆえに畏怖を誘った。

まさに命を刈り取る死神。雷真は思わず顔をほころばせた。

「天下無双だな、おい！」

「雷真~~~~~夜々だつて、夜々だつてお役に立ちますうー！」

夜々が瓦礫を弾き飛ばし、立ち上がる。姉が援護に現れただけで、理屈ではなく、夜々にも力が満ちていた。折られた腕を金剛力で固定し、鬼に突っ込む。

「姉さまにばかり、点数稼ぎはさせません！」

「じゃあー、私も点数稼ぎ♡」

楽しげな乙女の声が響き、一帯に魔力の波紋が広がった。

正面から突っ込んだ夜々が、大鬼の背後から蹴る。それは八重霞やえがすみを駆使して与える錯覚であり、こうなると夜々の打撃は手に負えない。かと言って、相手が防御に徹してくれるなら、いろりが遠距離からいかようにも料理できる。

三人そろりと別次元の強さ。綺羅きらは一旦、鬼を手元に引き戻した。

その瞬間、鬼の首筋が不意に裂けた。八重霞にまぎれての奇襲——小紫こむらさきの銀剣が、雷真の魔力をたつぷり帯びて、魔法生物のボディを斬ったのだ。

瘴気しやうきの血しぶきが飛ぶ。その血しぶきが蝶もてつに変わり、小紫を包み込んだ。

鬼から漏れた瘴気を再利用し、新たな式神に変えたらしい。

式神の能力で、大爆発が起きる。紅翼陣こうよくじんの糸で小紫を引き戻し、間一髪、軽傷で済む。直撃していたら、手足がバラバラになっていたかもしれない。

「何て切り返したよ……！」

雷真はあきれた。恐るべき技量だ。日本最強の魔術師は、やはり土門綺羅どもんか。

だが、日本最強の自動人形オートマトンは、花柳斎かりやうさいの雪月花せつげつかなのだ。

綺羅にもわかっていているらしく。迂闊うかつな手出しはせず、憎らしげに三姉妹を見た。

「ふん……また邪魔しはりますか、花柳斎。ほんに忌ま忌ましい」

「……また？」

せんようばんじや

「千妖万邪ごとく奔るべし——酒吞、疾く疾く討ちま征！」

綺羅が印を結び、魔力を込める。鬼の筋肉が隆起し、充実した。全身に黒い雷電がまわりつき、軽く力んだだけで、どんつ、と衝撃がきた。

「おい……まさか、あの鬼……！」

最悪の想像が雷真の脳裏をかすめる。ひょっとして、あの鬼は——

今の今まで能力を使わず、素の腕力で戦っていたのでは？

鬼の鉄拳がいろりをとらえる。ただそれだけのことを理解するのに数瞬を要した。砕け散る氷壁、血にまみれた銀髪、崩れ落ちた校舎の壁を見て、ようやく理解する。

「ね……姉さま……っ!?」「姉さまーっ！」

姉妹の声が震える。いろりは妹たちを安心させるように、瓦礫の中で微笑んだ。

「案ずるな……これしき——」

言葉の途中で血の塊を吐く。かたまりどしゃどしゃとあふれた血が、瓦礫を赤く染めた。

いろいろが直撃をもらう場面を、雷真は初めて見たような気がした。

受け止めきれない打撃なら、普段のいろいろはいなして、そらす。その判断が追いつかないほど、相手の動きは速く、そして強かったのだ。

（八重霞やえがすみを使つたのに……いろいろの位置を正確に見抜いた……！）

一説に、式神は数百種もいるという。戦術の多様さはあちらが上。魔力の総量もあちらが上。魔術師としての錬度も、あちらが上……。土門綺羅どもんきらに死角はない。

勝てない、と雷真は直観した。少なくとも無策では、絶対に勝てない！

雷真は渾身こんしんの力を振りしほり、魔力の糸を紡ぎ出した。

小紫こむらさきに三本、夜々ややといろろに一本ずつ伸ばし、三姉妹に莫大ばくだいな魔力を供給する。

「雪月花せつげつか。吹鳴すいめい、三六さんじゅうろく、環かん！」

『はい！』

区切るように伝えたコマンドに、姉妹たちは応えた。それぞれの魔術回路を起動、夜々ややが突つ込み、いろいろが飛び道具たうぐを放ち、小紫が一带かくだんを攪乱する。

「微温ぬるい！」

綺羅が魔力を爆発させる。術ですらない単純な力の発露のみで、三人娘を弾き飛ばした。勝ち誇ったような薄笑いがしかし、不意に強張こわばる。

綺羅の首筋に、雷真の右手の指から、五本の糸が伸びていた。

「ほう……紅翼陣……〔縛縄血鎖〕……どすか」

マギ・サーキュレトリ

魔力循環系に侵入し、経路を乱す。綺羅の抵抗は強烈で、一本、また一本と糸が断ち切られていく。だが、雷真の狙いは、そこにはなかった。

いつの間にか、綺羅の眼前に円筒形の物体が浮いていた。

綺羅には見慣れない物体だろう。それが何かを理解する前に、スタングレネードは炸裂した。普段の綺羅なら効くわけがない。だが、魔力を乱された今なら……！

せんこう

閃光と爆音が綺羅の脳を激しく揺さぶる。綺羅がよろめいた隙に、三姉妹はコマンドに従い、もう動き出していた。

夜々がいろりを抱え、小紫が八重霞の濃度を高め、いろりが氷刃を操って、式神の包囲を切り崩しにかかる。雷真の意図によりやく気付き、綺羅が舌打ちした。

「逃げよるか！ 日輪をどこやる気イや！」

ひのわ

「探してみればいいさ！ いざなぎ流は占いも一流なんだから！」

雷真はそう言い捨て、日輪を抱いて逃げ出した。

遠ざかる綺羅の声が、あたかも亡霊のささやきのごとく、耳元に聞こえる。

「せいぜい遠くにお逃げやす。見つかるまでが、あんたの寿命やで」

それは負け惜しみと言うには、あまりに自信に満ちた声だった。

Chapter 3 かくも愛すべき

1

医学部の隔離病棟に、アンリは閉じ込められていた。

嚴重に魔術防御を施された、窓のない病室。アンリ自身も魔封じの手かせをはめられ、ベッドの周囲を離れることができない。

壁の白さ、天井の白さが神経に障る。入れ替わり立ち替わりの問診やら検査やらも落ち着き、今は黒縁眼鏡の青年医師が一人いるだけだ。

「お、どうした、アンリエットちゃん、ほんやりして」

医師クルーエルがチョコレートの箱を開け、アンリの鼻先に差し出した。

「チョコレートは気付けにいいんだぜ。ホットにしようか？」

アンリは答えない。彼にまったく関心がもてない。

無視していると、クルーエルは困り顔で頭をかき、チョコレートを引っ込めた。

その彼の向こう、開いたドアの向こうに、真珠色の髪 of 少女を見つける。

目深にしたフード、小脇に抱えた抜き身の黒刀に見覚えがある。ハイゼル・ハイムダ

ルとかいう一回生で、アンリと同じくグローリアの配下だった。

同、じ、命、令、を、受、け、て、い、て、連、絡、を、取、り、た、が、つ、て、い、る、の、か、と、思、っ、た、が、ど、う、も、違、う、よ、う、だ。ヘイゼルは紅い瞳で、悲しげにアンリを見つめていた。

廊下の警備が気付き、ヘイゼルを追い散らす。ヘイゼルの姿が見えなくなると、アンリはもう彼女がそこにいたことすら忘れてしまった。

体が重く、息をするのも億劫だ。己を縛る魔封じを見て、アンリは可笑しくなった。

（滑稽ね。学院の先生たちが私を怖れている）

自分に魔術の才能がなかったことを、アンリは覚えている。

しかし、王妃グローリアが、眠っていた素質を引き出してくれた。

実に、お手軽だ。お手軽に、姉と同じ高みに達した。いや、ひょっとしたら、今よりも姉より力が強いかもしれない。

……なぜだろう。ひどく気分が悪い。何かが非常に不愉快だ。

（陛下はどうされたのだろうか？ 私はいつまで、お待ちしていればいい？）

あちらは予定通りに事が運ばなかったのかもしれない。だとすれば、グローリアさまをお救いできるのは私だけ。私のこの力で、主をお救いしなければ――

『ああ、我が君。どうか自制してください』

アンリの眼前、何もない虚空に、フルプレートフルプレートの甲冑かっちゅうが現れた。

これと同じものを、アンリは幼少期に見ている。プリュー邸にあったエレインの儀礼用甲冑だ。クルーエルが反応しないところを見ると、彼には視^みえていない。魔力検知の警報も鳴らない。それもそのはず、これはアンリの守護精霊^{ガーディアン}だった。

（戻ったのね、シルヴァリ）

『はい。この拘束、なかなか厄介で……力を戻すのに時がかりました』

（陛下はご無事？ 貴女^{あなた}には状況がわかつている？ まだなら、今すぐ探りに――）

『我が君』

叱るような響きに、アンリは反省した。あせりは禁物。グロリアの役に立ちたいなら、なおのこと冷静であるべきだ。精霊はかぶとの下で優しく微笑^{ほほえ}み、

『ご安心ください。きつと自由にして差し上げます。貴女が囚^{とら}われた心の檻^{おり}からも』

（……不思議なことを言うのね。心の檻？ それに、自由って？）

『自由になるとは、救われるということです。貴女は救われねばなりません。なぜなら、貴女は救われるべき人間だからです』

意味はわからなかったが、迷いのない精霊の言葉が、胸に心地よく響いた。

私は救われるべき人間。私は救われるべき人間！

『そう。貴女はずっと、救われたいと願っていたのですよ』

ガントレットの指が頬^ほに触れる。すると、断片的な映像が目の前を駆け抜けた。

穏やかな木漏れ日の差す庭。多くの友人たちに囲まれた姉。姉を誉める祖母の眼差し。そして、それを木陰から盗み見ている自分自身――

あの日、あのとき、感じた痛みを思い出す。

暗がりからまばゆい光の世界を眺めるのは、とてもつらいことだ。シルヴァルリの言うように、アンリはずっと救われたかった……のかもしれない。

狂おしい感情があふれ出す。クルーエルが気付き、新聞を放り出した。

「おっとお!? その涙は何だ? どつか痛むのか? 心臓か? 脳か?」

アンリは聞いていない。アンリが耳を傾けているのは、今や甲冑かっちゅうの声だけ……。

『我が君、どうかご安心を。我は忠実なる守り手、善き助言者となりましょう』

（ええ、ええ……! 教えて、どうすればいいのか……!）

『無論です。ではまず、脱出の手はずから――』

「ちよつと先生! アンリに変なことしてないでしょうね?」

何とも間の悪いことに、招かれざる客がきた。

シルヴァルリの気配が消え、代わってシャルが病室に入ってくる。

「ちょ――何でアンリが泣いてるの!? この野獣が何かしたの!?」

「いや待て違う! 証人もいるぞ! この部屋は教授に監視されてんだから!」

クルーエルが否定しても、シャルはまだ疑わしげな目をしていた。

「……万が一にも変態行為に及んだら、キンバリー先生に密告しますから」

「マジ何もしません、サー！」

大げさに震え上がる。それから、ほんとシャルの肩を叩いた。

「じゃ、後は頼むぜ、『お姉さま』」

「あ——はい。アンリの看護、ありがとうございます」

シャルは素直にお礼を言った。アンリは少し違和感を覚える。だが、すぐに興味を失くす。シャルがどう変わろうと、アンリには関係がない。

「おはようアンリ！ 気分はどう？」

アンリは返事をしなかった。そんな質問に意味があるとも思えなかった。

「顔色はいいわね。ごはん、ちゃんと食べた？ まだなら、一緒にブランチ——」

「……騒がないで。食事は要りません」

「そ、そう？ でも何かお腹なかに入れた方が……」

アンリは冷ややかな目を向ける。シャルは何も言えなくなり、黙ってしまった。

「まだ何か？」

なければ帰れ、という含みがある。シャルは強張こわばった笑みを浮かべた。

「……私のこと、覚えてないの？」

アンリの脳裏に、数日前の記憶がフラッシュアップした。

アンリの意識が戻ったとき、赤毛の女教授がこう言ったのだ。

『私がわからないか、アンリエット？』

もちろんアンリは彼女を知っている。機巧物理学のキンバリー教授。彼女の実績、専門分野、性向や紅茶の好みまで、彼女に関する知識は豊富にある。

キンバリーといい、姉といい、アンリにどんな答えを求めているのだろうか？

……いや、考える必要はない。アンリは姉に向き直り、事務的に答えた。

『貴女はシャルロット・プリュー。あなたアンリエットの姉です』

『そんな言い方……しないでよ』

アンリは閉口した。事実を述べて傷つくなら、もう黙っていた方がいい。

『私たち、一緒に暮らしてたのよ……？』

『……………』

『一緒にごはん食べて、一緒に眠ったのよ……？』

『……………』

『何とか言っつてよ……っ』

アンリはうんざりした。何を言っても不満なくせに、まだ言葉を求めるとは。

『貴女も……私のことが、嫌いになったの？』

『——も？』

引かかるものいいだったが、アンリはその疑問を投げ捨て、端的に言った。

「貴女に対して、そのような特別な感情はありません。私が貴女の面会を許し、希望したのも、私の意志ではない」

シャルは凍りついたように動かなくなった。

少しずつ、少しずつ、まつ毛が湿り、涙の玉が盛り上がっていく。

「……シャル、もう行こう」

シグムントがシャルの耳元でうながす。そして、細い尾をひと振りした。

「邪魔をしたな、アンリ。またくる」

「……こなくてもいいですが」

無理をしなくていい、という意味だったのだが、どうやらそれが決定打になったらいい。シャルは大粒の涙をこぼし、口を押さえて走り去った。

一体、何だと言うのだろう？ あれでは、こちらの気が滅入る。アンリは何もシャルを虐めたいわけではない。ただ彼女に興味がない。それだけのことなのだ。

『彼女はそれなりに優秀ですが、精神構造はまるで幼児ですね』

シルヴァリが現れ、感想を述べる。アンリもまったく同意見だった。

『あなた
貴女の方がよほど陛下のためになりますよ、我が君』

それも同感だ。そして、そのことを誇らしく思った。

『おや——これは僥倖^{きやうてい}、時がきたようです。陛下のメッセージを受信しました』

（本当!? よかった……ご無事だったんだ……!）

『もちろんです。それではこちらにも始めましょう、陛下のために』

アンリの心に喜びが満ちた。もうすぐ女王に会える。そして、お役に立てるのだ。

2

肌寒い医学部の廊下を、シャルは足を引きずるように歩く。

『貴女に対して、そのような特別な感情はありません』

アンリの言葉が耳から離れない。嫌いと言われた方が、まだ良かったです。アンリはもうシャルを嫌ってもくれない。いてもいなくても同じだと思っっている。

アンリの心は銀薔薇^{はらばら}にある。女王の兵だったときと何も変わっていない。

歩きながら、アンリの笑顔を思い出す。春の木漏れ日のような、あの笑顔——あの優しい妹は、もう地球上のどこにもいないのだろうか？

（いる！ いるわ！ まだちゃんと、アンリの中にいるわ！）

かぶりを振る。シャルが抱^よりどころとするのは、ほかでもない魔女の言葉だ。

『妹を返してあげましょう。かつてのあの子をね』

魔女は確かにそう言った。魔王ワイズマンになれば、アンリを返してくれると。

シャルは廊下の壁に身をあずけ、窓の外、復旧作業の廃材置き場をにらんだ。

無数のスクラップに混じって、グローリアの〈影〉を宿す自動人形オートマトンが潜んでいる。外観も気配も完全に風景に溶け込んでいて、いると知っているシャルでさえ、精霊の助けなしには存在を認識できない。

あのサイズで、性能は〈タンク〉ことジャガーノートを上回る。魔防の究極形であり、減元素バニストンすら受けつけない。まして使い手がグローリア本人。いかにシャルが魔剣闘法を得たとは言え、真正面からの一対一では、十中八九、やられる。

ふと、スクラップの中に、軍用犬型自動人形オートマトンの機械フレームを見つけた。

反射的に、かつて可愛かわいがっていた機械犬アルフレッドを思い出す。

アルフレッドは戦闘用ではない。愛玩用、せいぜいが『子守り』のための人形だった。街の親方が趣味で設計したもので、ボディは金属製ながら、仕草も思考も犬そっくり。父エドガーはこれを面白がり、シャルの五つの誕生日にプレゼントしてくれた。

シャルはアルフレッドが大好きだった。本当の犬のように可愛がった。皮肉にも、そのアルフレッドが王子エドマンドを傷つけ、一家離散の引き金となった。

あのとき、アルフレッドはアンリが管理していた。……アンリには可哀相かわいそうなことをした。きつと、ずっと罪の意識を感じていただろう。

そんな妹を、シャルは大事に——とても大事に思っていたのに。

（アンリは全部……忘れちゃったのね……）

罪の意識から解放されたのなら、それはそれでよかったのかもしれない——

（よくないわ！）

シャルは否定した。もちろん、罪の意識なんかなくていい。けれど、今のアンリは魔女に心を支配されている。妹を洗脳され、結社の手先にされて、いいはずがない。

以前のアンリを取り戻したい。グロリアの魔手から奪還したい。だが……。

魔女はいつもシャルの近くで、その一挙手一投足を監視している。

昨夜用意した切り札も、魔女本人が現れなければ、使うチャンスがない。

シグムントが何か言いかけたが、言わずにのみ込んだ。百五十年を生きたシグムントでも、親友と妹を失った少女に、かける言葉はないらしい。

だが、立ち尽くすシャルに、声をかける者がいた。

「う。シャル」

名を呼ばれ、シャルはほんやり顔を上げる。

廊下にフレイが立っていた。ほぼ生身の大型自動人形ガルムを従えている。

「元気出して。迎えにきたよ」

「……迎えについて、なに？」

「シャルを手伝うよ。シャルも、アンリも、友達だから」

微笑^{ははえ}む。意味はわからなかったが、言葉は温かいミルクのように、胸に染み渡った。

そうだ——そうだった。日輪^{ひのわ}に嫌われても、アンリに忘れられても、シャルは孤独ではない。心配してくれる者が、力になってくれる者がいる。

シャルの痛みに気付いてくれる人が、ちゃんという。

こらえきれず、シャルはフレイの胸に飛び込んだ。

「貴女^{あなた}の優しいところも、ほんとはすごく強いところも、私、大好きよ……！」

「う、照れる。ありがと——」

「胸が大きくてもおつりがくるわっ」

「う!?」

「ふん……そんな弱い子、ほっとけばいいのに」

金属の冷たさを思わせる、刺々^{とげとげ}しい声が聞こえた。

廊下の壁にもたれて、別の少女が立っている。目深にしたフードの下からのぞくの

は、馬鹿^{ばか}にしたような紅^{あか}い眼^めと、真珠色のシヨートヘア。

「ヘイゼル——」

「さすがの〈暴竜^{トレックス}〉も打ちのめされてるみたいね。いい気味！」

「そんな言い方しちゃ、だめ！ シャルは傷ついてるんだから！」

シャルより先にフレイが怒る。斬りつけられるのでは、とシャルは震えたが、ヘイゼ
ルは不満げにそっぽを向いただけだった。

その頭を抱え込み、フレイはよしよしと、犬をなだめるように撫でる。実践で敵対し
たこともあるというのに、まったく臆したところがない。

「もう——しつっこい！ バカみたい！ ヘラヘラして！」

ヘイゼルは頬を紅潮させ、振り払った。言葉は強いが、敵意はない。

シャルは呆気にとられた。これは何だ？ あの危険人物が、骨抜きじゃないか。

ひそひそとフレイにささやく。

「貴女、凄いわね。こんな子、どうやって手なずけたのよ？」

「う？ ヘイゼルは、私の妹みたいなもの」

「そりゃ、確かにどっちもDワークスの——だけど、あっちはブロンソンの娘よ？」

「でも、ヘイゼルは悪くないよ」

ふんわり微笑む。この天然の無害さが、ヘイゼルを懐かせたのかも知れない。ちよう
ど、獣をなつかせるのと同じ要領で。

シャルはやり返すような気分でヘイゼルに言った。

「こんなところにいいの？ すぐそこに怖い王妃さまがいらっしゃるわよ？」

「怖くない。ここは知覚の範囲外」

ヘイゼルは平然として言い切った。フレイも大丈夫というふうにならずく。

シャルはまばたきした。遮蔽結界でも構築しているのだろうか。学生レベルの結果が、薔薇の魔女に通じるとは思えないが……？

ヘイゼルには絶対の自信があるらしく、こんなことまで言い出した。

「私は銀薔薇を倒すつもりでいる。貴女に手伝わせてあげても、いい」

「な——バカ！ いきなり何言い出すのよっ？」

あわてて窓の外を確認してしまう。ヘイゼルはにやつとして、挑発的に言った。

「臆病者。私は戦うけど、暴竜は泣いているだけ？ めそめそと、みっともなく」

挑発されて、負けん気の炎がくすぶり始める。

「言うだけなら簡単よね。反抗したら、アンリがどうなるかわからないのよ？」

「取られたものは、取り返せばいい。アンリエットの体も、心も、奪い返す」

「だから簡単に言わないで！ 貴女、アンリの状態を知らないの!？」

アンリは人格を破壊されている。それを元通りにできなければ、魔女を倒しても意味がない。快復の手段を知っているのはグローリアだけだ。

「医学部の教授にもどうにもできない。もう王妃さまに頼るしか——」

「できる。アンリエット本来の意識は死んでない。眠っているだけ」

強い瞳に射貫かれ、シャルは怯んだ。

かつて対峙したときより、今のヘイゼルの方に凄みを感じる。

「……いい加減なことを言くと、承知しないわよ？」

「いい加減じゃない。王妃はアンリエットの精霊感応力を人為的に増強し、強制的に呼び覚ました。それが人格に影響を与えてる」

それまで黙っていたシグムントが、シャルの帽子の上で苦しげに息を吐いた。

「そうか……あれは〈取り替え子〉……！」

ヘイゼルはかすかに表情をゆるめ、うなずいた。

「竜は知っているようね」

「だが、王妃がいかなる手段を用いたかわからん。外科的な処置の結果なら、改造された臓器をまず特定し、復元するか、切除しなければならない。魔術的な改造であれば、儀式を特定し、対抗魔術を用意せねば。一朝一夕には不可能だ」

「何をされたのか、私は知ってる。だって私は、王妃の飼いだつたんだから」

シャルとシグムントが同時に『あつ』と声を漏らした。

そうだ。アンリが王妃のもとで〈養育〉され始めたとき、ヘイゼルは王妃の尖兵として働いていた。世間で言われている通り、Dワークス社とGLRにつながりがあるのなら、この学院で唯一、ヘイゼルだけがGLRの内情に通じている。

「協力する気になったなら、ついてきて」

ヘイゼルはきびすを返し、歩き出した。フレイもその後について行く。

「待って！ 貴女の目的は何？ どうして王妃に反抗するの？」

ヘイゼルが足を止め、考えるような間を取った。

「……陛下は、私に復讐ふくしゅうの機会をくださった。父を極刑に追いやった連中を……私はまだ許してない。だけど、アンリエットがされたこととは、別」

「つまり、義侠心ぎあつしん？ アンリが可哀相かわいそうだから力を貸してくれるの？」

「違う、個人的動機。私はただ、アンリエットと……と……も……ち……に……」

「え？ 何て？」

フードに隠れた横顔が、段々赤くなっていく。フレイは知っているらしく、にこにこしている。ヘイゼルは急に怒り出し、やけくそのように怒鳴った。

「いいから、決めて！ やるの!? やらないの!?」

シャルは唇を引き結び、毅然として言った。

「やるわ」

やるかやらないかなんて、とっくに決まっている。

ただ、その機会が訪れなかったただけだ。アンリの治療法が見つかり、グロリアが隙すきを見せ、シャル単独で魔女を倒せるような好機など、奇跡みたいなものだった。

だが、ともに命を賭けてくれる人がいるなら、奇跡を待つ必要はない。

「妹^{アネリ}も、友達^{ヒノワ}も、私は助ける！ 薔薇^{ばら}なんて全部散らしちゃえばいいのよ！」

彼^ががよく言うような言葉が、自然と口から飛び出した。

そのことをシャルはとても誇らしく思い、そして、大きな勇気を得た。

ヘイゼルが肩越しにこちらを見て、すみれの花のような、素朴な笑みを見せる。

「弱虫^{トレックス}の暴竜も、ちょっとは根性見せた」

「誰^{だれ}が弱虫なのよ！ そっちこそ覚悟はできてるの？ さっきも言ったけど、私たちがこうして話しているのを、王妃さまはご覧になってるはずよ？」

「さっきも言った。魔女の〈影〉に、こっちの様子は確認できない」

「だから、そんなことができるわけない——」

「それができるっ、んだよっ！」

せえぜえと息を切らしながら、白衣姿の少女が廊下を駆けてきた。

イオネラ・エリアーデ教授。研究が専門なので、どうやら運動不足らしい。彼女と同じ顔の自動人形^{オートマトン}が、無表情で付き従^{あるじ}い、主を支えていた。

「エリアーデ先生……とエヴァ？」

「よっ、よっ、よくっ」

「……とりあえず息整えて。こっちが窒息しそう」

「よく決意したねシャルちゃん！ 後はこの私、天才イオネラ・エリアーデ教授に任せるといいよ！」

誇らしげに自分の腕を叩き、さらに激しくむせる。エヴァに背中をさすってもらって、必死に呼吸を整える彼女を、シャルは不安な気持ちで眺めた。

3

学院の奥、ひと気のない木立ちに、機械人形が立ち尽くしている。

イーリスⅡ。伝説級イーリスレジェンズを現代の技術で復元した、GLRの最新鋭機だ。

そのイーリスⅡが小首を傾げる。それは使い手たるグロリアの動きをトレスしたもので、シャルの監視が外れたことを、グロリアが怪訝けげんに思ったのだ。

（イーリスⅡの制御がおほつかない。これは故障……ではない）

考えていると、いきなり土が盛り上がり、漆黒の獣が飛び出してきた。

見事な不意打ち。だが、直撃はしない。魔防の盾が展開し、獣の突進を阻んでいる。イーリスⅡの魔術回路は高効率の（魔防）。貫くのは容易ではない。

『おかしなところでおかしな会い方をしたものですね、紫薔薇』

呼びかける。土の中から年配の女性が浮き上がってきた。

「銀薔薇さんの人形どしたか……。えらいすんませんどしたなア。ちょお取り込んでましてん。孫が誘拐されてもうて」

『誘拐？ それは——大変ですね』

「へえ、それも。どうかどうか、堪忍かんにんしておくれやす」

腰を折り、深々とお辞儀をする。グローリアは拍子抜けした。

好ましく思う一方、腹の底が読めない不気味さも感じる。外面が柔和であるほど、内心にどんな敵意を隠しているかわかったものではない。まして、あちらは歳月を経た魔女。彼女に比べれば、グローリアはまだ小娘のようなものだ。

孫が誘拐されたと言うわりに余裕がある。策士のグローリアは謀略の臭いにおを感じ取ったが、顔には出さず、世間話のような調子で言った。

『丁度よい。貴女あなたに問うてみたいことがあります。昨夜の件をどう見ました？』

「灰薔薇さんのあれですか？ あの巨人は——綺麗きれいどしたな」

『綺麗？ それは個性的な感想……。いえ、思い返せば、貴女も金薔薇と同じ瘴気しやうきの使い手。あの手の怪物にもなじみがあるのでしょうかね』

「ほ、金薔薇さん。そうそう、金薔薇さんはお気の毒どした」

『とても本心とは思えぬ。貴女はアストリッドに命を狙われたのです』

「過ぎたことどす。亡くならはったお人、憎んでもしゃあない。それでも、金薔薇さんを討ってくらはったお人には、感謝せなあきまへんなア」

ふと、違和感を覚えた。亡くなった？ 本当にそうか？

黒薔薇の言葉を借りれば、金薔薇は『殺しても死なない』ような大魔女だ。

何か、ひどく重要なことを見落としている。あまりに当たり前すぎて、見落としていることすら見落としてしまうような、決定的なことを。

こうして紫薔薇が復帰している以上、金薔薇の影響が消えたのは間違いない。薔薇たちの賭けにしても、金薔薇が無事なら許すはずがない。しかし……。

(……危険は減らすに越したことがない。今日、この一手で決めましょう)

グローリアが今日これから為そうとしていることこそ、唯一の正着だ。

(灰薔薇には礼を言いたいものです。死んで消えてくれたばかりか、ラザフォードに失態を演じさせ、世論を学院敵視に傾けてくれた)

昨夜のギネス騒動は、またしても波紋を生んでいる。都市の住民は混乱し、学院批判を強めつつある。かつて学院を支配したときとよく似た構図で、違うのはグローリアが表舞台にいないこと。今回は悪役にされる心配がない。

今こそラザフォードを失脚させ、エドマンドから政権を奪い返す好機。

(黒薔薇も紫薔薇も強大な〈転移〉の術を持つ。息の根を止めるのは難しい――が、屠

るばかりが勝利ではない。学院から遠ざけてしまえばよいのです」

マシンドール
神性機巧に手が触れぬ距離にまで、連中を追いやってしまえたら。

（わたくしの勝ち……ではありませんか？）

グローリアがそこまで考えたとき、紫薔薇が愛想よく別れの挨拶をした。

「ほな、孫オ探しに行きますわ。どうもどうも、ごめんください」

足もとに瘴気溜まりができ、彼女を土中に引き込んでしまう。

紫薔薇が去ると、グローリアはタクトを振るように指を躍らせた。

『おいでなさい、アンリエット』

「参りました」

本当に一瞬で、アンリエットが現れた。既に病衣ではなく、戦闘服を身に着けている。とつくに脱出準備を終え、召喚命令を待っていたようだ。

ずば抜けた精霊感応力。グローリアがこれまでに見えた、どの精霊使いよりも支配力が強い。周囲の精霊は無条件に彼女に従い、護ろうとする。

妖精学において〈精霊女王〉と呼ばれる資質が、この娘には備わっていた。

過去の代表的な人物の名をとり、その資質はこう呼ばれている。

『すっかり〈精霊女王〉が板についてきましたね。見事です、アンリエット』

「もったいなきお言葉です」

うやうやしくひざまずく。グローリアは満足し、人形の目を細めた。

『そなたに大切な役目を任せます。わたくしの片腕となりなさい』

アンリが息をのむ。頬が薔薇色に染まり、隠しきれない喜色が浮かんだ。



『今こそ、そなたの力が必要です。どうか近衛となり、わたくしを護ってください』

『御名にかけて！ 女王陛下！』

嬉々としてこうべを垂れる少女を、グローリアは心から愛しく思った。

グローリアが命じれば、この娘は都市に住まう者を皆殺しにもするだろう。

『ああ、そなたは本当に、かくも愛すべき――』

手駒だ。

4

『それじゃ、作戦会議ね。まず、魔女さんをおびき出す方法だけど――』

イオネラがいきなり本題に入る。シャルはあわててさえぎった。

『待ってください、エリアーデ先生。その前に』

かしこ

畏まった呼び方をして、こわごわ研究室を見回す。ニスの匂いが新しく、壁の色味も

鮮やか。大量のパーツや工作機械、コード類などで埋め尽くされている。イオネラの研

究熱は健在らしいが、すかさずの本棚は哀愁を誘った。

あやしげ

フレイ、シャル、ヘイゼルの三人が、講義を聞くようにイオネラを囲んでいる。

『ここ、本当に監視されてないの？ 遮蔽の手段がわからないと、落ち着かないわ』

「う。異界……」

何か知っているのか、フレイが青ざめ、きゅつとスカートを握った。

「それが〈メルクリウスの残影〉ね。魔女さんクラスになると、自分の幽体フアンタムを送ることもできるみたい。テストしてないからわからないけど」

「してみればいいじゃない」

「んもおおおシャルちゃん評価D！」

「D!? そんな成績取ったことないわよ!？」

「失われたって言ったでしょ! 超光速で情報伝達できるかもなんだから、明らかに宇宙の真理にかかわる系で、ああ世の中には天才がいるーって感じなの!」

イオネラはばんばんと机を叩くたた。その剣幕けんまくに引きながら、シャルはさらにたずねた。

「失われた秘術なら、王妃さまはどうやってるの? あの人形が伝説級とか?」
レジェンズ

「そうじゃないよ。薔薇ばらはみんな使えるの。魔女さんたちの指輪を知らない? 魔水銀マキユリウム

と永久金の合金っぽいやつ」
オレイカルコス

「薔薇の印章……じゃあ、あの指輪が秘術の魔具?」
ブランド

「歴史が浅い薔薇家のは模造品だと思う。だけど〈薔薇の茶会〉に招かれるような古参の薔薇は真に力ある指輪を相続してるはず。だから、大幹部は世界のどこにいても、みんなで会議ができるんだって」

結社は協会よりも小規模なのに、世界各地で同時多発的に暴れ回る。その神出鬼没さ、情報伝達の速さを、こうした特別な魔術が支えていたらしい。

「そんなすごい秘術、回路の実物もなしに解析できたの？」

「仕様がわからなくても、魔力伝播でんぱと中継の方法は予想がついてる。今回で言うと〈異界経由〉は鉄板なわけで、これが可能な原理は限られてるし、実用レベルのものと比べ、さらに候補は絞られるよ。私が注目したのはマクスウェル浸透法——これは出力比で二乗の減衰をとまなう異界変換ロスを大幅にカット可能な——致命的なデメリットとして狙いがちよーブレちゃうんだけど、ブランドで出入口を固定してやれば——」

何を言い出したのかわからなくなった。シャルは適当な相槌あいづちで聞き流す。

「——なので、私たちに近付くと〈影〉が乱れちゃう。最悪、魔術式が壊れてリンク切断。そうなれば、使い手が側そばにいない、ただの自動人形オートマトンと同じだよ」

「……凄すごすぎてピンとこないわ。戦闘中に『失敗♡』ってオチはやめてよ」

「正直、できてよかったあって思ってるよ。私最近、自信失なくしてたからね」

「貴女あなたが自信喪失ですって……!？」

「何でそこが一番の驚きポイントなの!? 私だって落ち込むからね! ともかくお待ちかね、これがその対抗魔具アンチマジです」

イオネラは「じゃん!」と言って、白衣をめくって見せた。真っ白な肌が飛び込んで

きて、シャルは目を覆う。

「いい加減、下着はつけなさいよ……！」

「そこはいいから、ここを見て！」

へそのあたり、腰回りにベルトで機械装置を固定している。ウイスキーの薄型水筒スキットルに似ていて、謎のパイプが伸び、表面の魔石に複雑な経路でつながっていた。工作は大雑おおざつ把ばで、ハンダ付けも適当だ。改めて仲間たちを見ると、同じものをヘイゼルはベルトから吊るし、フレイはラビの首輪に引っかけている。

「何とも得体の知れない……やつつけ感漂たなびう見た目ね。でもまあ、大体は理解できたわ。要するに、連中の異界アクセスを妨害してることよね」

「……むー、すごさが全然伝わってない気がする」

「ちゃ、ちゃんと伝わってるわよ。ちゃんとすごいわよ」

「雷真らいしんくんみたいな言い方！ 最近シャルちゃん似てきたよ！」

「えっ、やめてよ！ 私は優等生よ？ あいつに似てるなんて……もうっ……変なこと言わないでよね！ えへへ！」

「……顔がすごくゆるんでるんだけど」

「とにかく、これがあるから魔女は現れないって言ったのね、ヘイゼルは」

「そういうこと。やつと理解した？」

ヘイゼルが得意げに言う。シャルは半眼になった。

「他人の説明でドヤ顔しないで欲しいわね……」

「仕方がない。私は口下手」

「本当よ。いきなりアンリを連れて行こうとしたり、シグメントを斬ろうとしたり」

「バカにするの？ 命知らず。私は今ここで暴竜^{トレックス}を斬り捨てたっていい」

「何その言い方。できるものならやってみなさい！」

「う！ ケンカしちゃだめ！」

フレイがあわてて割って入り、両脇にシャルとヘイゼルを抱え込んだ。たゆんたゆんの物体を押しつけられて、部分的に恵まれない二人は戦意を喪失する。

フレイはふふっと思い出し笑いをして、シャルに耳打ちした。

「シャルを誘おうって言ったの、ヘイゼルだよ。落ち込んで可哀相^{かわいそう}だからって」

「私はそんなこと言っていない！ また死にたいの!？」

「う。乱暴なこと言っちゃ、だめ！」

「私は暴竜なんかどうだっていい。ただアンリエットを助けたいだけ！」

ヘイゼルは悔しげに足もとをにらんだ。

「……今のあの子が、嫌いなだけ！」

握りしめたこぶしが震えているのを見て、シャルはようやく確信した。

ヘイゼルは本当にアンリを取り戻したいと思っている——くれている。

彼女の生い立ちは知らないし、謎ばかりで不気味だし、攻撃的で手に負えないところもある。だが、それを言うなら、シャルだって英国の敵だったし、凶悪な乱暴者扱いされていたし、誰にも自分のことを話せなかった。

ヘイゼルは王妃の手下だ。叛逆を企てれば、無事では済まない。

それでも、やると言っている。現時点では、それが唯一の事実。ならば、人格でも過去でもなく、その事実で判断したい。彼が、そうしてくれたように。

「ありがとう、ヘイゼル。私、貴女を信じるわ」

まっすぐ目を見て告げる。ヘイゼルはぶいっと視線をそらした。

「だけどね——この対抗魔具で王妃に挑むのは、無謀よ」

シャルのひと言で、室内が静まり返った。

「アンリは王妃を崇拜してる。私たちが王妃を倒したら、絶対攻撃してくるわ。それに、倒した後はどうするの。アンリを元通りにできるのは、やった本人だけよ」

しかし、イオネラはかぶりを振る。

「それは不正解。医学部の先生たちが治療の手段を探してるからね」

「……気休めはやめて」

「科学的推論です。だって今、解放剤の実物を解析してるもん」

「サンプル——そんなの聞いてないわ！ どこから調達したのよ!？」

シャルをのぞく全員の視線が、ヘイゼルに向いた。

「貴女が……GLRから……っ?」

サンプルがあれば、成分が分析できる。仕組みがわかれば、デイスベル解呪の手段も——

ぬか喜びはしたくない。はしゃぎそうになる自分を、シャルは抑えつける。

「でも待つて。この対抗魔具、相手にはどう感じるの? 近付くと妨害されるってこと

は——対抗魔術の存在がバレバレじゃない!？」

「バレてるだろうね。シャルちゃんが私たちと一緒にいるのも。だけど、シャルちゃん

に叛逆^{はんぎやく}の意志あり、と考えるかどうかは別問題だよ。シャルちゃんが何も知らずに、私

たちと一緒にいる——って考え方もできるわけだし?」

「白々しい! そんな考え方はしないわよ、あの人は!」

自分の魔術に不具合が生じた時点で、シャルの二心を疑うだろう。

イオネラは「にへへ」と笑って、うなずいた。

「そうだね。どうせ疑われるんなら、もう愚図^{ぐずぐず}愚図言わず、一緒にやるしかないね」

……どうやら、シャルの尻を引っぱたく意味もあつたらしい。

「この意地悪な考え方……アリスね?」

「ぴんぽーん、正解! 私に対抗魔術を用意しろって言ってきたのも、アリスちゃんだ

よ。雷真^{らいしん}くんととの愛の回線からだだったので、私はちよつぱり不機嫌です。むー」

「それじゃ……アリスも協力してくれるのね……？」

一気に光明が見えた気がする。我ながら現金だ。

「ありがとう……先生……！」

「そんな他人行儀な呼び方はなし！ それと、お礼もなし。これは私の贖罪^{じやくざい}なの。アンリちゃんに使われた解放剤^{かほうざい}って薬、たぶん〈神酒^{アストライア}〉で作った靈薬^{エリクサー}だよ」

ふっとイオネラの瞳に翳^{かげ}が落ちた。

「知ってるよね？ アストライアは私の〈無限連鎖^{アルファサイクル}反応〉理論を応用したもの。だから私は、間接的にだけど、アンリちゃんの洗脳に責任があると思うんだ。なので、本当は私の方からこう言うべきなの。私にも手伝わせて！」

胸が熱くなる。にじんだ涙を指で拭^{ぬぐ}って、シャルは室内を見回した。

「そう言えば、アリスはどこ？」

「今は雷真^{らいしん}くんと一緒だよ」

「——そ、そう言えば、あいつも見当たらないわねっ」

「あー、雷真^{らいしん}くんがここにいないくて、ざんねーんとか思ってる顔だ」

「おおお思っていないわよそこまでは！」

「あっちはアリスちゃんがかかりつきりだから、心配いらないよ」

あっち。雷真が何を始めたのか、シャルにもぴんときた。

「……そう、そういうこと。可哀相なアンリを冷たく放置して、可愛いヒノワを優先的に助けに行っただけでわけね、あの冷血漢」

「そ、そうなんだけど表現にトゲがあるねっ」

「う！ シャルには、私たちが、いるよ！」たゆんっ。

「ありがとフレイ！ だけど不思議ね！ さっきの感動が半減したの！」

「う。ライシンが心配？」

シャルはかぶりを振って、微笑んだ。

「あいつは大丈夫よ。いつだって、上手くやってきたじゃない」

日輪がどんな問題を抱えているのかはわからない。だが、彼なら日輪を救ってくれるだろうと、シャルは根拠もなく信じていた。

5

綺羅から逃れた雷真たちは、学院長公邸の一つ〈旧別邸〉に向かった。

雷真が日輪を担ぎ、夜々がいろいろを抱えている。近くには小紫、六連が併走してい

る。昂^{すばる}は綺羅のもとに残り、ついてきてはくれなかった。

綺羅の気配はまだないが、それがかえって不気味だ。

(やっぱ、恐ろしい婆^{ばあ}さまだ……！)

日輪でさえ雷真を超える魔力を持つ。綺羅はその日輪を大幅に上回っている。

離脱できたのは運がよかった。通常兵器になじみのない、魔術師の弱点を上手く突いた。だが、あの手はもう二度と使えない。今から再戦時のことが思いやられた。

(戦わずに済ませたいもんだ。むしろ味方につけて、薔薇^{ばら}と戦ってもらいたい——)
そこでふと、恐るべき思考が脳裏をよぎった。

なぜ、綺羅が英国^{ここ}にいるのか。いるのに、日輪を結社から護^{まも}ってくれないのか。

(まさか、日輪の背後にいる薔薇^{ばら}つてのは、あの婆^{ばあ}さまのことじゃ……!?)

理性は否定する。綺羅は以前、魔女に命を狙われた。むしろ結社の敵のはずだ。

(そんなのあてにならねえ！ 連中、今まさに内部抗争をやってるじゃねえか！)

心拍数が急上昇する。もし綺羅^{きら}が薔薇^{ばら}の魔女なら、日本最大最強の魔術師集団、軍にも発言権を有するいざなぎ流が結社の一味ということになる。

日輪^{ひのわ}を問いただそうか迷っていると、公邸の玄関先からアリスの声がした。

「ライシン！ こっちだ！」

「おうアリス！ お姫さまをさらってきたぞ！」

「水晶玉で見てたよ。まったく冷や冷やさせるね……。急いで地下のシエルターに隠れる。外はシンに見張らせる」

エントランスにすべり込むと、雷真は日輪を六連に任せ、三姉妹に駆け寄った。

「大丈夫か、いろり。すぐに魔力をやるぞ」

「私は後で結構です……夜々を先に……」

「何言ってるんですか！ 姉さまの方が重傷です！」

夜々が折った腕は金剛力で固めてある。常に魔力を流していたので、かなり復元されていた。一方のいろりはまだ重傷で、全身の出血も治まっていない。

「いろり姉さまが、こんなになれちゃうなんて……」

小紫が気弱な声を出す。姉が敵に撃破されるなど、考えてもみなかったようだ。

だが、怯えているだけではない。小紫は手の甲で涙をぬぐい、きりっとして言った。

「私もあの執事さんと一緒に、お外を見張ってる！」

小紫の感覚器は高性能。見張りに残ってくれば、確かに心強い。

膝が震えているのに気付いたが、雷真は小紫の気持ちを尊重し、うなずいた。

「わかった。シン、小紫を護ってやってくれ」

「安全は保障いたしかねますが——心に留めておきましょう」

皮肉っぽい返事。だが、黒眼鏡^{めがね}越しに見えた眼^めは真剣だった。

二人をエントランスに残し、地下へと下りる。その間も雷真は魔力を燃やし、いろりに渡し続けた。何度も地上を見上げていると、見かねた様子でアリスが言った。

「この建物は〈遮蔽〉してあるよ。僕^{ぼく}らの位置を特定するには時間がかかる」

「だといいけどな……」

硬い空気が地下に充満する。綺羅の脅威はもう、全員が理解していた。

ちらりと許婚^{いいなすけ}の様子をうかがうと、日輪はやはり青ざめ、震えていた。

ひどく怯えている。相棒が気を利かせて、勇気づけるように言った。

「大丈夫ですよ、日輪さん。夜々たちがちゃんとかくまいますから！」

細腕に力こぶを作り、請け合う。日輪は何か言いかけたが、途中でやめた。

それを不安の表明と受け取ったのか、今度はアリスが口を開いた。

「お館は賢明な方と聞いている。ちゃんと手続きを踏んで、まずはパパに問い合わせるさ。もつとも、パパは簡単にここを明け渡すだろうけど」

「おい！ なら何で公邸^{こうち}を選んだ!?」

思わず突っ込んでしまう。アリスはしれっとして、

「勝手知ったる我が家だからね。堅牢^{けんろう}だし、仕込みもできる。そうだね、ムツラ？」

「はいな。まあ急造りなもので、ちゃんと作動するか心配ですけど」

「……どういことです、六連？」

日輪ひのわが青い顔で問う。その問いにはアリスが答えた。

「結界を用意してもらったのさ。君が以前、まんまとハメられたやつを」

「六道角張無尽結界呪……!?」

雷真らいしんもよく覚えていた。土中に〈まじもの〉を埋めて結界を構築し、式神への魔力伝

導を阻害する。いざなぎ流を狙い打ちにする、いざなぎ上層部の秘術だった。

心強い綺羅対策のはずだったが、日輪の震えが激しくなった。

「お祖母ばあさまに使うつもりで……!? 何て……何て恐ろしいことを……っ」

六連は気にせず、雷真にひざまずくようにして、深々と頭を下げた。

「雷真はん、ほんまおおきに！ お嬢救えたんは雷真はんのおかげさまや！」

「まだだ。全部こっからだし、俺は何もできてねえ」

「そんなご謙遜！ 夜々ややちゃん、アリスはん、いろりちゃん、ほんまありがとお！ 後

で小紫こむらさちゃんにもお礼言わな——」

「そんな……悠長なことを言っている場合ですか！」

なごみかけた空気を、日輪の怒声が破壊した。

激怒している。鬼気迫る表情の日輪にたじろぎ、六連も笑顔を引き込めた。

「お祖母さまに齒向かって、一体どうなるのです……！」

「どうにかするんだよ、プリンセス。具体的に言くと、魔女を倒して、君を助ける」
アリスが答える。雷真もそれに同意した。

「アリスの言う通りだ。俺たちはもう動き出しちゃった。今さら止まらない」

「雷真さままで……なぜこのような……愚かなことをされたのです……？」

「なぜと訊くかよ、おまえは」

「……わたくしは本日これより祝言しゅうげんです。何もしていただく義理はございません」

雷真は困惑した。救出すれば、日輪は喜んでくれると思ったのだが。

「いえ……丁度よい機会かもしれませんね。いとまごいせねばと思っております」
いとまごい。以前も聞いた台詞せりふだが、今日は重みが違う。

日輪は一瞬、夜々を見た。それから顔を伏せ、凛りんとした声で告げた。

「赤羽あかばね天全をともし倒すという約定、そして先の婚約、破談にしてくださいませ」

「……どうしてだ？」

彼女が泣いてくれたら、雷真は迷わない。彼女の痛みを取り除いてやるだけだ。
だが、日輪はどこか清々すがすがしい表情で、笑ったのだ。

「日輪は自分に相応しい殿方と、一緒になろうと思います」

衝撃を受けている自分に、雷真自身が衝撃を受けていた。

日輪ひのわに「相応ふさわしい殿方」は自分ではないだろうと、誰だれよりも雷真らいしんが思っていた。それが、いざ別れを切り出された途端、打ちのめされている。

これは本当に日輪の本心なのかと、未練がましく疑う。

綺羅きらに言わされているのでは？ 結社に人質を取られているのでは？

「学院での日々は……楽しくうございました。さあ六連むつら、帰りましょう」

「おい待て！ ちゃんと説明してけ！ おまえ困ってるんじゃない」

伸ばした手が、日輪の背中に届くことはなかった。

いきなり天井が崩落し、鬼の巨体が降ってきたからだ。

夜々ややが雷真をかばって前に出る。修復中のいりりも、よろめきながら立ち上がり、雷真を護まもろうとした。雷真は周囲に天眼てんがんを飛ばし、小紫こむらさきとシンを探す。——おかしい。

上には見当たらない。二人はどうした？ 破壊されたのか？

草履に黒い羽を生やし、綺羅が降りてくる。

遮蔽結界も対いざなぎ結界も機能せず、その魔力は充実している。さすがのアリスもこの展開には動揺したようで、大げさに肩を揺すり、芝居っぽく笑った。

「……正気かい、ミセス？ 別邸とは言え学院長公邸に、そんな怪物を連れて乗り込ん

だの？ パパとはまだ話していないよね？」

「学院長さんのことなら、わてもよう知ってます。直裁で話のわかるお人や。まして今回、理はこちらにありますよって」

「事後で何とでもできる……か。確かにこっちは現行犯、プリンセスも見つけられちゃってるわけだしね。だけど、この場所が割れたのは解せないな。あの状況なら普通、学院になんか留まら^{とど}まないで、市街地に逃亡するだろう？」

綺羅は目尻にしわを刻み、満足げに日輪を見た。

「あんたの手柄や。よう報^{しる}せた、ご苦労さん」

夜々も、アリスも、六連も、いろいろも、そして雷真も、呆然^{ぼうぜん}とした。

密かに式神を放^{はな}つて、位置を報せたのか。この面子^{めんつ}に気付かれずにそれができるのは、確かに日輪しかない。

夜々が「わからない」という顔で雷真を見る。雷真もまた、同じ気持ちだった。

だが、覚悟は決まっている。歩き出そうとする日輪を、背中^{うしろ}で阻む。

勝てない相手かも知れないが、日輪の本心を確かめるまで、退くわけにはいかない。

「行かせねえぞ、日輪。大丈夫、俺^{おれ}たちが婆^{ばあ}さまからおまえを護^{まも}って——」

言い終わる前に、想像を絶する苦痛が、雷真の胸を貫いた。

自分の胸から何かが突き出す。それはたっぷり血を浴びた、陰陽師^{おんみょうじ}の禁刀^{おんみょうじ}だった。

背後から、日輪の冷え切った声がする。

「……油断大敵です、雷真さま」

「ら……雷真……雷真っ！ ああああああ！」

夜々が声にならない声をあげる。その悲鳴が一気に遠のき、姿もぼやけた。……自分の意識が遠のいたのだと、ずいぶん遅れて理解する。

雷真はまともに立っていられず、背後の日輪にもたれかかっている。日輪が禁刀を引き抜くと、雷真の天地は簡単に横倒しになった。

口から血の泡があふれ、まともに声が出ない。刃は肺を傷つけたようだ。

「日……輪……どう……して……だ……？」

かろうじて訊く。だが、返事はない。その代わり、綺羅のこんな言葉が聞こえた。

「ほな、残りの木偶を片付けまひよか。人も人形も、全部持ち帰りますえ」

まずい。このまま気絶したら、雪月花を取られる。是が非でも立ち上がり、戦わなければならぬ。だが、雷真の意識は混濁し、夢と現実の境界さえ曖昧になっていた。

夜々が雷真にすがりつき、はるか遠いところから、必死に呼びかけている。

「雷真！ しっかり！ 雷真！ 雷真！ らい——！」

泣き濡れた夜々の顔は、三年前、沢で死にかけたときと重なって見えた。

(悪い……夜々……俺が……ドジを……踏んだ……)

誰か助けてくれ、と思った。この姉妹たちを、誰か——
願いを聞き遂げてくれる者は、いるのか。

確かめることもできないまま、雷真の記憶はここで途切れた。



Chapter 4 過去の自分に回帰する

1

祖母は、とても公正な人だった。

「できた！」

仕上がったばかりの〈作品〉を、アンリは高々と掲げた。

初めて自力でやり遂げた刺繡ししゅう。枠から外して広げてみると、白いハンカチの上に花園が広がったような気がした。ステッチは単純でも、作業は緻密ちみつで丁寧だ。つぼみが今にも花開きそうな、可憐かれんなチューリップに見えた。

綺麗きれいにできたら、今度は誰かだれに見てもらいたい。当然の欲求に従って、アンリは部屋を飛び出していく。ブリー邸の廊下を駆けることしばし、暖炉のある部屋から姉の声が聞こえた。アンリは跳ねるようにそちらに向かう。

「見て、お姉さま！ 私、ひとりで——」

言葉がつかえる。目に入った光景が、あまりにまぶしかったから。

「シャルちゃんって本当に刺繍上手だよね」

「今度は私のハンカチに入れて！」

私が先だよー、私は鈴蘭すずらんの柄がいいな、と少女たちが好きなことを言っている。幾人もの友達に囲まれ、シャルが刺繍針ししゅうはりを操っていた。

絵を描くように自然に、するすると針が走る。遠目にもわかるほど洗練されたステッチ。あんなに輝いて見えた自分の作品が、急に色あせたように思えた。

シャルがこちらに気付いて、顔を上げた。

「アンリ？ そんなところで何してるの？」

姉に見てもらおうと思っていたのに、アンリは自分の作品を背中に隠してしまった。気後れしていると思ったのだろう。姉はにこりと笑って、

「こっちにいらっしやい。一緒に遊びましょう」

仲間に入れてくれる。自信に満ちた姉の笑顔は、今日も麗うるわしかった。

——— こういうときどうすればいいか、アンリはもうわかつている。

拙つたない刺繍なんて、誰にも見せなくていい。丸めてポケットに隠してしまえばいい。取り残されたような、この気持ちごと。

「はい、お姉さま」

微笑ほほえみを返し、姉のもとへ行くこととしたとき、少女たちが一斉に居住まいを正した。

アンリも驚いて振り返る。すぐ後ろの廊下を、貴婦人が通り過ぎようとしていた。すっと伸びた背筋。ほっそりとした手足は年齢を感じさせない。だが、顔にはうつすら年輪が刻まれ、年長者の落ち着いたただずまいを見せている。

古きよき時代を思い起こさせる、『きちんとした』女性。

それが姉妹の祖母、イライザ・ブリューだった。

「楽しげですね、娘たち」

あちらにそんなつもりはないのだろうが、少女たちは『騒ぎ過ぎたかも……?』と反省する。イライザには周囲にそう感じさせるところがあった。

淡いブルーの瞳は知性的で、決して感情をむき出しにすることはない。それでも、祖母の静かな叱責はどんな怒鳴り声よりも鋭く、姉妹を打ちすえたものだ。

シャルも畏^{かしこ}まって、きちんと返事をした。

「みんなでお裁縫の勉強会をしていました」

「刺^{しゅう}繡^{ゆう}ですか。見せてご覧なさい」

シャルが緊張の面持ちで差し出す。イライザは眼^{めが}鏡^ねを持ち上げ、作品に目を落と^{かたず}した。周囲が固唾^{かたず}をのんで見守る中、やがて、祖母の口元に上品な笑みが浮かんだ。

「見事ね、シャル。貴女^{あなた}の将来が楽しみだわ」

わっと少女たちに笑顔が広がる。アンリはひどい居心地の悪さを感じて、とっさにそ

の場を逃げ出した。

廊下をいくらもいかないうちに、「アンリ」と後ろから呼び止められた。

「逃げることはないでしょう。貴女を虐めたりはしませんよ」

落ち着いた歩調で、イライザが向かってくる。頬には苦笑を浮かべていた。

「貴女も縫ってみたのね。見せてご覧なさい」

さすが、お見通しだ。アンリは死刑台に上がるような気持ちで、作品を差し出した。

イライザは公正な人物だ。その祖母がくだした評価は、

「まあ素敵。とつても可愛らしいわ。もうこんなに縫えるなんて、お利口よ」

優しく誉めてくれた。アンリはまずほっとして、次に、きゅっと切なくなつた。

イライザの言葉は、あくまで「幼い子ども」に向けられたもの。

他方、シャルに与えられる言葉は、常に必要最低限の——大人に向けられるものだっ

た。おそらく、祖母の正義は許さなかつたのだ。意図的であれ、無意識であれ、劣る者

と優れた者に、同じ言葉を与えることを。

あやしてくれるような口ぶりが、包み込むような優しさが、アンリを責め、苛む。

どうしてそんな気持ちになるのか、子どものアンリには上手く説明できない。そのくせ、自分が苦しんでいる素振りを見せると、周囲が困ってしまうことだけは、し

っかり理解できていた。

だから、無邪気に喜ぶふりをして、イライザの側そばを離れた。

裏庭の物干し場へ逃げ込む。ここが邸で一番好きな場所だ。はためくシーツの海に隠れ、石けんのいい匂いに包まれていると、自分が守られているような気がして、誰だれの目もはばからなくていいような、そんな気になる。

憎らしいほど青い空。太陽はまだ高いところにある。洗濯物の取り込みはまだ先だと、アンリはすっかり油断していた。声を漏らさず、ただ涙をあふれるままにする。不意に、目の前のシーツがいきなり盛り上がった。

「ばあ！」

まるで子どもみたいな脅かし方で、亜麻色の髪てんしんらんまんの女性が現れる。びくつとするアンリを見て、女性は屈託なく笑った。

およそ伯爵夫人らしからぬ、その天真爛漫な女性こそ、姉妹の母ミレイユだった。『どうしたの、天使さん。空から落っこちてきちゃったの？』

母の声は優しい。アンリはたまらなくなり、ミレイユの腰にしがみついた。

「あら、私の天使は泣き虫さんね。いらっしやい、二人だけでお茶会しましょ？」
繊細な指がアンリの手を包む。アンリは母に手を引かれ、姉たちのいる部屋ではなく、台所だいしよのとなりの小部屋に入った。

アイロン台とミシンがあり、家事ができるようになっていた。縦長の窓から屋敷の前庭が見え、その向こうにはウィルリントン市の街並みが広がっていた。午後の淡い日差しを浴び、家々の赤い屋根と、青空のコントラストが爽やかだ。

ミレイユは「お義母さまには内緒ね」と言って、たっぷりのハチミツを紅茶に落とし、確かに、イライザが見たら眉をひそめるような量だった。

雑多な部屋で隠れて舐める甘い紅茶は、秘密という調味料が加わって、美味だった。ミレイユがアンリを膝に抱き、窓からの眺めを見せてくれる。アンリは幸福なぬくもりに抱かれ——その幸せが、急に怖くなった。

自分の悩みの根幹に関わる、ひとつの疑問が鎌首をもたげる。

幼心にも、それを言葉に出すのははばかられた。言ってしまうのは、とてもみじめな気がしたから。だが、訊いてみたい自分を抑えることもできない。

「ねえ、お母さま……私と、お姉ちゃ——お姉さま」

「うん？」

「お姉さまの方が、好き？」

そんなことないよと言ってもらえなかったら、道を踏み外すかもしれない。そのくらい危険な問いだった。ミレイユは静かに微笑み、アンリをのぞき込んだ。

「そう思うの？」

こちらに答えを預けてくれる。アンリを包むミレイユの体温が、言葉よりよほど強く、アンリの不安を否定していた。アンリは少し安心して、もうひとつ訊いた。

「お祖母^{ばあ}さまは、どうかな？」

「お義母さま？ 何かおっしゃったの？」

「……『お利口よ』って」

「まあ！ それ、私も一回くらい言われたいわ！」

真顔で言って、自分で吹き出す。ほがらかなミレイユの笑い声に、アンリは少しずつ、心が軽くなっていくのを感じた。

悩みが消えたわけではない。根本的には何一つ解決していない。

だが、小さなことに思えてくる。母といくと、いつもそうだ。

「わたしもいつか、お姉さまみたく、なれるかな？」

言ってから、やめておけばよかったと思った。これは大人^{おとな}を困らせてしまいうたぐいの、してはいけない質問だった。

「……確かにシャルは、何をやっても上手よねえ」

シャルの方がお姉さんなんだから、そのぶんよ——なんていう子ども^こも騙^{だま}しの答えを、母は言わなかった。

ミレイユはアンリを子ども扱いせず、こんなふうに訊^きいた。

「ねえ、アンリ。右手と左手、どっちが好き？」

（……その後、母は何と言ったのだろうか？）

アンリはほんやり、そんなことを思った。

（忘れてはいけない……とても大切なこと……だったような気がする）

いや、よそう。過去など思い出したくもない。みじめな記憶があるだけだ。

（母が何を言ったにせよ、今の私は間違いなく『利き腕』の方ね）

『我が君？ お疲れですか？』

シルヴァルリに問われ、アンリは我に返った。

グローリアに近衛を命じられ、喜びのあまり浮ついたか。こんな調子で大役を果たせるわけがない。アンリは自らを戒め、周辺の精霊たちに支配の呼びかけを行った。

アンリが立っているのは時計塔の鐘楼部分。この高さからなら学院を一望できる。

大気に満ちる風、火、水、大地、さらには樹木、石に鉄——要するに学院そのものを、アンリは精霊として認識し、己の〈目〉〈耳〉として使っている。かなりの重労働だが、女王の言葉がアンリを高揚させていて、負担は感じなかった。

シルヴァルリも察したようで、如才なく言祝ぎを述べた。

『こたびの近衛就任、お慶び申し上げます』

「ありがとう。私も誇りに思う」

『実力を考えれば当然です。かの機巧師団にも我が君ほどの精霊使いは稀——今の貴女をご覧になれば、イライザさまも、さぞお喜びになったことでしょう』

「……そうかな？　そう思う？」

『もちろん。イライザさまはおっしゃったはずですよ。「貴女の将来が楽しみだわ」と』
アンリの胸に、かつてない充足感が満ちる。

アンリ自身、今は己の将来を楽しみに思う気持ちがある。遠からず、グロリアは国政に返り咲き、政府の実権を握る。そうなれば、アンリは正式に近衛隊の配属となる。それも直衛のロイヤルガード。給与待遇は佐官クラス。ゆくゆくは機巧師団の幹部として迎えられ——しかし、そこからが本番だ。グロリアは世界帝国を築き、女皇帝の道を往く。アンリはその片腕として、プリューの名に恥じない武功を打ち立てていく。それだけの力が、既にこの身にはある。

輝かしい未来が見える。父も祖母もなし得なかった、爵位昇進すらあり得る。

だが——漠然とした不安が、霧のように胸に広がる。

あたかも『道を踏み外してしまった』ような恐怖。何か大切なことを忘れ、ずっと大事にしていたものを、手放してしまったような気がする。

この感情は何だろう。何かが……違う。何かが、間違っている。

なぜだ。グローリアに認められ、嬉しいはずなのに――

自分が幸せであると、確信が持てない。

『突然の幸福に、人は戸惑うものですよ』

アンリの複雑な心情を見透かし、シルヴァリがささやいた。

『ですが、これまでが不遇過ぎたのです。この幸福を素直に受け入れ、より一層の働きでグローリアさまに報いるべきではありませんか？』

「――その通りよ。いいことを言うのね、シルヴァリ」

『恐れ入ります。ご遠慮なく我をお使いくださいませ』

「ありがとう。そうさせてもらう」

驚異的な支配力だけでなく、物腰や言動まで頼りになる。その上、強力な特性を持つ。これほどの守護精霊ガーディアンを持つ者は、歴代のブリュー家当主にもいなかっただろう。

（それはとても誇らしいこと。それに、私はこの子を素敵だと思う。だって――）

アンリが敬愛する女王グローリアに、声が似ているのだ。

2

「――う？」

遠くに悲鳴を聞いたような気がして、ブラシを持つ手が止まった。

作戦開始一〇分前。フレイは庭園でガラムにブラシをかけていた。実戦の緊張をやわらげ、心を落ち着かせる効果があるし——これが最後になるかもしれないから。

「誰かが、助けを……呼んでる？」

ガラム犬も何か感じたらしい。皆が同じ方角を気にしている。学院の中枢、学院長公邸や重要機巧保管施設がある方向だった。

胸騒ぎがする。確かめに行こうか迷ったが、こちらもうすぐ出番だ。板挟みになり、行きつ戻りつしていると、不意に嫌みったらしい声が降ってきた。

「ちよつとちよつとちよつとおく、勘弁してよねえ」

幼く見える少女が樹上に座っている。黒いローブとドクロの杖がトレードマーク。

黒薔薇の孫ドロシー。相変わらず高いところが好きらしい。

「また何かやらかそーってわけ？ 言っとくけど、あんたはお婆——お姉さまの保護下にあるのよ。よその薔薇とコトを構えようなんて、許されるわけないでしょーが。監視役のあたしの身にもなりなさいっての！」

「う？ ドロシーも手伝ってくれるの？」

「はあああああ!? ばっかじゃないの!? あたしの仕事増やすんじゃないわよって言いに来たのに、何であんたの中では逆転してるわけ!?」

「ドロシー、優しいから」

ぴきぴきと青筋が立つ。ドロシーは罵声を浴びせようとしたが、途中でやめ、

「……わかってんでしょ。あんた、こっちに長くいられる体じゃないのよ。なのに昨夜も、さんざん夜会で無茶むちゃしてさ」

「心配してくれて、ありがとう」

「くくくれてなあーい！」

枝から転げ落ちそうになる。ドロシーは立腹して、結局はフレイを罵倒した。

「舐なめてるとブチ殺すわよドグサレ！ おっぱいお化け！ 地獄へ帰れ！」

言い散らかして、枝を蹴る。栗鼠リスのように俊敏に駆け、木立ちの奥に消えてしまった。彼女と入れ違うように、木陰からロキが姿を見せた。

「あいつは一体、何をしにきたんだ？」

やりとりを見ていたらしい。フレイは笑って、

「ロキとおんなじ。私を心配してくれてる」

「気を許すなバカ。あんたの天然にかかると、みんな善人になる」

「う……天然……」しょぼん。

「だが、あいつの警告はもつともだ。勝手な行動を取るな」

「……アンリ、助ける」

きりりと顔を引き締める。ロキが反対しても、意志を貫く覚悟だ。

にらみ合いになる。フレイは目をそらさず、しっかりと声で言った。

「私ね、アンリに励ましてもらったことがあるの。オートマトン自動人形エクスポのとき。エリアー

デ先生の研究が悪用されて、みんなで黒太子を止めたとき」

エヴァの《絶対王権》マルチコントロールに為す術もなく、機巧都市が制圧された、あのとき――

「私は弱くて、作戦に参加できな……させてもらえなかったよね？」

「そうだったな。だが、最後にはあんたも」

「悔しかったの。弱い自分が許せなかった。だってみんなが――ロキが危ないことをするのにお姉ちゃんの私が何もできないなんて……つらかった」

「……それは悪かった」

「そのとき、アンリが言ってくれたの。『フレイさんにはできることがある』『私なんかと違ってすごい魔術師だから』って」

あの日もらった言葉は、宝物のように、フレイの胸にしまわれている。

「私ずっと、自分のこと、駄目な子だと思ってた」

「事実だろう」

「うっ」めそり。

「……悪かった。続けてくれ」

フレイはラビの首をさすりながら、話を続けた。

「だけど、気付いたの。こんな私より、もっと悔しい子がいるんだって。ライシンがくるまで私が夜会最下位だったけど——夜会に出られない子、いっぱいいたよね？ 私が自分を認めないことは、そういう子たちを傷つけちゃうのかもって」

「……それはあんたが背負^{せお}い込むことじゃない」

「うん。だから、考え方を変えたの。弱い私を嘆くんじゃなくて——他人に誇れるくらい、強い私に近づいていこうって」

弱い自分も、決して無価値ではないと認めてやること。

認めた上で、そんな自分に甘んじないこと。

それがあの初夏の日、フレイが出した結論だった。

その考えに従い、夏のあいだ中、自主鍛錬に明け暮れた。フレイが手にした力の土台は、アンリと過ごした夏休みにある。

ロキはじつとフレイを見つめ、ため息とともに言った。

「あんたは……本当に……すごいな」

フレイは赤面した。優秀な弟にそんなふうに言われると、とても照れくさい。

「アンリエットを助けるのはいい。だが、オレに無断で行動するのは認めない」

「う……でも、ロキには大事な試合があるし」

「それがわかっていいるなら、余計な心労をかけるな」

「……ごめんなさい」しょぼん。

言いすぎたと思ったのか、ロキの語調がやわらいだ。

「今日のおんの『薬』は飲んだのか？」

「飲んだ。リビエラも」

コリーを示す。コリーはのんきにあくびをして、首の後ろを足でかいた。

ロキはうなずき、意外なことを言い出した。

「なら、いい。アンリエットの救出はオレも手伝う」

「え……試合はっ？」

「シャルロットは戦うつもりなんだろう？ 例の地球規模バカも大人おとなしくしているはず

がない。オレだけ休んでいるというのは、むしろアンフェアだ。……あの大馬鹿おおバカ野郎と

は、五分の勝負でケリをつけたい」

軽く言ったが、ロキの声に熱がこもったのを、音に敏感なフレイは気付く。

ロキは雷らいしん真との勝負にこだわっている。彼に勝って、魔王ワイズマンになりたいのだ。

「それに、アンリエットはあんたの数少ない友人だ。見殺しにすれば、あんたの学院生

活が寒々しく孤独なものになってしまう」

「う……『数少ない』……っ」

「そこが不満なら言い直そう。『唯一の』と」

「シャルだって友達だもん……。そう言うロキの友達は、ライシンだけ？」

「誰が友達だ！ ふざけるな！」

「じゃあ……友達、いないの？」

意図せず反撃になっている。ロキはぐつと詰まったが、思い出したように笑った。

「あのバカのほかにもいるさ。オレを認めてくれる奴は」

ロキの表情はやわらかい。彼の中には、かつてのようなイラ立ちがない。姉が危険を冒そうとしているのに、動揺も焦燥も見せない。

間違いなく、それは成長の産物だろう。人と関わり合うことが、人を変えていく。養父ブロンソンがロキに冷徹さを強いたように、雷真やアスラ、アンリ、ドイツの少女人形が、彼を少しずつ変えてきた。

それが、とても嬉しい。にこにこしていると、ロキはあきれ顔になった。

「へらへらするな。あんたにもしものことがあるれば、オレが魔王になる意味は無——半減するんだぞ？」

「そんなことないよ。ロキはすごい魔術師だから。きっと、もっとすごくなるから。ロキは立派な魔王になって、人類の発展に貢献するの。たとえば、私がいなくても」

「駄目だ！ あんたがいなければ！」

思いのほか、強い語調だった。反射的に伸びたロキの手が、フレイの手首を握り締める。ロキは我に返り、乱暴にその手を離れた。

「くだらん！」

足取りも荒く離れて行く。ちょっと意外だったので、フレイは自分が夢でも見たのかと思った。だが、つかまれた腕の熱さは、フレイの手首に残っている。

ガラムたちが小首を傾かしげて主を見上あげる。フレイはくすくす笑った。

やはり、人は変わる。姉弟もまた、変わっていく。

フレイはほがらかな気分で、ロキはやっぱり、私がいなくても大丈夫だと思った。

3

アリスと連絡が取れない。

そんな怖いことを、作戦開始直前に、イオネラが言い出した。

「ちよつと先生！ 連絡取れないってどういうこと!？」

シャルは魔具のイヤリングに呼びかける。既に全員が配置につき、シャルはシグムントとともに医学部近くの木立ちに身を潜めている。

『言ったまんま……。連絡、つかなくなっちゃった』

首筋に氷を当てられたような気がした。連絡がつかない、という言葉に心的外傷を刺激される。父エドガーがフランスで行方知れずになったとき。母ミレイユとアンリがいなくなったとき。いずれも連絡がつかず、それが別離の始まりだった。

アリスは雷真らいしんと一緒にいるはずだ。あちらで何かあったのか。

「……それじゃ、最後の最後が不安だわ。作戦の開始、遅らせましょう」

『それはダメ。連絡取れなくても行動するようにつて念を押されてるから』

「薔薇ばらに悟られないよう、わざと無線を封鎖するかも……つて意味よね？」

その理屈はわかるのだが、保険が間に合ったのかどうかの確認はしたい。シャルの用意した切り札が不発に終わったとき、頼りになるのは雪月花せつげつかの救援なのだ。

シャルの弱気を感じ取ったのか、魔具からヘイゼルの声がした。

『アンリエットの命がかかっている。集中して。へましないで』

その通りだった。アリスを信じて、こちらはこちらのベストを尽くすしかない。

『大丈夫、シャルちゃんので決めちゃえば問題ないよ。時間通り、始めよう！』

イオネラの号令がかかる。シャルは風の精霊を呼び集め、鳥のように飛んだ。

窓を破って医学部に突入。巧みに気流を制御して、狭い廊下を突っ切る。教授たちには申し訳ないが、魔女に気付かれる前に、アンリの身柄を確保しなければならない。加

えて、騒ぎを起こして警備を刺激することが、そのまま魔女への牽制^{けんせい}になっている。

目指すのは一階の最奥。アンリが隔離されている、窓のない病室だ。シャルは鷹狩^{たかが}りのようにシグムントを前に飛ばし、躊躇^{ちゆうちゆう}なくぶっ放した。

「ラスターカノン！」

シグムントが鉄の扉を吹き飛ばす。——そこで、予想外の事態に直面した。

「え、いない……!? 中にいないわ！」

「いない? 何が? って、アンリちゃんが!?」

その通り、アンリがいない。室内にいるのはクルーエルだけだった。

「……誰^{だれ}がはしゃいでんのかと思えば、シャルロットちゃんか」

破れた扉の向こうから、クルーエルが言う。ラスターカノンは内部を焼いてはいなかった。燐光^{りんこう}を放つ障壁のようなものが、シャルとクルーエルを隔てている。

「先生、この壁は何? ラスターカノンに耐えたみたいだけど……結果?」

「俺^{おれ}を閉じ込めるためのな。アンリエット嬢^{おれ}ちゃんがこさえたもんだ」

「——っ!?」

「俺じゃどうしようもなくてね。廊下はどうなってる? 騒ぎになってないか?」

言われて気付く。シャルが廊下でラスターカノンをぶっ放したのに、誰も部屋から飛び出してこない。教授も、学生も、警備さえ!

精霊術で屋内を探り、愕然とした。

部屋という部屋が、このこと同じように、魔力で閉鎖されている。

やったのはアンリ……らしい。同じことができるかと言われたら、答えは否。アンリはどうやら、シャル以上の精霊使いになってしまったようだ。

シャルはつい責めるような口調になって、クルーエルに言った。

「アンリはどこに行つたの？　そもそも、どうして逃がしたのよ！」

「……不手際があつたのは認める。嬢ちゃんが急に苦しみ出したんで——要は演技だったわけだが——拘束をゆるめたら、このざまだ」

「拘束を解いたの!？」

「……すまん。要塞級の拘束つてのは、魔力循環系に障害が出るくらい強いんだ。内臓を傷める可能性もある。苦しみを訴えている以上、ゆるめないわけにはいかない。解放剤の禁断症状つてセンもあつたしな」

禁断症状。意味を考えるのも嫌になる単語だ。

弱い拘束に変えた途端、アンリは強固な結果で教授を分断し、校舎を制圧した。

シャルは戦慄した。アンリが自由に精霊術を行使できたなら、対抗魔具があつたと

ころで、作戦会議は銀薔薇に筒抜けだった……かもしれない。

そのとき、イヤリングからイオネラの悲鳴が聞こえてきた。

『きゃあ！ 何で動いてるの、この人形——ああつ、エヴァが！』

ガラスが砕け散るような音が響き、すぐに静かになった。

「先生!? ちょっと、イオ！」

呼びかけても、応答はない。シャルはあわてて廊下を駆け戻った。

4

シャルが突入するのを確認して、ヘイゼルも行動を開始した。

既に、目視で確認できるほどの近距離に標的をとらえている。

医学部の裏手、廃材置き場に機械人形が身を潜めている。稼働レベルが落ちているが、無力かと言えば、そんなわけではない。魔女が操作できずとも、迎撃システム、トラップ、自爆装置くらいはあると想定している。

まずはその抵抗を押さえ込めるかどうか。第一段階はヘイゼルにかかっている。

ヘイゼルは袖をまくって、となりのフレイに差し出した。

「はい。やって」

「う、大丈夫？ これ、けっこう、痛い——」

「早くやって！ 貴女あなたにできて、私にできないわけない！」

「じゃあ——リビエラ！」

フレイの命を受け、コリーがヘイゼルに噛みつく。牙が腕の血管を破り、圧力の逃げ道を確保してくれる。ヘイゼルは痛みに顔をしかめつつ、渾身の力を込めた。

人造心臓の炉心を使い、生き血を魔力に変換する。徹底的に——心臓が暴走するくらい強く。高まりすぎた圧力は、血管の穴から意図的に逃がす。血液循環と魔力循環がリンクして、高いレベルで安定が取れた。

ふわっと、自分の体が重さを失くしたように感じた。

力がみなぎる。思わず自分の手を見る。ぶ厚い魔力が鎧のようなのだ。

潤沢な魔力で筋力を強化し、ヘイゼルは標的との距離を詰めた。

案の定、機械人形の防衛機能は生きていた。肩から四門の銃口がせり出し、ヘイゼルを蜂の巣にする——前に、こちらが叫ぶ。

「父なる王の声を聞け！ 鉄人形は眠りに落ちる！」

高めた魔力のありったけで、魔術回路（勅命詔書）を起動。撃たれた銃弾が顔をかすめたが、直撃はしない。ぎいぎいと歯車が鳴き、相手の体が強張って——

糸が切れたように脱力し、前のめりに倒れ込むのを、ヘイゼルは足で止めた。

「確保した！」

『さすがだよヘイゼルちゃん！ 後は私とエヴァに任せて！』

イオネラからの通信と同時に、透明な歌声が風にのって届いてきた。その外側で犬たちがハーモニーを奏で、《音の結界》で歌の拡散を防ぐ。

やがて、機械人形が再起動し、両眼に光が入った。

『……っふー、ひとまず、やることはやったよ』

イオネラが安堵の息をつく。あんど一見は、何も変わっていないように思えた。

「攻撃してこないけど……上手く行ったの？」

『その目で確かめて。どう？ どう？』

という声が、機械人形の口から聞こえる。

魔女の人形が、イオネラの意志でしゃべっている！

エヴァの魔術回路（絶対王権）マルチコントロラーは、本来『イブの心臓を改竄する』ものだ。ハイゼ

ルが人形を無力化したので、その本来の用途で用いることができた。

イブの心臓を書き換えれば、こちらの傀儡にできる。かいらいこの人形の口を借りて命令すれ

ば、アンリも従ってくれるだろう。そうして、まずは魔女の目の届かない場所に移す。

（そのときは、アンリエットを騙すことになる。だます気に食わないけど……仕方ない）

すべてはアンリを元に戻すためだ。それに、そのプロセスをすっ飛ばせる可能性もある。アリスの立てたこの作戦には、別の目的も隠されているのだから……。

「とにかく、よかった。これで、第一段階成功——」

「イージスⅡを奪うとは、ずいぶん悪戯が過ぎますね」

職業軍人なみの感覚を持つヘイゼルが、敵の接近に気付けなかった。

今さら黒刀を構え、振り返る。果たして、思った通りの人物が、そこにいた。

先王妃グローリア。王族の衣装ではなく、灰色の外套を羽織っている。そのせいか風格は以前より控えめだが、威圧感はまだ衰えていない。

「〈影〉を破るとは、さすがは機巧学院の者たち。ヘイゼル、そなたも元気そうでは何よりです。いえ、元気過ぎると思うべきですか。わたくしの可愛いアンリエットを奪い取るうなど、いけない泥棒猫……。そなたには罰を与えねばなりませんね？」

アラバスク模様が彫りこまれた、優美なブロードソードを抜き放つ。ぞっとするような死の予感が振りがかり、剣技に長けたヘイゼルが相手の剣気に怯んだ。

グローリアの強烈な踏み込みがくる。

ヘイゼルは魔靱のスキルを使い、黒刀で受けた。魔靱が干渉し、衝撃波を生む。またしても黒刀を叩き折られ、ヘイゼルは十メートルも弾き飛ばされた。

石畳に激突し、苦痛にうめく。ほかにどうしようもなく、ヘイゼルは笑った。

「隠れてのぞき見なんて……女王のすることじゃない」

「無礼な。わたくしは今しがた、学院に到着したのです」

「本人じゃないなら……誰がのぞいてたの？ 対抗魔具……効いてなかったの？」

「機能してましたよ。実に、見事なものです」

「だったら、どうして……私たちの計画が、漏れて……？」

いや、わかっている。本人でも人形でもないのなら、監視役は――

「貴女たちの作戦には三つ、大きな見落としがあったのです」

グローリアは薄く笑って、ヘイゼルが思った通りのことを言った。

「一つ目はアンリエット。彼女の逃亡を想定せず、把握もしていなかったこと。二つ目はこのイージスⅡを一体きりと思い込んだこと」

手で招く。呼びかけに応じ、二体のイージスⅡが現れた。それぞれがイオネラとエヴァを仔猫のようにぶら下げている。……あつさりやられたらしい。

さらに別の方角からも一体。こちらはフレイの首根っこを押さえていて、ガルムたちが周囲を取り巻き、手出しできずにうなっていた。

かくして、伝説級にも匹敵する最新鋭機が、計四体となった。

「そして三つ目の見落としは――いえ、これは伏せておきましょう。どのみちそなたたちの投了、という解釈でよいのですね、シャルロット？」

医学部の方に流し目をくれる。庭園の片隅に、うつむいているシャルがいた。

シャルはゆっくり顔を上げ、不敵に笑った。

「おあいにく！ 投了するのは貴女よ！」

前兆なしで魔力を炸裂^{さくれつ}させる。うつむいていたのは、何も気落ちしていたわけではない。土中の精霊たちに働きかけ、内部で何かを構築していたのだ。

シャルの願いに応じ、その何かがせり出してくる。

それは樹木の根であり、自在に形を変える鉄、石、粘土であった。大地に由来する材質がグローリアを包み込み、一瞬で檻^{おり}を形作る。

外側で金属板が輝き、彫られたルーンが魔力を発揮。イオネラが制御する一体をのぞき、三体のイージスⅡが一度に稼働を止めた。

「ほう……この牢^{ろう}、わたくしの魔力を遮断している……」

グローリアが檻^{おり}に手を触れ、効果を確かめる。精霊が造った即席の檻は、見た目の貧相さとは裏腹に、グローリアの魔力を完全に封じていた。

シャルはシグムントを籠手^{こて}に止まらせ、グローリアに狙いをつけた。

「機械人形が一体きりなんて、アリスが決めつけるわけじゃないじゃない」

「……ならば、ただ一体に全員の力を結集したのはなぜです？」

「知略を鼻に引っかけた将は、相手の失着をとがめずにはいられない——私たちが隙^{すき}を見せたそのときこそ、貴女^{あなた}は学院に現れる」

確実に勝てるという確信がなければ、本人は姿を見せないだろう。だからこそ、こち

らは敢えて、わかっている危険に対処しなかった。

「人形を何体つぶしたってアンリは元に戻せない。私たちには生身の貴女を取り押さえる必要があった。これはご本人をお招きするための、盛大な〈余興〉よ！」

（やった……！）

ヘイゼルは心の中で快哉かいさいを叫ぶ。今なら少し、シャルを見直してもいい。

形勢逆転。少女たちが力を合わせ、薔薇ばらの魔女と人形四体を生け捕りにしたのだ。

5

「ふ……ふふふっ」

グローリアが楽しげに笑うのを見て、シャルの体を恐怖が貫いた。

魔女は檻の金属板に触れ、口頭試問の試験官のような口ぶりで言った。

「よくぞ再現したものの。この付与魔術エンチャントは、わたくしが魔竜の鳥かごに用いたものですね？ 魔防の研究過程で見いだした、魔力伝導を阻む魔封じ——ですが、解せぬ。このルーンがそなたに解析できたとは思えません」

「……そこが印章術エンチャントのいいところよ。意味がわからなくても、同じ効果を得られる」

「複写を用意していましたか。周到なこと。ですが、それをいつ刻んだのか。ここ数

日、そなたの動向は常に監視していました。眠っているときでさえ——」

言葉の途中で気付く。シャルは昨夜、機巧都市を離れ、はるか遠くにいた！

「学院の外でこさえましたか。恐るべきはブリューの血筋——いえ、血に帰するのは不当ですね。そなたがこれまでに積んできた、たゆまぬ研鑽けんさんのたまもの。没落の不遇にもめげず、健気けんけなことではありませんか」

シャルの頭にかつと血がのぼった。没落の元凶は結社だというのに……！

「おまけに大した心胆です。敵の魔術など、わたくしは恐ろしくて使う気にはなれません。考えてはみなかったのですか。わたくしが万が一に備えているのではと。すなわち、自身が囚ひわれる可能性も、考慮しているのではと」

もちろん考えた。だが、その可能性は排除した。中から解除できる手段を用意すべきかと言え、そんなはずはない。その解除手段を敵に知られたら、檻の意味をなさないだろう。今度はその欠陥品が『怖くて使えなく』なる。

だが——確かにそこが、シャルの盲点だった。

グローリアの剣が閃ひらめき、檻おりの中にルーン文字を刻む。わずか三字のルーンを刻んだ途端、封じられていた彼女の魔力が戻り、イージスⅡが再起動した。

そうになると、即席の檻はもろい。魔軻まじんで簡単に叩たたき壊されてしまう。

「……用心深い魔女さまとも思えないわね。そんな簡単に解除できるなんて」

負け惜しみを言うのと、グローリアは声を上げて笑った。

「実に、愚昧ぐまいよ。魔術師ではなく、自動人形オートマトンを捕らえるべきでした」

なるほど、人形を捕らえたのなら、中から壊される心配はなかった。だが、実を言えば、破壊されようとされまいと関係はなかったのだ。

女王をおびき出し、全員で総攻撃を加える——それがアリスの作戦であり、檻は結局、仲間が間合いの外から集結する間を稼げればいい。

「さあ、次の一手を指しなさい。攻め手が切れたわけでもないでしょう？」

「……どうする、シャル」

シグムントの声が硬い。それもそのはず——くるはずの応援がこない。

雪月花せつげつかは救援に現れないのなら、この檻が切り札であり、二の矢、三の矢はない。いや、二の矢もあるにはあるが、フレイが人質に取られていては、機能するかどうか。

シャルも、イオネラも、フレイも、ヘイゼルも、誰も動けなくなった。

グローリアは失望のため息を漏らした。

「浅い……策略で妃殿下わたくし將軍を上回ろうなど、十年早かったようですね」

「じ、時間さえあれば！ 時間があれば、アリスは策略で勝ってたわ！」

「時が足りぬ時点で、浅いのです。応手がないなら、詰みますよ？」

「まだよ！ 貴女あなた一人くらい、みんなで力を合わせれば——」

「一人？」

グローリアがまばたきする。生じた不安を否定したくて、シャルは早口で言った。

「兵隊が学院にきてないことは、フレイがとくに確認してるわ！」

フレイがこくこくとうなずく。先刻の〈音の結界〉は〈絶対王権〉マルチコントロフの拡散を防いだ

だけではない。ガルムの吠え声はは能動的知覚アクティブセンサ、索敵にも使えるのだ。

現在、学院付近に機巧師団は存在しない。今のグローリアが指揮権を有するはずもない。代わって脅威となるのは結社の黒マントたちだが、ガルム犬は彼らの匂いも、気配も探知していない。グローリアの味方はアンリだけだ。

「それが罫わなとは、考えなかったのですか？」

「——!?」

「そなたたちが我が身を罫おとりとしたように。わたくしも己を罫とした……とは？」

艶然えんぜんと微笑はほえむ。シャルの目の前が真っ暗になった。

「こっちの攻めを誘った……？ 何のために……そんな……罫を……っ」

「そなたはチェスの名手にはなれませんね。そなたに意図があるように、相手にも意図があるのです。攻めを誘った理由は簡単、そなたの忠誠心を試し、逆心あらば自滅させるためですよ。その結果として、わたくしは作戦の障害となるだろう、忌まい忌まいしき者どもを残らずおびき寄せることができました」

だとしたら、この状況——すべてが引っくり返ってしまふ。

「ら……ラスターカノン！」

まさしく、撃たされた一発だった。手加減なし、至近距離からの一撃はしかし、足も
とから伸びてきた機械の腕に弾かれる。

精巧だが、華奢な作りの細腕だ。それが苦もなく簡単に、滅元素の大砲を打ち消して
しまふ。一体きりではなく、それを皮切りに、増援が続々と現れた。

「ただいま到着いたしました、王母殿下」「主命により、お守りいたします」

ある者は大地から、ある者は宙を蹴って。いずれもアンティーク調の機械人形を連れ
ていて、黒一色の戦闘服を身につけていた。要所を護るプロテクターと対刃繊維を組み
合わせたもので、シャルもかつて着たことがある。

氣力が萎えるのを感じながら、シャルは相手の戦力を見積もった。

一番目立つのは、翼を持つ機械人形。次は、羊の頭を持つ機械人形。下半身が蛇のも
の、馬のものもある。てんでバラバラのモチーフだが、聖書の悪魔を思わせる凄みがあ
り、古めかしい歯車使いに共通点があった。……恐らくは、伝説級だ。

指揮官らしき軍人がグロリアに最敬礼した。

「ディラック少佐であります、グロリアさま」

「頼もしく思いますよ。そしてアンリエット——兵の案内、ご苦勞でした」

空間が縦に裂け、アンリが現れた。一人ではなく、十数人の兵を連れてくる。こちらは小銃と犬型自動人形オートマトンで武装していて、白コートのGLRの紋章が入っていた。

アンリの出現と同時に、耳元でロッテの悲鳴が上がる。

『シャル！ 精霊が支配を離れて……言うことを……聞いてくれないわ！』

アンリに精霊コントローラーの支配権を奪われたようだ。

精霊は強力な武器だが、基本的に力の強い方につく。こうなってしまうと、ロッテは兵を失った女王のようなもので、本人の力も十分に発揮できない。

つまりもう、魔剣闘法グラムパニャは使えない。

これだけの数の敵を前にして、輝かしい王権ヴァリアントレックスが失われ、ラスターカノンに頼りきりだった、かつての〈暴竜トレックス〉に戻ってしまった。

己の戦力と人質を並べ、グローリアが問う。

「今度こそ。投了ですか？」

Chapter 5 暗転

1

アリスの胸に、かつて感じたことがないくらい、大きな後悔が押し寄せた。時間を逆行できるものなら、数時間前に戻りたい。だが、何度やり直してみても、この可能性を読める気がしない。

（プリンスが……ライシンを……刺した……!?）

倒れ込んだ雷真らいしんを夜々ややが抱き起こす。雷真の制服は見る間に血まみれになった。

「日輪ひのわさま……なぜ……!?」

いろりいろりが狼狽ろうばいを見せる。その隙すきを逃さず、綺羅きらの大鬼が殴り飛ばした。衝撃でいろりの傷口が開き、どばとと出血する。

「姉さま!? 雷真、姉さまが!」

夜々に揺さぶられても、雷真は応えない。ただ虚ろな目で虚空を見ている。

「あかん……! 雷真はん、もう意識ないんや……!」

六連^{むつら}がうめくように言う。アリスは貧血を起こしかけた。刺した日輪も血の気を失い、震えながら血塗れ^{ちまみ}の禁刀を見つめている。

「プリンセス……これだけはつきりさせてくれ。刺したのは、君の意志？」

「……わたくしは〈いざなぎ一門〉を背負^{しよ}って立つ女」

日輪は紫色の唇で、自分自身を鼓舞するように、強く言った。

「頭領に迷いがあつてはなりません。それが、いざなぎ流です！」

迷いがないようには、とても見えない。声も腕も震えているじゃないか……。

「それでええ、それでええんやよ、日輪」

孫の成長を喜ぶ祖母といった風情で、綺羅が何度もうなずいた。

「さあさ、裏切りもんと人形片付けて、早^はよ旦那^{だんな}さんところ行こな」

睥睨^{へいげい}するようにこちらを見渡す。雷真が倒れ、日輪が敵に回った。シン、小紫^{こむらさき}が戻

ってくる気配はない。こうなつてはもう、逃げるしかない。

アリスは己^{みづか}が隠し持つ魔術回路〈虚像〉^{プロトケン}を起動した。

白い霧が室内を覆^{おほ}う。同士討ちを恐れたか、あちらの攻撃が止まった。

アリスは声を殺し、仲間たちに言った。

「虚像はやエガスマいほど万能じゃない。霧にまぎれて早々に離脱するよ」

「アリスさん……姉さまがもう……。雷真の体も、冷えてきました……」

夜々が弱々しく言う。いろりは床にへたり込み、立ち上がれないらしい。いいいよ、まずい。込み上げる焦燥を押さえつけ、アリスは活路を探す。

「……ムツラ、例の結界が機能してないなら、転移のシキガミを出して」

「ええつ、僕の間土里じゃ、あの二人は振り切れませんよ！」

「振り切れ！ さもなきやここで全滅だ！」

雷真が死んだら、アリスは一生、自分を許せそうもない。そしてそれは、夜々も六連も同じはずだ。夜々が雷真というのを抱え、六連が呪文を唱え始める。

「させへんよ！」

魔力の高まりを察知された。綺羅が鬼を差し向けた――が、それはアリスの思惑通り。鬼が繰り出した鉄拳を、アリスはわざと義手にもらった。

骨の髄まで衝撃が透徹し、骨格がみしみし啼く。その甲斐あって、上手い具合に義肢が割れ、シリンドーからガスが噴き出した。

幻覚の霧と実際の霧が混じる。さすが、綺羅は敏感に危険を察した。

「日輪、下がりをよし！ 吸うたらあかんえ！」

いい勘をしている。だが、毒ガスではない。アリスは魔石を放り、念を込めた。

魔石に封じられていた『火炎の』魔力がガスに引火し、爆発を引き起こす。と同時に六連の転移が発動し、アリスたちを建物の外に退避させた。

「うわあああすんません！ 全然……あかんかったあああ！」

情けない悲鳴とともに、術が破れる。わずか十数メートルのショートジャンプで、一同は空中に投げ出された。距離が近いので、背後から灼熱の爆風が迫る。

いろりが最後の力を振りしほり、氷の壁を生み出す。押し寄せる火焰と瓦礫を、どうにか氷壁がしのいでくれた。

しかし、もちろん、それで危機が去ったわけではない。

「途中下車とは、余裕どすなア？」

鬼の肩に座り、綺羅が火炎の中から現れる。もちろん日輪も一緒だ。

綺羅は着物の袖で口元を隠し、嫌みな笑みを浮かべて言った。

「安心しほり、アリスさん。あんたは殺さへん。そのボンクラはお仕置きするし、雷真さんがどうなるかはわからんけどね」

「たは……やっぱし僕は極刑なんや……」

六連がひきつった笑いを漏らす。それでも寝返るつもりはないらしく、印を結ぶ手つきを崩さない。夜々もまだ戦意を失っていない。きわどいが、まだギリギリ、残っている。相手が乗ってくれるのを祈りつつ、アリスは世間話のような調子で言った。

「うちの馬鹿執事を知りませんかね、お館さま？」

「あんたさんとこの家令？ そやなア、知つとるような知らんような」

「雪月花の〈花〉も見当たらないんだけど？」

「そ、そうです！ 小紫はどこですか！」

「はてさて、それも知つとるような、知らんような」

にんまりと笑う。アリスの心臓が暴れ出した。そろってやられたのか？ それでは計画が狂う。シンにはまだ、やってもらいたいことがあったのに。

（切り札の調達は……オルガに任せるしかないな。連絡がつけば、だけど）

綺羅が呪符をまき、式神の大群を呼び出した。

二十、三十、五十——途中で数えるのが嫌になる。蛙、猿、鴉、蜥蜴、甲虫など、数百もの瘴気の生物が、あたりを埋め尽くした。

「……慎重だね、お館さん。そんなに数をそろえちゃってさ」

「あんたさんは知恵が回りますさかいな。ほな、落とし前つけさしてもら——」
いきなり誰かの魔力が走り、魔鞠のきらめきが大地を撫でた。

猛烈な斬撃。水で洗い流したように、そこだけ式神がいなくなる。

魔術師全員がそちらを向く。式神の包囲の外側に、気配の主が出現していた。その魔

性は圧倒的で、綺羅にも引けを取らない。

「地獄に仏……まさに東洋のことわざだったね……！」

アリスの思惑通りの展開になった。先ほどの公邸爆破は、脱出のための目くらましでも、ましてや綺羅の命を狙ったものでもない。騒ぎを起こして、援軍を呼んだのだ。

「事情は知らんが。弟子の落とし前、つけさせてもらおう」

剣と盾の機械天使を連れた男装の麗人——〈迷宮の魔王〉デ・ラビリンスグリゼルダ・ウェストン男

爵の口上を、アリスは心から頼もしく思った。

2

グリゼルダが雷真らいしんから協力を要請されたのは、今朝方けさがたのことだった。

だが、『アリスの指示を仰ぐ』と言って出て行ったきり、弟子は戻ってこなかった。

それが今、ああして夜々ややの背中で死にかけている。

（ぬかったな、阿呆あほうが……！）

おそらく彼自身、まだ決戦のつもりではなかったのだろう。グリゼルダへの報告を省き、事前工作のつもりで動いて、思わぬ深手を負わされた。

アリスが大きく息をつき、グリゼルダに言った。

「助かったよ、魔王陛下。この際、貴女に薔薇を倒してもらうしかない」

「……つまり、あれが紫薔薇ということか。日本人だったのか」

凄まじい魔性を感じさせる、和装の女性。外見は還暦くらい。魔女が年齢通りの風貌をしているのは意外な気がした。あちらも興味深そうにこちらを見ている。

「へえ、あんたさんが、噂の魔王さん……」

「私は極東の事情など知らん。貴様に対する恨みもない。だが、弟子をこんなにされて、笑って許せるお人好しでもない。こいつには夜会もあったんだぞ？」

「正当防衛です。無理やり連れ去られて、貞操の危機でした」

「たわ言を。この師にも反応せぬ男が、貴様のような大年増に発情するか」

「わてやのおて孫娘やねんけど……まあええか」

「な——それこそたわ言だ！ その娘は！」

綺羅の背後、人形のように立ち尽くす日輪を示す。

「バカ弟子と死線を超えた戦友だ！ 彼女がこんな重傷を負わせるなど——！」

「残念だけど、事実だよ」

アリスが肯定し、夜々に視線をやる。夜々も切なげにうなずいた。同じく日本人の六連も、いろいろも、日輪自身も、誰も否定しない。

「……ますます事情がわからなくなったが、どのみち私は愚かな弟子を信じている。弟子を傷つけたからには、貴様たちは私の敵だ。まして薔薇ならば……な！」

最後の一言は、綺羅の背後で言った。

相手には転移のように見えただろう。完全統制振動を駆使すれば、相手の認識を狂わせ、予測の裏をかくことが可能だ。平凡な魔術師なら首を飛ばされるところだが、綺羅は危険を察知し、前もって鬼を奔らせていた。

大鬼が刃を受ける。ディガンマに耐えたばかりか、反撃の鉄拳を打ち込んできた。

とつさに魔力の糸を放ち、鬼の腱を乱す。鉄拳が狙いを外し、真横を吹き抜けた。音速を超えた振りが衝撃波を生み、ずばんと凄まじい音を立てる。

空中で翻弄される。態勢を立て直したときには、周囲を黒い蜂に囲まれていた。

一匹が犬ほどもあり、短剣大の針を繰り出してくる。右へ左へ剣でさばきながら、距離を離す。その一瞬の攻防で、互いが互いの力を悟った。

「ほう……大した業前や。けど、あんたさん、何年魔術を使ってます？」

「魔力は年季がものを言う。それは事実だが、実戦は勝敗がすべてだぞ」

「ご立派な考え方です。それでも、わては六十年」

グリゼルダの四倍近い年季だ。素質で言っても、あちらの方が上に思える。だが、それでも、怯んだ姿はさらさない。グリゼルダは軽口で応えた。

「見た目より若いじゃないか。老け顔の魔女は初めてだ」

「面と向かって……無邪気なお人やなア！」

無礼者と怒鳴る代わりに、綺羅は愛想良く笑った。グリゼルダも笑って、

「私は一六年。だが、その一六年は常に実戦の中にあつた。戦いの年季なら——」

負けてはいない！

殺気もなく、斬撃が飛ぶ。戦いを日常とし、『無心のまま相手を殺せる』からこそできた攻撃。殺気がなければ事前の察知が難しく、反射では武人のグリゼルダに勝てるはずもない。日輪は完全に無反応、綺羅も反応したようには見えなかった。

だが、綺羅の代わりに、止めた者がいた。おそらくはグリゼルダと同じく、実戦の中に身を置き続けた者が、軍刀で綺羅を護っている。

女と見紛うばかりの優男——雷真の剣の師、雲雀だ。

「ウンジャク……貴様、どういうつもりだ！」

「や、こういう構図にされてしまうと、私はこちらにつくしかないわけでは……」

とぼけた口調が緊張感を殺ぐ。だが、冗談を言っているわけではない。

「先刻、バカ弟子に『わかった』と言っただろう！」

「あれは『状況を理解した』という意味で……これが宮仕えのつらいところでして、土門さまをお護りするよう、軍の命令を受けています」

「ふらっとどこかへ消えたと思ったら、軍に問い合わせていたのか……！」

グリゼルダはため息をついた。理解を示したのではなく、より一層、激怒した。

「貴様はバカ弟子の親代わりと言ったぞ!? 子どもをそんなにされて——そもそも貴様は生粋の軍人ではないのだろう! こんなときくらい裏切ったらどうだ!」

「そういうわけにもいかないですよ……!」

初めて、雲雀の顔に苦渋がにじんだ。だが、グリゼルダは収まらない。

「貴様には相通じるものも感じていた……同じ立場と思ったものを……!」
深呼吸をひとつ。怒りを鎮め、戦いのための本能を研ぎ澄ます。

「……ディガンマ、先に謝っておく。こいつが相手では、無傷では済まん!」

「おかまいなく。雪辱を晴らす好機ですわ!」

「ステイグマ。おまえは昨日の要領で、バカ弟子を頼む!」

「心得ましてございます。——お姉さま、マスター、どうかご無事で!」

「よし、行け!」

自らは裂帛れつぱくの気合とともに雲雀に突っ込む。直後、そこは刃の暴風圏となった。

剣と剣とが激突し、そのたびに衝撃波が飛ぶ。式神が巻き込まれ、次々に消滅していく。両者の応酬が激しすぎ、綺羅きらでさえ手出しできない。

激しいチャンバラのどさくさにまぎれ、グリゼルダは巧みに位置を入れ替え、アリス

と綺羅のあいだに陣取った。

少女たちを背中で護る。スティグマが盾に変形し、担架代わりとなった。夜々が雷真を乗せ、いろりとアリスを担ぎ上げて、逃げる準備が整う。

「あー、土門さま、どうぞ追ってください。魔王は雲雀がお相手します」
ワイズマン わたし

「へえ、助かります。あんたさんの働き、ちゃんんと少将さんに言うときますえ」
綺羅の草履から黒い翼が生え、体を浮かせる。グリゼルダはさせじと斬りかかったが、雲雀が即座に割り込み、刃を合わせて妨害した。魔王もまた一人の人間、手練れの魔女と怪物剣士を一度に倒すのは不可能だ。

綺羅が少女たちに追いつき、鬼をけしかける。夜々はいろりとアリスを抱えていて、手が使えない。これまでかと思われたとき、不意に大気が波打った。

鬼が棒立ちになり、周囲の式神が紙切れに戻る。

潮が退くように瘴気が晴れる。六連が大喜びで手を叩いた。

「時間差で結界発動や！ 天才か僕！」

「莫ポンクラだろ！ もっと早く起動していれば……！」

「うわあ……アリスはん、きつついわあ……」

「くっ……縛りよる……！」

綺羅が印を結ぶ。そうしなければ鬼を維持できないほど、強烈な負荷がかかっている

らしい。アリスたちは一目散に逃げ出した。

「……お祖母さま。一度、結界の外に退避しましょう」

凜とした声で、日輪が祖母に進言した。

「ほかの薔薇に見つかる厄介です。警備の方々もこちらに向かっています。無理をせずとも、六角法陣結界は簡単に壊せますし」

「……業腹やねんけど、しゃあないな。ねずみは一門のもんになんに任してもええしな」

綺羅がきびすを返す。それを見て、雲雀も攻め手をゆるめた。

「ありや、撤退ですか。それじゃ、私も——」

「待たんか馬鹿者！　せめて言い訳して行け！」

罅迫り合いに持ち込み、至近距離から怒鳴る。雲雀は露骨に逃げたような顔をしたが、グリゼルダはそれを許さず、おし殺した声で訊いた。

「もう言ってしまう！　貴様は一体、何者なのだ！」

「……職業でしたら、剣術師範ですが」

「そうではない！　と言うか——それは、嘘なのだろう？」

一瞬、間があいた。雲雀はすぐに、とぼけた顔を取り繕う。

「私は嘘を言わない男ですよ。実際、私の道場に雷真はいたんです」

「だとしても、それは真実ではない」

「……何をおっしゃっているのか、わかりかねますね」

「こうして敵に回るなら、なぜあいつを育てた？」

始終笑っているような、雲雀の口元から笑みが消えた。

すぐにいつもの調子を取り戻し、冗談とも本気ともつかないことを言う。

「約束だから、ですかね」

「約束？　誰と？」

「古い友人ですよ。今日の件、雷真には上手いこと言っておいてください」

「ふざけるな！　自分で言え！」

含めた意味を、雲雀は理解しただろうか？

彼はいつも通り飄々^{ひょうひょう}と、綺羅を追って走り去って行った。

3

ただでさえ重苦しい地下の空気が、巨岩でフタをされたように重い。

大空洞に続く地下通路。かつて根城にしていた場所で、アリスは唇を囁^かんでいた。得意のボーカーフェイスも維持できず、怒りと後悔で泣き出しそうになっている。

「何てぞまだ、まったく！ アリス・ラザフォードともあるう者が……！」

綺羅が後退した隙に、死に物狂いで逃げた。グリゼルダがどうなったのか確認している余裕もなかった。逆探知が怖いので、イオネラの方にも連絡できない。

自責の念が尽きない。目の前では瀕死の雷真が横になっている。綺羅を欺くための芝居か何かであってくれ、という淡い期待は裏切られ、日輪がつけた傷は深かった。大動脈を潜り抜けるように刃が抜けたため、きわどく即死を免れている。

「雷真、しっかり！ 気を強く持ってください！」

夜々が主の手を握り、励ましている。だが、意識が戻る様子はない。いろいろもほとんど身動きできず、朦朧としていた。

姉が半壊、妹は消息不明、あげく使い手が瀕死。夜々はひどい不安にさらされている。それでも、よく我慢していた。以前の彼女なら半狂乱になっている。

「すみません、雷真……夜々がついていたのに……！」

それはアリスが詫びるべきことだった。だが、言い訳したい気持ちもある。

（プリンセスがライシンを刺すなんて……思わないじゃないか……！）

ひよっとしたら、日輪自身、思っていなかったかもしれない。

アリスはいくぶん冷静になり、思考を回し始めた。

「とにかく、縫合だけでも済ませたい。動かすのが無理なら、医者連れてくる方がい

いな。手術の設備はないけれど……」

「それなら、夜々が連れてきます！」

「待つんだ。今、ムツラが地上の様子を探ってる。こういうとき、イザナギの連中は便利だね。索敵範囲が広く、敵に気取られにくい」

気取られたらおしまいだ。こちらの戦力は壊滅している。

だが、六連が上手く立ち回り、オルガまで連絡がつけば、勝ちの目は残る。

（我ながら、ひどいギャブルだね……）

クリアしなければならぬ条件が多い。アリスが頼みに思う〈切り札〉が連絡通り海を渡っていて、それが評判通りの実力で、さらに輸送が間に合えば、という話。

夜々は雷真の手を握りながら、悲しげにつぶやいた。

「小紫こむらさきがいてくれたら、地上に連絡できたかもしれないのに……」

「どうかな。だけど、心配しないで。花の乙女には、うちの無能執事がついていた。シンが何とかしたさ。あるいは、魔王陛下がね」

言いながら、グリゼルダのことを思う。それから、あの剣士のことを。

（彼も謎だね。敵なのか味方なのか、はっきりしない。今日はイザナギの側についたつてわけだ。察するに現状、イザナギと日本軍は連携してる——いや）

現状、と言っているのか？ 日本軍はもしかしたら、ずっと——

「あ……硝子！ 硝子はどうでしょう!？」

すつとんきような夜々の声で、現実に取り戻された。夜々は興奮気味に、

「精瑠は人体にも使えるんです！ 昔、それで雷真の命を助けて！ だから！」

「落ち着いて。ミス・カリューサイの身柄は協会の管理下だ。彼女を連れてくるにしても、こっちから出向くにしても、ずいぶん時間がかかってしまう」

それはおそらく、致命的な時間のロスとなる。

「出向くとすれば、この状態の彼を動かさなくちゃならない。盾の人形が運んでくれるとしても、外は寒い。血が足りてないんだから、体力を急激に奪われるよ」

「それなら……そうです転移魔術で！ 日輪さんなら——」

そこで夜々は勢いを失い、黙り込んだ。

夜々にとって一番の恋敵は日輪だ。何かと張り合っていたが、そのぶん認め合っているようでもあった。夜々が受けた衝撃は、アリスより大きいかもしれない。

アリスも思い知らされた気分だった。どれだけ日輪の『便利な』術に頼っていたか。

日輪と組めば、アリスの計略は面白いように機能した。機巧師団一万二千をたった十数人でもてあそぶことさえたのだ。

「どうしちゃったんですか……日輪さん……っ」

しよげ返る夜々が気になって、アリスはそつと言った。

「精溜のことを教えてよ。かつて彼の治療に使って、経過はどうだったの？ 何日で歩けるようになったか、って意味だけど」

「あのときは確か——一週間……くらい」

途中で顔色を失くす^な。それは、あまりに絶望的な日数だった。

「ど、どうでしょう……それじゃ、今助かって、魔王になれません……！」
ワイズマン

「バカなこと言うなよ。夜会なんて棄権するしかないだろう。敵討ち^{かたき}なら、夜会終了後もうやりようはある。命をつなぐ方が大事だよ」

「そう……ですね……」

「敵討ちうんぬんの前に、まずは起きられるようにしてもらおう。腰がきかないんじや、夫婦生活に支障をきたすからね」

「どういう意味ですかっ」

夜々が突っ込んだ瞬間、ずらず、と石組みの天井が揺れた。

夜々の嫉妬が引き起こした地震……ではない。途方もない規模の魔力が、地上の方から伝わってくる。ステイグマが装甲を鳴らして立ち上がり、警戒態勢になった。

『聴覚センサーに感あり。何か、大量に——きます！』

宣言通り、ざああああつと音を立て、通路から黒い霧が吹き込んできた。

質感はみぞれのよう。小さな粒が無数により集まり、霧のようになっていく。

「何だ、これは？ 黒い……ダイヤモンドダスト？」

「アリスさん、あれ！ 通路の床を見てください！」

夜々が霧の流れてきた方を示す。巣穴から逃げ出したのか、地上から逃げ込んできたのかはわからないが、大量の鼠ねずみが死骸となって転がっていた。

「化学兵器だ！ 吸うな！」

とつさに魔防の壁で通路を塞ぎ、ホールへの流入を防ぐ。だが、扉があるわけではない。気密を保ち続けるのは無理がある。

「……もつと奥に逃げよう。地下空洞は広い、毒も多少は拡散するはずだ」

『アリスさま、動体センサーにも感あり。地上で巨大な質量体うごめが蠢うごめいています。この粒状物質と関連がある……かと思いますが』

「質量だって？ 一体何が——えほっ」

喉が焼かれる。刺激臭が鼻を刺し、アリスの頭が激しく痛んだ。

「くそ、少し入ったな。このホールの空気も……汚染されて……」

痛みは見る間に激しくなっていく。金属の棒を眼窩がんかに差し込まれ、中身をかき混ぜられているような気がした。

（やはり毒か……こんな大規模な気体兵器、どこの国が実用化したんだ……!?）

だれ誰が、どこから、何のためにこんなものを持ち出したのか、わからない。

何もわからないまま、風景が引っくり返る。いや、アリス自身が床に倒れたのだ。夜々があわてて駆けてきて、揺さぶった。

「アリスさん！ もうアリスさんだけが頼りなんですよ！」

「わかつて……るさ……でも……これは……死……」

ろれつが回らない。肺の中で何かがうごめき、頭痛とは別の激痛が走った。ぶふつと血を吐く。視界が急速に閉じ、何も考えられなくなった。

4

グローリアがそろえた兵を見渡して、シャルはきゅつとこぶしを握った。

こちらはシャルをのぞく全員が拘束され、あちらは銀薔薇、アンリ、イージスⅡ三体に加え、伝説級五体、犬型自動人形が十体以上、兵士一五名の戦力がある。

ずいぶん久しぶりで、弱気になる。これをどうにか……できるのか？

グローリアは喜悦を隠さず、楽しげに言った。

「よい顔です。このグローリア、社交界では四つの形容で知られています。若く、麗しく、情熱的で、何より寛大であるとね。もう一度、そなたに機会を与えましょう。潔く負けを認め、わたくしの軍門にくだりなさい」

シャルは己の耳を疑った。見す見す反逆させておいて、まだそれを言うのか？

「降伏し、夜会に戻るのです。さすれば、愚行に目をつむってあげます」

実戦は死なない限り負けではない。生きてさえいれば、逆襲の可能性も残る。勝ち目がまったくないのなら、相手の勧告を受け入れ、捕虜になるのが正しい選択だ。

その考え方をよくよく理解して、シャルは言った。

「馬鹿ばかじゃない？ そんなのお断りよ」

GLRの兵たちも、伝説級レジェンズを連れた魔術師たちも、意外そうにシャルを見た。アンリが怒りをたぎらせたが、シャルは構わず、言いたいことを言う。

「貴女たち、同じ問答が大好きよね。似たようなこと、金薔薇ばらにも言われたわ。黒衣帝こくいていもライシンに言ってる。結社はお父さまにも言ったのよね？ 暴力で脅して、人質を取って、断れば痛めつけて。貴女たちって全然、学習しないの」

「学習しているのです。だから、より厳しく、逃げ場のない状況を作り出す」

「どうして同じ失敗を繰り返すのか——他人を言いなりにできると思ってるから？ いえ、貴女たちは相手を言いなりにする以外のやり方を知らないのよ！」

シャルはイオネラ、フレイ、ヘイゼルを順に見つめた。

そして、心に思い描く。ここにはいない、彼の姿を。

「支配なくても手を貸してくれる人がいること、一緒に苦しんでくれる人がいること

を、貴女たちは信じられないの。だって友達がいらないんだもの！」

グローリアは冷笑を浮かべた。対照的に、シグムントは感じ入ったように笑った。

「君が言うのと妙に説得力があるな」

「ほっといて！」

シャルは〈君臨せし暴虐〉と刺繍された、夜会参加者の手袋を外した。

「女王陛下に申し上げるわ。私は魔王になんて——ならない！」

天高く放り投げ、シグムントに狙い撃たせる。ほとぼりした減元素が手袋を包み込み、輝きの中に消し飛ばした。

かくしてシャルの手袋は、夜会の参加資格ごと、光となって消え失せた。

「これで私の参加資格はなくなった。力尽くで戦わせようだったって、無理な相談よね」

グローリアは深々と、失望のため息をついた。

「血迷ったことをしたの。……一体、何の真似です？」

「そうね。強いて言うなら——あいつの真似よ！」

無鉄砲な彼のように、シャルは魔女に挑みかかった。

膨大な減元素を蓄え、ラスターカノンを放つ——ことは、できなかった。減元素を生成できない。それどころか、シグムントの体が小さくなった。

意外な現象に直面し、決定的な隙が生じる。生じた隙をフォローしようと、エヴァが声を張り上げた。無力化されたふりをして、密かに力を蓄えていたらしい。居合わせた機械人形すべてに絶対王権の力がかかったはずだが、やはり効果は生じない。

見れば、敵の一体、羊の頭を持つ魔人が、うなり声をあげている。やがてエヴァは脱力し、今度こそ演技ではなく、意識を失った。

「暴竜！ 魔術を返されてる！」

ハイゼルが警告する。意味するところを理解して、シャルはぎよつとなった。

魔術を『返す』——現代の機巧物理学では再現できない現象だ。そのぶん有名なので、相手の正体がつさに知れる。

「あの魔人、アスモダイ……!？」

「勤勉ですね。左様、あれが〈冥界の王〉コードASです」

「くっ——風よ！」

魔術が駄目なら精霊術。シャルは渾身の魔力をしほり、アンリの支配に抗って、竜巻を呼び出そうとした。しかし、竜巻どころか、そよ風すら起こせない。

グロリアがシャルに平手をくれる。シャルは頭を揺さぶられ、目を回した。

三方向からイージスⅡの魔術がかかり、強固な魔防の壁に拘束される。

かくして、何もさせてもらえないまま、地にねじ伏せられた。

「実に、愚昧ぐまいよ。まるで学習しませんね」

言葉をそっくり返され、シャルは赤面した。

「これ以上、しつけの時間をかけさせぬよう——アンリエット、そなたにたずねましよう。わたくしが死ねと言え、そなたは死にますか？」

「もちろんです陛下。この命、とうに陛下に捧ささげております」

グローリアが微笑ほほえみ、アンリの首に手をかける。シャルはもがいたが、魔防の拘束は小揺るぎもしない。グローリアの指がアンリの首に食い込み、血流を止める。

「や、め、て……あぐっ！」

魔防が力を増し、シャルの喉から空気が逃げた。

グローリアは冷ややかにシャルを見下ろし、唾棄だきするように言った。

「無礼者。まずは赦ゆるしを請いなさい。泣いて、媚こびて、願うのです。いま一度のお慈悲を、私が愚かでした、この憐あわれな豚めをお赦しくださいとね」

アンリの首がめきつと鳴く。血行障害を起こし、顔は紫色になっている。

身内可愛かわいさに屈しない——かつて言ったその言葉が、空々しく耳みみに甦よみがえった。

シャルは一七年ぶんの誇りを捨て、懇願した。

「お赦し……ください……女王陛下……！」

「言葉が違いますね」

「どうかお慈悲を！ この憐れな豚めをお赦してください！」

グローリアがアンリの首から手を離す。アンリは尻餅を^つ尽き、激しく咳き込んだ。唾液を指でぬぐってやりながら、グローリアはいとおしげに言う。

「ああ、アンリエット、つらかったでしょう。わたくしを赦してください」

「もったいない……です……陛下……」

アンリの瞳は恍惚^{こうこう}として、むしろ悦^{よろこ}んでいるようにも見えた。胸を刺す痛みにも、シャルは唇を囁^{ささ}む。自分がみつともなく哀願したことより、アンリの態度の方がつらい。

グローリアはアンリを抱きしめ、見せつけるようにして言った。

「さあ、シャルロット。わたくしが言いたいことは、もうわかりますね？」

わかる。事ここに至って、グローリアの意図がわかった。策略で勝利、武力で圧倒し、どうしようもない現実を見せつけて、心を折ろうとしている。

シャルはまさしく断腸の想^{おも}いで、あえぎあえぎ言った。

「忠誠を……誓います……」

「家名にかけて？ そなたの祖母の名誉にかけて？」

「お祖母^{ばあ}さまの……イライザ・ブリューの名にかけて誓います！」

屈辱以上に、申し訳なさで涙が出た。祖母の名、父祖の名誉^{けい}を穢^{けが}してしまった。

グローリアは水晶玉を取り出し、シャルの発言を再生して見せた。

羞恥心で死にそうになる。まさか録られていようとは……。

拘束されたフレイ、イオネラが目を背ける。ヘイゼルですら、憎々しげにグローリアをにらんでいる。それでもまだ、グローリアは満足しなかった。

「では、次に——そうですね、犬の真似でもしてもらいましょうか」

「王妃よ、もうよせ」

見かねたように、シグムントが言った。

「なぜ執拗にシャルをなぶる。これでは反感を煽るだけだ。敵ばかりか、味方の反感もな。見るがいい。貴女の兵は、あきれているのではないか？」

GLRの学者たちは魔女に怖れを抱いているらしく、一斉に目を伏せた。伝説級を連れた魔術師は本来グローリアの兵ではないようで、皮肉げな——エドマンドがよくやるような目で、なりゆきを見物している。

だが、グローリアは開き直ったように胸を張った。

「小賢しい童よ。わたくしはブリューの者どもに辛酸を舐めさせられている。ゆえに溜飲を下げる必要があるのです。それでこそ、寛大な沙汰をくだせるというもの」

「者ども……？」

「ですが、これで最後にしてあげます。シャルロット、少女の一人を殺しなさい」

「!?」

「さすれば、わたくしはもう一度そなたを信じ、守り立ててあげましょう」

魔女の瞳は本気だった。本気でシャルの退路を断つつもりだ。仲間を殺せば、学院には戻れない。結社の庇護に^{ひご}すがる以外に、生きていく術^{すべ}がなくなる。

「さあ、誰^{だれ}を犠牲にするのです？ 犬娘ですか？ さほど親しくもないヘイゼル？ 天才エリアード教授は生かして欲しく思います——まあ殺してもよい。あるいは、わたくしの可愛^{かわい}いアンリエットを選びますか？」

耳元に自分の鼓動が聞こえた。たとえヘイゼルであっても、殺したくはない。アンリを救うため、命を懸けてくれた仲間だ。

動けずにいると、魔女はせせら笑うように言った。

「愚図な娘よ。ならばアンリエット、そなたが選んであげなさい」

「でしたら、そちらの、胸の大きな少女がよろしいかと」

アンリはためらいもなく、フレイを指名した。

「D社の遺産としてはヘイゼルの方が上ですし、姉は時々、憎らしげに彼女を見ます」

シャルはもう、言葉もなかった。

アンリは本当に壊れてしまった。これではまるで出来の悪い人工知能。人間の心を持ち合わせていない。大切にしていた友達^{フレンド}を、そんなふうに……。

魔防で背を押され、シャルはフレイの前に転がされた。

目が合ったフレイは――微笑^{ほほえ}んでいた。

「いいよ、シャル」

「――」

「私、一度、死んでるから」

シャルはゆらりと立ち上がり、己のブラウスを引き裂いた。

「……言ったわよね。非道をお命じになれば、私は裏切るって」

^{こうぜん}昂然と顔を上げる。心臓のある位置をグローリアにさらし、シャルは怒鳴った。

「私が殺すのは私自身よ！ 私^{わたし}は友と、家族と、誇りに^{じゆん}殉じる！」

「……そなたの母の命運も、薔薇^{ばら}の師団が握っているのですよ？」

「おあいにく！ 友達を殺したら、お母さまは一生私をお赦^{ゆる}しにならないわ。母は貴族の出じゃないけれど、貴女^{あなた}よりよほど高潔な人なの！」

^{せつな}刹那、グローリアを中心に、爆発が生じた。

あふれた魔力だけでなぎ倒される。シャルだけでなく、敵兵も弾^{はじ}き飛ばされた。

荒れ狂う魔力の嵐。どす黒い魔性が噴^ふき上がり、周囲を黒く染めていく。



「ああ……つくづく……度し難い！」

常に高貴ぶっていた魔女が、怒りに我を忘れている。その鬼の形相を見て、シグムントがゆっくり首を上下させた。

「そうか……そういうことだったのか……積年の疑問が……腑に落ちた」

「えっ、何？ どういうこと？」

「シャル、今のは失言だった。君は彼女の逆鱗げきりんに触れたぞ」

凄まじい殺意の中に、かすかな悲哀をにじませて、グローリアは言った。

「残念です。そなたたち姉妹に与えた言葉には、一片の真実もあったのに……」

殺意はそのまま、グローリアは抑揚の消えた声で、GLR兵にたずねた。

「あれの受け渡しは済んでいるのか」

「は、はい。マニュアルもアンリエット・プリューが受領済みです」

グローリアはうなずき、悲しげにも見える瞳をアンリに向けた。

「アンリエット。そなたはわたくしに忠誠を見せてくれますね？」

「無論です。私は愚かな姉とは違います」

「姉を殺せと言っても、できますか？」

「その程度、造作もないことです」

「よい子です。では、披露しておあげなさい。そなたに授けた力を」

「御名にかけて。女王陛下、万歳！」

アンリが空間を縦に裂き、転移で何かを呼び寄せた。黒い霧——いや、何かもつと粒子の粗い、砂礫されきのようなものだ。敵が一斉に退く。GLR兵があわててマスクを装着するのを見て、シグムントが重々しく口を開いた。

「まさか、とは思ったが。あれが……王妃の手元にあつたのか……！」

「知ってるの？ あれは何？ 羽虫みたいにちっちゃいのが、霧になって……」

「羽虫とは、言い得て妙だな……」

乾いた笑いを漏らす。シャルは焦じれた。

「何だって言うのよ！ 自動人形オートマトン!?」

「あれを自動人形と言うのなら、あれは歴史上、唯一『繁殖』する自動人形だ。機巧生命体（リヴァイアサン）——遠き神話の、怪物だよ」

ガラム犬がしきりに鳴いて、フレイを逃がそうとする。彼らがなぜそんなに必死なのか、ほどなくほかの少女たちも理解した。

最初に小型犬が、次に大型犬が、そして少女たち本人が、立てなくなった。

強烈な刺激臭と、甘い芳香。脳髓を駆け抜ける痛みで、毒であることはすぐわかる。

ざあああつと砂嵐のような音がして、少女たちの体を黒い霧のみ込む。

霧は学院の空を覆い尽くし、機巧都市全域に広がろうとしていた。

Chapter 6 テウス・エクス・マキナ

1

アリスが血を吐くのを、夜々は突き落とされるような思いで見た。

魔防の壁が破れ、ホールに霧が流れ込んでくる。きらきらと光る漆黒の輝き。棘のよ
うな粉末が混じっていて、それがどうやら、アリスの気管を傷つけたようだ。

「姉さま起きて！ 何とかしてください！ 姉さま！」

凍結させれば……と思ったのだが、姉は起きてくれない。魔術師のアリスが気絶した
ので、ステイグマも休眠しかけている。ただし、機械の彼女が毒で死ぬこともないだろ
う。夜々はステイグマを置いて行くと決め、いりり、雷真、アリスを担ぎ上げた。

駆け出そうとしたところで、ぐにやりと空間がゆがむ。

船に酔ったような感覚にとらわれる。転移魔術に付随する現象だ。思った通り、夜々
は一瞬で空間を飛び超え、先ほどとは別の場所に立っていた。

墓所のように静かで、ほの暗い屋内。そこに、六体の乙女型自動人形がいた。

マグナスの〈戦隊〉！

肌が粟^{あわ}立つ。思わず体内に眠る力を呼び覚ましそうになった。

だが、それは相手が阻んでくれた。夜々の膝から力が抜け、動けなくなる。

見れば、玉虫が夜々の肩に手を置き、魔力奪取^{ドレイン}をかけている。

戦隊筆頭格の火垂^{はたる}が進み出て、聞こえよがしのため息をついた。

「愚かな人形です。状況を理解しなさい。おまえたちはマスターに救われた。感謝されることはあっても、敵意を向けられるいわれはない」

相手にその気があれば、夜々だけどこかへ放^{ほう}り出すこともできる。暴れるのは得策ではないと判断し、夜々は抵抗をやめ、ぼそりと訊^きいた。

「……ここ、マグナスさんの研究室ですか？」

「〈愚者の聖堂〉の一室だ」

奥の暗がりから、背の高い男子学生が歩いてくる。

銀の仮面がきらめく。その下から、紅^{あか}い瞳が冷たく夜々を見つめていた。

戦隊たちが目礼して迎える。マグナスは彼女たちには目もくれず、夜々に言った。

「おまえは軽症だな。荷物^{もの}を並べろ。すぐに処置する」

「雷真を治してくれるんですか？　なぜ!?」

背中から降ろせと言われたのに、夜々はむしろ雷真の体をしっかりとつかんだ。

「マグナスさんは雷真の敵です！ 仇です！ 貴方に雷真を任せるなんて……！」

「成分のわからぬものを解毒はできない。傷口だけでも塞がねば、確実に死ぬぞ」

夜々は唇を噛み、言われた通り、雷真を降ろした。戦隊が簡易ベッドを手早く設置

し、処置の準備を手伝ってくれる。

「……あの、助けてくださったことは……ありがとうございました」

無視されるかと思ったが、マグナスはそうせず、感情の消えた声で言った。

「学院長の命だ。『娘のついでに、学生も可能な限り面倒を見てくれ』と」

アリスの口を開けさせ、目視で確認した後、指を当てて魔力を流し込む。内部を探っ

ているらしい。診断はどうだったのか、マグナスは戦隊に指示を出した。

「輸液を。P一対L二で計四百。心拍が昂進するようならP液を止めろ」

「あの、雷真は!? 雷真はどうですか? 手当てしてくれるんですよね!?」

「内科に関しては同じ処置をする。外傷の処置するのは俺ではない」

「え……じゃあ、誰が……?」

「余計な心配をするな。専門家を呼びに行かせる」

鎌切に合図を送る。鎌切はうなずき、即座に転移した。

うつむく夜々を紅い瞳で見、マグナスは重々しく口を開いた。

「ついでに忠告しよう。死にたくなければ、夜会に出るな」

「雷真は出ます！ 絶対に！」

「使い手ではない。おまえに言った」

鼻白む夜々に、マグナスは楔を打ち込むように告げる。

「終わりがけだ、おまえは」

ずん、とその言葉が心臓に響いた。

「貴方に……夜々の何がわかるって言うんですか！」

「黙れ木偶人形！ マスターの温情を！」

火垂が割り込んでくるのを、マグナスは手で制する。

「把握した上での発言だ。おまえの状態も、雪月花の限界も」

「そ、そんなのでまかせです！ 花柳斎人形のこととは硝子しかわかりません！」

「わかるとも。第一に、俺はおまえの体を看ている。魔術回路を埋めたときにな」

自分でもわかるくらい、血の気が引いた。

夜々に金剛力を埋め込んでくれたのは、イオネラではなく、マグナス……！

埋め込みは極めて短時間だったはず。だが、縫合には時間をかけることもできた。構

造を確認されたのは間違いない。それがどんな不利をもたらすか、考えたら気が遠くなつた。あちらは人形師としても超一流——体内に何か仕込まれた可能性すらある。

泣きそうになるのをこらえ、夜々は考える。不利を背負ったのは仕方がない。それ以上で有利となるような、何かを得よう。今の夜々にできることと言えば……。

（そうです、朝、雷真が言つてたこと！）

彼が知りがつていたことのも一端でもつかめたら、きっと役に立てる。

「……今、『第一に』って言いましたよね？ 第二の理由は何ですか？」

夜々の目が戦隊に向く。スコードロン。いろりが妹のように思っている火垂を含め、全員が禁忌人形であり、撫子の部品を体内に宿している。

彼女たちの存在が、ふと疑問に思えた。

戦隊と雪月花は、どこか似ている。精瑠と同等の有機素材をふんだんに使い、どちらも人間の少女と変わらない外見を持つ。これは本当に、偶然の一致か？

「戦隊は、どうして六体なんですか？ どうしてそんな、可愛い女の子の姿で……貴方はどうやってそれを造つて……何のために!?」

一度疑問に思うと、止まらなくなつた。

硝子は戦術上の必要性から、また『姉妹が助け合えるように』と、雪、月、花の三種を用意した。戦隊はなぜ倍の六体なのだろう？ マグナスの能力を考えれば、三体でも

十分に思えたし、逆に一ダース連れ歩いていてもおかしくない。

硝子は独自の美意識から、また己の「娘」として、少女の外見を与えた。では、戦隊はなぜ少女の姿をしている？ この男ならむしろ、実用性一辺倒の無機質な外見を与えそうなものだ。現に、戦隊の言動はまるで少女らしくない。

「赤羽一門が滅亡した、あの夜……本当は、何があったんですか？」
あかばね

そのことを今初めて、夜々も疑問に思った。

「あの夜……当主〈赤羽空観〉をはじめ、四十人を超す赤羽姓の傀儡師が惨殺されました。犯人は〈赤羽天全〉——貴方の仕業とされ、軍は貴方を追っていた……」
てんぜん

思えば、そこからして、おかしい。なぜ、日本軍が追う？

マシンドリル
神性機巧に到達し得る唯一の存在だから？ いや、教父の〈予見〉は天全を名指しし

ているわけではない。天全が追われていたのには、もっと別の理由があるはず。

「あの夜あったとされることは、本当に、本当のことなんですか？」

マグナスはさして興味もなさそうに、平然と応えた。

「おまえの言ったことに嘘はない。真実、その通りだ」
うそ

「雷真は、貴方が撫子さんを解体したって！」
らいしん

「それも、事実だ」

言い切る。いささかの躊躇^{ちゆうちゆう}も、良心の呵責^{かしやく}も感じさせない声で。

紅の瞳^{こころ}が夜々をとらえる。深淵^{しんえん}をのぞき込んだような気がして、足がすくんだ。

「……貴方は今日、雷真を助けてくれました。夜々の魔術回路も直してくれて……」
 だと、ずっと雷真を監視して……全部、学院長の命令なのかとも思いましたけど」

「そうだ。それだけの話」

「それは嘘です！ 雷真の紅翼陣^{こうよくじん}に興味を持ってるって、火垂が言っていました！」

火垂の肩がびくつとはねる。マグナスは嘆息し、とがめるように言った。

「……口をすべらせたな、火垂」

「も、申し訳ありません！」

あわてて畏まる^{かしこ}。姉妹たちが失笑を漏らし、火垂ににらまれ、それぞれに視線をそらした。思いがけず人間味のあるやり取りに、夜々^{やや}はきよんとする。

マグナスは彼女たちを叱らず、居直ったように言った。

「紅翼陣^{こうよくじん}の練度には興味がある。それがどうした？」

「ひょっとして……雷真^{らいしん}を利用するつもりじゃ……？」

それはどうやら、正鵠^{せいこく}を射貫^{いぬ}いたようだ。マグナスの沈黙が先ほどより重い。答えまいとする意志を感じる。夜々は確信を得て、勢い込んで迫った。

「雷真に何をさせようって言うんですか？　それは——そうですね！　紅翼陣がないとできないことなんですよね!?　黙ってないで答えてください！」

「……まるで話にならない。それを語る必要が、俺おれにあるか？」

「それは、ありませんけど……叩たたきのめしてでも、聞き出します」

「そんなことは不可能です」

火垂はたるが前に出て、一触即発の空気が高まる。両者が激突する前に、寒風が吹いた。

「やめよ……二人とも……！」

いろりが身を起こし、這はいつくばるような姿勢でこちらを見ていた。

着物に血がにじんでいる。その痛々しい姿に、両者の昂たかぶりが急激に冷える。

「控えよ、夜々……主あるじを欠いて、勝てる相手か……」

ぐうの音も出ない。いろりはマグナスに向き直り、折り目正しく礼を言った。

「雷真殿と……夜々をお救いくださったこと……礼を申します」

「……礼など無用。月の人形が言った通り、俺も俺の目的のため、手段を選ばず行動した。その結果に過ぎない」

「それでも……ありがとうございます」

マグナスはもう返事をしなかった。無言で部屋を出て行こうとする。もう戻ってこないつもりだと察して、夜々は急いで言った。

「戦いますよ、夜々は。雷真と、姉さまと、小紫と一緒に、貴方を討ちます！」

そのために、英国まで来た。

礼装の背中に叩きつけるように、力強く宣言する。

「貴方が利用しようとしても、雷真は絶対、言いなりにはなりませんから！」

「……いや、なる」

マグナスが仮面に手を伸ばす。次の瞬間、夜々の口から「あっ」と声が出た。

あまりにあっけなく、マグナスが仮面を外す。

仮面の下にあったのは、写真資料で見たのと同じ、赤羽天全の顔だった。

……わかっていた。彼自身、何度か認めるようなことを言っていた。だが、こうして

目の当たりにしてみると、やはり驚きを禁じ得ない。

マグナス——否、赤羽天全は、素顔をさらして。断言した。

「愚弟は必ず、俺の思い通りに動く」

「……当人の意志とは無関係にっ？」

「抗う術はない。それどころか、道理を蹴散らし、押し通そうとするだろう。そうして

俺の思い描いた通りに、この世に《神》が顕現する」

謎かけのような言葉。重大な秘密を隠しているように思える。仮面を外してなお、彼

の真意は素顔という仮面の下にあった。

「……看護は要らん。動ける者がすればいい」

天全てんぜんの意図を汲くみ取り、五体の戦隊スコードロンが下がる。そして、彼らは部屋を出て行った。

2

夜々ややといろりが呆然ぼうぜんと天全を見送る。白昼夢でも見たような気分なのだろう。

アリスの喉から笑いが漏れ、拍子に氣道が痛み、咳が出た。

「えはっ……あの鉄仮面から、よくあれだけ聞き出せたね……。大したもんだよ」

「アリスさんっ、意識が戻ったんですか！」

「戻ったと……言えるのかな？　ともあれ、謎の男も段々……正体が見えてきたね。も

う隠す必要もないってことか……。どのみち明日には……趨勢すうせいが決まる……」

「あの。天全さんが言ってた『医者』って、パーシヴァル先生でしょうか？」

「それはきつと、私のことね」

部屋の外で声がする。夜々が飛び上がり、駆け出して行った。

ちょうど、鎌切かまきりの転移で硝子しろうこが到着したところだった。札を言う暇もなく、鎌切は消えてしまう。後には硝子だけが残され、場所を確かめるように周囲を見回した。

アリスはあきれた。協会から連れ去ってきたのか……。

「硝子っ、硝子っ、雷真らいしんがっ、雷真が……っ！」

「聞いているわ。お互いの近況報告は後にしましょう。先に坊やを診ないとね」

泣き出す夜々の背を押して、部屋に入ってくる。硝子はアリスに軽く微笑ほほえみかけ、それからいろいろを見て、茶化ちやかすように言った。

「まあ珍しい。おまえがほろほろにされるなんて」

「ええ……先日、主あるじにやられて以来です」

「……そのことなら、何度も謝ったじゃないの」

「そうでしたね……ご無事で……何よりです」

いろいろの口元にも笑みが浮かぶ。硝子の登場は姉妹の心を軽くしてくれたようだ。

硝子は雷真の前に膝をつき、眼帯のダイヤルを回して、体内を透視した。

「これで……よく死なずに済んだわね。あんなに無茶むちやをしないで言ったのに……！」

悲しげに夜々を見る。責められたと思ったのか、夜々はうつむいてしまった。

「とにかく、やりましょう。一日で二度もお医者まねじの真似事をやらされるとは思わなかったわ。人形師を廃業しても、お医者で食べていけるんじゃないかしら？」

軽口たかを叩く。夜々は涙をぬぐいながら、母親にすぎるように訊いた。

「雷真は……助かりますか？」

「わからないわ。だけど、キンバリー先生は助かったわよ」

「……信じます！ 硝子しやうこをー」

「部屋の外で待っていらっしやい。いろり、お湯と氷の準備」

処置が始まるようだ。アリスは少し迷ったが、開腹の際に雑菌まみれの第三者がいるのは危険だし、どのみちここでくすぶっているつもりもなかったので、点滴のパウチを念動で浮かし、高く掲げて部屋を出た。

夜々ややが気付いて、寄ってくる。

「アリスさん！ 地上に戻るつもりですか？」

「そのつもりだよ。この状況は僕の責任ぼくだし。しくじりは手柄で埋め合わせる——極東のプリンセスが口癖みたいに言ってた言葉さ。君もさつき、そう思ったろ？」

「でも……シンがいなくて、大丈夫ですか？」

アリスを心配している。アリスはくすぐたくなつて、からかうように言った。

「僕なんて大丈夫じゃない方がいいよ。君のご主人さまとくつついちゃうから」

「なっ——それは無理です！ 絶対！」

「無理と言われるとやりたくなるね。大丈夫、闇雲に突っ込む趣味はない」

水晶玉を取り出し、地上の様子を映して見る。軽い偵察のつもりだったのだが、そこ

で展開されている光景に、二人は言葉を失った。

地上はもう、先ほどの黒い霧に沈んでいた。

もうもうと立ち込める煙の中、時折り見える大地には、野鳥や鼠、栗鼠の死骸が転がっている。学院には生物の気配がない。さながらゴーストタウンの様相だ。

「……なるほど、これは利口だね。学院全体を毒ガスで覆ってしまえば、超一流の魔術師だって逃げるしかない。やったのは紫薔薇か、銀薔薇か」

「これが薔薇の仕業なら、犯人はどうしてるんでしょう？」

「使い手を護る手段があるんだろうさ。浄化薬とか、マスクとか。結界もいいな。たとえば〈断絶結界〉——そこか！」

あれは空気の出入りも遮断する。毒を学院に使っても、市街は護れる。

（あるいはその逆……。学院から外を攻撃しても、自分たちは助かる……）

いずれにしても、グローリアはきちんと先の先を見据えて手を打っていた。この目論見に気付かなかった時点で、こちらはもう出遅れていたのだ。

「なるほどね。なら、どうやら、銀薔薇の仕業らしいな」

「でも、断絶結界は機能してないように見えます」

「昨日の戦闘で壊れたからね。つまり、ほかにも耐える手段があるんだろう。銀薔薇をふん縛って、訊き出すなり奪うなりできれば、僕らも助かる」

アリスは目を閉じ、思考に集中した。

果たして、ここから逆転する手は、あるか？

(……ある。あるはずだ。だけど)

日輪ひのわと綺羅きらまで手が回らない。そちらはどうしようもなくなった。

今はその二人を忘れ、とにかく生き残らなくてはならない。そのために銀薔薇はばらを討つ。持てる力のすべてを、対銀薔薇に集中させるのだ。

よほど思い詰めた顔をしていたのか、部屋の方から硝子しょうこが声をかけてきた。

「あまり気に病まないで。偉い人たちが何とかするでしょう」

大鍋で湯をわかし、器具を煮沸殺菌しながら、いたわるように言う。

「こうなる事態を予見していたようだから。あの人たちに任せなさい」

「予見……？ その口ぶりだと、魔術師協会ネックサールが動いているの？」

「そのはずよ。学院にも使者を出したはずだけど」

「それは都合がいい。パパのところに行つて、こっちの手札を確認しよう」

「——やはり、大人任せにはできない？」

「この一年、大人がアテになったためしがないからさ。僕らぼくもできることをするよ」
硝子は口をつぐんだ。彼女自身、思うところがあつたのだろう。

「まったくもって……アリスの……言う通りだ……」

予想していなかった声に、居合わせた全員が振り返る。

アリスは哑然^{あぜん}とした。処置前に自力で目覚めるとは、信じがたい生命力だ。

雷真^{らいしん}が上体を起こし、すぎるように硝子を見ていた。

「頼む、硝子さん……」

そして、言う。ひどく馬鹿^{ばか}げたことを。

「俺^{おれ}を戦えるようにしてくれ！」

3

ラザフォードは医学部、〈隔離病棟〉の地下にいた。

病棟の入口にはエアロックが設^{しつら}えられ、結界を用いるまでもなく、外気流入を防ぐことができる。院内感染を防ぐ仕組みが、皮肉にも外界の毒から護^{まも}つてくれていた。

水晶玉で外の様子を探りつつ、魔書レメゲトンのページを繰^くる。その背後には、金薔薇アストリッドを十年成長させたような、美貌の自動人形^{オートマトン}がいた。

「老いたのう、エド。手駒の性能も覚えていられぬとは」

「おまけに近頃は書を読むのにも骨が折れます」

「探しても無駄じゃぞ。あれを楽に止められる人形など、都合よく存在するものかよ」

「あれほどの敵ゆえに、専用の対抗魔術があるのではと思ったのですがね……」
 どうやら魔書の中に、事態を都合よく収束させられる人形はない。

「それよりも、わらわは懐かしいにおいが気になるの。近くに同じ〈レメゲトンの悪魔〉がきておる。ほれ、ぬしが毫碌して、若造にまんまと抜かれた者どもよ」

「それは——エドモンド王の護衛では？」

「さて。きやつくみの護衛なら、レヴィヤタンに与するかな？」

アスタロトの金の瞳がきらめく。ラザフォードは魔書を閉じ、考え込んだ。

「……意外ですな。黒衣帝陛下こくいていがあれらを銀薔薇ぎばらに貸し与えるとは」

「あの狂犬は常識ではとらえきれぬ。ぬしがこの口うるさい婆あばあを呼び出しておるのも、きやつを恐れてのことじゃろう？」

「左様で」

「うつけめ。『婆あ』は否定せよ」

おう、とふくれる。すねられても厄介なので、ラザフォードはご機嫌を取った。

「かくもお美しく、聡明な女王イシュタル陛下のお側そばにあれば、我が身も安泰です」

「そうじゃろうとも」

「貴女あなたの腐毒で霧をすべて平らげることは、得策でしょうか？」

「愚策じゃな。この都市が腐毒に汚染されてもよいと申すなら、止めはせぬが。ふふ……人間は呼吸いきをせずには生きられぬからの。不便なものじゃ」

楽しげに笑う。直後、吸い込まれるように魔書に消えた。

ほどなく重厚な扉が開き、パーシヴァルと、黒ずくめの貴公子が入ってくる。

「エドモンド陛下をお連れしたぞ。それと、あれの標本を持ってきた」

「邪魔するぜ、学院長。ほう——これはなかなか機嫌な部屋だな？」

エドモンドが興味津々で室内を見て回る。滅菌装置やら空気清浄機やらをもの珍しげにいじりながら、王は気楽な調子で言った。

「さすがの俺おれもたまげたぜ。よもや継母はは上があんな怪物をお持ちだったとはな。ぜひとも手に入れたいもんだが」

パーシヴァルが手にした箱を見る。中に羽虫を模した極小オートマトンの自動人形が入っていた。

「その〈兵隊〉単独では繁殖できず、いくら集めても無意味……だな、教授？」

「……お詳しいですな」

お愛想あいそを言いながら、拡大鏡をセットして、エドモンドに見せてやる。

部品点数は百以上あるが、サイズは全体で五ミリもない。時計職人であっても、これを組み上げるのは不可能に思えた。そもそも、部品を生産する手段がない。

極小の機械虫。それが、リヴァイアサンの正体だ。

エドマンドは面白がるような目をして、口ぶりだけは気味悪そうに言った。

「ボディは毒の結晶体——手作業じゃとても造れない。内蔵する魔術回路（ノア）の本質は、ずばり『繁殖』。産めよ、増やせよ、地に満ちよってわけだ」

ふっ、と暗い笑みを頬ほおに刻む。

「マシンドール神性機巧は『人間の手で造られた人間』であり、〈完全なる玉〉のごとき無欠の存在でなければならぬ。その条件として魔術師連中が考えたのは『傷がつかない』無敵の硬さ——決して存在を脅かされない強靱きんじんさだ。さらに人間同様の『魔力を持つ』こと。そこにもうひとつ、何か別の条件をつけるとすれば」

「生殖、でしような」

「自己保存でもいい。生命の目的は種の保存——自己の永続化だ。どんなに優れた能力を持つていようが、増えないものは神性機巧マシンドールじゃない。継母はは上も一応、真面目に神性機巧を目指していたらしいな。あの方が玉座に収まれば、この国の未来は明るいぜ？」

ラザフォードは苦笑した。

「国に争乱をもたらした張本人が、他人事ひとごとのようにおっしゃいますな」

「で？ 貴方あなたも〈真円〉を用意してるのかい、学院長？」

不意打ちのような問い。無論、ラザフォードは黙して語らない。

緊張が高まる。それが弾けて破れる前に、パーシヴァルが言った。

「ラザフォード、今は一刻を争うぞ」

「——そうだったな。毒の組成は解析できたのかね？」

「コンバラトキシンか、その変成のようだ」

「コンバラ——つてのは、気体にできるものなのかい？」

エドマンドが横から言う。パーシヴァルは嫌な顔をするでもなく、淡々と応えた。

「水溶性です。溶かして噴霧^{ふんむ}してやればよい」

「〈滅び〉を引き起こした神話の猛毒が、それだと？ 解毒の手段は？」

^{エリクサー}

「薬はとても間に合わぬ。せめて抗ヒスタミンがあればとも思うが……全市に配布するのは数量的に現実的ではない。現状、避難を呼びかけるくらいしか打てる手はないが……パニックを引き起こしてしまうと、多数の犠牲者が出るでしょう」

「学院と市街の状況はどうだ？」

「学院周辺一キロ圏は汚染されました。医学部は学生三百名ほどを大講堂に収容したが、全学で四百名近くが取り残され……常人ならば、生存は絶望的ですな」

ラザフォードは天井を仰いだ。学院生は決して『常人』ではないが、それでもやはり、年若い学生に過ぎない。冷静な判断ができたかどうか……。

「おいおい、悠長に構えてる暇はないぜ。あっち——こっちと言うべきか——には

アストライア

神酒がある。リヴァイアサンの術者が飲めば、この虫を爆発的に増殖させられるんだ。きつと、この島国を飲み干すくらいになるぜ。マジで神話じみてきたな？」

自分の命も危ないと言うのに、エドモンドは楽しげだ。ただし、ふざけた態度とは裏腹に、読みは的確だった。

「化学物質なら、魔術防御も効果が薄い。市民の犠牲が拡大すれば、今度こそ夜会がつぶれる。黒薔薇と紫薔薇は腹を立てるだろうが、毒霧の中を散歩するご趣味はないだろう。つまり、婆さまたちも手詰まりだ。どうするね、学院長？」

「警備を含む職員は学院の防衛を放棄、魔術師協会と連携し、全力で市民の救護に回る。パシヴァル、その支援と治療、避難誘導を教授会に頼みたい」

エドモンドが拍子抜けしたような顔をした。

「意外なことを言い出したな。上の怪物を全力で消す、だと思ったが？」

「陛下のおっしゃる通り、市民を見殺しにしたとあっては夜会があやうい。これは政治的パフォーマンズというものです。なに、少しでも風当たりがやわらぐなら、そのどさくさにまぎれ、残り二日の日程はこなせる」

「だが、継母上をどうする？ 暴れさせていては、それこそ夜会に支障が出るぜ？」

「魔女殿の方は、やりたい者がやるでしょう——そうだな、アリス？」

そちらは振り向かず、入口に向かって声だけで問う。

廊下の向こう、エアロックの前で、娘が息を切らしていた。

死にかけに見える。パーシヴァルは腰を浮かしかけたが、ラザフォードは座したまま、体調を気遣う素振りもない。アリスもそんなことは望んでいないようで、父には答えず、エドモンドに挨拶した。

「これは黒衣帝陛下、ご歓談中に失礼を」

「いい。それより、学院長が言った意味を聞かせてくれ」

「かしこまりました。現状を打破する方法は二つしかありません。まず、リヴァイアサンを破壊すること」

「やれるか？ 過去のどの兵器より規模がでかい。陸上戦艦ダイダロスですら、あれに比べりゃミニチュアだ。学院長ご自慢のギユネスもな」

「体積はそうでしょう。しかし、見方を変えれば羽虫の群れに過ぎません」

「見方を変えりゃ数兆、数京——それでも足りない大群だぜ？」

「はい。ゆえに、あの数を統率するのは、魔術師個人には荷が重い」

「〈頭〉があるか？ 集合知——いや〈女王蟻〉かな？」

エドモンドの明察に、アリスは少し驚いた顔をした。

「僕もそう考えています。既にご覧になったかもしれませんが、あの形態、あの動きには全体の同期制御が必要です。とすれば、制御のための司令塔、群れの統率者がいる。

それが「リヴァイアサン」本体であり、ほかは遠隔操作の子機でしょう」

「ならば、親機を破壊すればいいわけか」

「アリス、おまえはそれが最善と思うかね？」

父に問われ、アリスはにやりと笑った。

「いいや？　女王を殺した途端、兵隊が怒り出さないとも限らないからね」

「では？」

「そこで第二の手段。女王蜂の支配権を奪う」

エドマンドは、ほう、という顔をした。

「ちよつと考えただけでも、学院にはそれをやつてのける人物が四人いる。イオ、

迷宮の魔王、マグナス、そして俺のライシンだ」

「はい。ですが、あの群れから親機を見つけ出すのが、そもそも至難です。猛毒が渦巻く中、えんえん虫を選び分けると、考えただけでもうんざりします」

「その手の見極め、直観にかけちゃ、『一九世紀最強』の右に出る奴はいないな？」

「教父がいらっしゃいますよ。ですが、パパや教父が上手いこと本体を特定できたとしても、蠢く群れの中では『おおよそ』の位置しかつかめません」

「継母上も妨害してくるだろうしな。となると、選り分けずにやれそうな（絶対王権が最適だが……リヴァイアサンは禁忌人形じゃないか？）」

「でしようね。一説には、聖女の卵子を内蔵しているとか」

「なら《絶対王権》は効果半減以下だ。あつちは神アシトライア酒をがぶ飲みしてくる」

「何度も見せていますしね。対策のひとつやふたつ、敵は用意しているでしょう。銀薔ぎんば薇が健在である限り、《絶対王権》は無効です」

「こりゃ、お手上げだな。学院長、ギユネスに消し飛ばしてもらうつてのはどうだ？」
ラザフォードはかぶりを振った。

「魔砲で粉碎すれば、広範囲に毒素をばら撒くことになります」

「……もうマグナスに丸投げするか？ 何とかするだろ？」

「万が一彼が死ねば、陛下の賭けも上手くいき、大変都合がよろしいでしょうな？」

「おいおい。俺おれはこの国のために思って言ってるんだぜ？」

白々しいことを言う。ラザフォードは可笑おかしくなって、肩を揺すった。

「あれは最後の護まもりです。いざというとき、彼はギユネスを制御できますからな」

「ふむ。とすりゃ、八方ふさがりに思えるんだが？」

「アリスが既に申した通り。銀薔薇が健在である限り、《絶対王権》は使えませんな」
含めた意味を理解し、エドマンドは笑い出した。

「話が振り出しに戻ったぜ。この毒霧の中、誰だれが継母上を倒すつて？」

「話が振り出しに戻りましたな。それは、やりたい者がやるのです」

ラザフォードはアリスと視線をかわし、小さく笑った。

「……誰のことだ？ 言っとくが、俺のライシンはちよいとやばい状態だぜ？」

「私も近頃、顔が広くなりましてね。陛下がよくご存知で、陛下のお考えに入っていない人物が、魔女を倒すでしょう。私は因縁を信じる者です」

エドマンドは視線を巡らせ、やがて思い至った様子で、つぶやいた。

「彼が戻った……のか？ 機巧都市に？」

ラザフォードは言葉では答えず、口髭を片方、意味ありげに持ち上げて見せた。

4

目覚めて真っ先に思ったのは、『どうやらまだ地獄ではない』ということだった。ゆっくりと起き上がる。そこは修繕された大講堂だった。

しだいに意識が鮮明になり、シャルの記憶が戻ってくる。

毒が回り、もう駄目だと思ったとき、熱線が霧をなぎ払った。ラストーカノンとは違う、収束した熱量——あの輝きは、ロキのジブリールが生み出すものだ。

鈍く残る頭痛にうめきつつ、あたりを見回す。

講堂は負傷者であふれ、野戦病院のようになっていた。忙しく立ち働いているのは医学部の学生たちで、避難してくる者が後を絶たず、明らかに医薬品が足りていない。

シャルの近くには、同じく救護を受けているフレイ、ヘイゼルがいる。

フレイが連れているガラム犬は六頭だけで、数が足りないのが気になった。フレイの横に仏頂面のロキ。そのかたわら、黒く汚れた機械人形ジブリアルが、剣の姿で立てかけられている。やはり、ロキが少女たちを救出してくれたようだ。

（とっておきのカードを、切っちゃったのね……）

グローリアを奇襲で倒し得る者が、最後の最後まで我慢していた。

その最強のカードを、少女たちの救援に使ってしまった。

惜しいと思う気持ちもあるが、おかげで皆が助かったのだから、文句は言えない。ただ自分が不甲斐なく思えて、シャルの気持ちは沈んだ。

学生たちの頭上を超えて、シグメントがすいっと飛んできた。

「気付いたか、シャル。ここは大講堂だ」

「そう……みたいね……」

「外は汚染されている。現在、結界で気密を保っているが、いつまでもつか……」

患者の搬入のたび、汚染は広がる。外気を遮断していれば、酸欠にもなる。

すべてが夢だったなら、どんなによかっただろう。周囲から聞こえてくる苦悶の^{くもん}声

に、シャルはつくづくそう思った。この惨状をもたらしたのは、アンリなのだ。

「エリアーデ先生が……いないわ。まさか……？」

「案ずるな。別室で毒素の解析に当たっている」

「……あの人、薬学は専門じゃないでしょう」

「本人いわく『万能の天才』だそうさ。……カラ元気だろうが、それもまたよし。彼女は立ち止まるのをやめたのだろう。己の研究が街を蹂躪した、あのときにな」

イオネラの天真爛漫な笑顔を思い出し、シャルはいたたまれなくなった。

アンリに使われた解放剤は、元を正せば無限連鎖反応に行きつく。イオネラは罪の意

識に苛まれているはずだ。アンリがもたらしたこの災禍が、自分の責任ではないかと。

「こんなことなら……アンリを撃っちゃえばよかった！」

悲痛な叫びが喉から漏れる。ホールに満ちていたざわめきが、一瞬やんだ。

シャルは誰に言うともなく、勝手に続けた。

「その気になれば、チャンスはあったわ。私にはシグメントがいたんだもの！ アンリをこの世から消滅させちゃえば、こんなことには……ならなくて……！」

申し訳なさで胸がつぶれそうさ。シャルは床にひれ伏し、学生たちに頭を下げた。

「ごめんなさい……！」

しん、と硬い沈黙が講堂に垂れ込めた。

「こんな日がくるかもしれないって、わかってた……プリューの血が結社を呼び込むかもしれないって……なのに私は……みんなを危険にさらすとわかって……アンリを学院に置いてもらって……護^{まも}つてもらって！」

しわぶきひとつ聞こえない。誰^{だれ}もが息を詰めて、シャルの言葉を聞いている。

「私たち姉妹がいなければ、こんなことにならなかった……だから——」

「黙って聞いてりゃ……甘ったれてんじゃねーわよ、ドグサレ女！」

その甲^{かん}高い声は、静寂の中によく響いた。

視線が声の主に集まる。童顔のネクロマンサー少女——黒薔薇^{ばら}の孫ドロシーが、講堂のステージに仁王立ちしていた。

「何なのアンタ！　そうやってぴーぴー泣けば、同情してもらええると思ってるの？」

「な、泣いてないわよ！　まだ！」

「誰もあんたたちを責めてないでしょーが！　ってゆーかねえ！」

ふんつ、と鼻であしらい、なぜか偉そうに胸をそらす。

「それ言い出したら、あたしはどうなるわけ？　アスラとかオルガお姉さまは？」

「そうだよ、シャル！」　「私たちだって立場ないよ！」

別の方向から声が上がる。双子のヴァイツゼッカー姉妹が、風紀の腕章をつけて救護班^{ナース}の手伝いをしていた。

「二人とも、無事だったのね……！」

「聞いたよー、シャル。また無茶むちゃしたんでしょ？」

「私たちに声かけてくれないなんて、ひどくない？」

「そーだよ！　一緒に銀薔薇と戦った仲なのに！」

口々に責め立てる。責められるほどに優しく、あたたく感じた。

そのうちに、ロキまでもが、説教するような口調で言った。

「シャルロット、おまえは根本的に勘違いしている。まったくもって勘違い女だ」

「なっ——どういう意味よ！」

「おまえたち姉妹が学院の厄介者だったのは、いつの話だ？」

敵意のない、涼しげな視線を向ける。シャルは息をのんだ。

「おまえはあのバカと組んで、幾度も学院の危機を退けている。オレの姉はおまえの妹にずいぶん世話になった。おまえが言った通り、『プリュー姉妹が学院にいないければ起こらなかったこと』が、幾つも起こっているんだ」

「——」

「昨日の巨人を止めたのもおまえだろう。プリューの血が学院にいたことを恨む？　オレはむしろ卒業資格にハクがつくと思うが……おまえたちはどうだ？」

ほかの学生に目を向ける。半年前なら、剣帝けんていと目が合っあって怯ひるまない学生は少数だっ

た。だが、今は――

学生たちの顔に、次々と笑顔が広がっていく。

誰もシャルを責めない。誰も、シャルに罵声を浴びせない。

フレイの手が伸びてきて、シャルの手を握った。

「シャル。アンリを助けよう」

「……アンリはもう、私たちの知ってるアンリじゃないわ。さっきだって、あなた貴女を」

「アンリはアンリ。私たちが助かったのも、アンリのおかげ」

「――私たちを選び出してくれたのは、ロキでしょ？」

「アンリが本気だったら、ロキは間に合わなかったよ。シャルは、見てない？　きらき

らした、いい匂いの、優しい霧が護まもってくれたの」

シャルは困ってシグムントを見た。シグムントがうなずき、言い添える。

「フレイは先ほどから、そう主張しているのだ。霧の一部が護ってくれたと」

「そんなものが？　だけど、アンリは私たちを殺す気だったわ。肌で感じたもの」

「う。アンリはそんな子じゃないよ」

「そうだけど、あのアンリは違うのよ！」

「私には、わかる。アンリは戦ってる。自分の中で、自分じゃない自分と」

フレイの声は確信に満ちていた。

そうなの……だろうか。もちろん、そうあって欲しい。だからこそ、それは甘ったれた願望のようにも思えるのだ。認めてしまうのが怖いくらいに。

「……だけど、そうだとしても、この毒の中で魔女からアンリを奪い返すなんて無理よ。アンリを撃つて、すべてを終わらせた方が」

「暴れん坊の君が泣き言とは、らしくないのではないか？」

急に講堂の中が明るくなったような気がした。

たった今到着したらしい。まばゆい金髪をなびかせ、学生総代オルガが入ってくる。

「まずは今朝、君が逃げてしまつて言えなかった礼を言おう。我らが今日を迎えられたのは、君とシグムントのおかげだ。ありがとう」

見透かされていた。恥ずかしさと嬉しさで、シャルの全身が火照る。

「私はフレイに賛成する。ブリーが結社に狙われていると言うのなら、銀薔薇を打倒し、安全を確保すればいい。実に簡単な結論だ」

ホールを見回す。演説で鳴らした美声に、学生たちが引き込まれ始めた。

「これしきのこと、我らは何度も乗り越えた。昨夜とて、我らは敗北していない」

今の自分たちのありさまを、立て続けの戦場で疲弊していると考えるか——勝利に勝利を重ね、破竹の勢いにとらえるか。その差は大きい。

オルガの泰然とした態度が、学生たちの意識を後者に傾ける。

戦意が盛り上がっていくのが、シャルにははつきりわかった。それが今、無性に怖い。今度こそ、ここにいる全員を死なせてしまふかもしれないから。

「待って！ 相手は毒よ!? 化学兵器よ!? 銀薔薇を倒しても、毒を吸えばそれまで——生き残ったところで、後遺症が出るかもしれないのに！」

「やれやれ、君はそうした無謀を恐れない、真実の愚か者だと思っていたよ。これでは、せつかくのプレゼントが無駄になりそうだな、ダーリン？」

入口を振り返る。疲弊ひへいした様子のヴェイロンが、いかにもだるそうに言った。

「おい暴竜、俺は辻馬車つじばしやじゃねえんだ。面倒なのを我慢して運んでやったのに、戦わな

いから必要ありません——つてな話なら、俺がてめえをぶん殴るぞ？」

「そう言わないでくれ。娘が不甲斐ふがいないなら、私がそのぶん働くよ」

懐かしい声が聞こえ、シャルの鼓動が一瞬、止まった。

「もつとも、それは杞憂きゆうだろうけどね」

いつからそこにいたのだろう。背の高い金髪の男が、二人の後ろに立っている。貴人然とした立ち姿。手足はすらりとして、四十路よそじに入っただけなお容姿端麗。逃亡生活で老けたと聞いていたが、今は心身ともに健康そうで、変わりなく見えた。

やっぱりこれは夢なのか、と考えてしまふ。だって、目の前にいるのは——

「お父さま……！」

エドガー・ブリュー元伯爵だった。

父が近付いてくる。夢にまで見た光景なのに、シャルはまったく動けなかった。

父が目の前に立つ。シャルは背伸びして、その頬ほおに触れる。父はされるがまま、娘の
したいようにさせてくれた。

シグムントがシャルの頭に飛び乗り、ぺちりとしっぱで頬を打つ。

「シャル、いつまでやっている。このエドガーは本物だ」

そのひと言で呪縛から解放される。シャルだけでなく、学生たちも。

「エドガー？」「元伯爵？」「ブリューの？」「本物って——！」

ざわめきが広がっていく。紙面を賑にぎわせたこともある人物ゆえ、エドガーの風貌は彼
らも知るところだ。オルガがシャルに近寄り、悪戯いたずらっぽくささやいた。

「アリスと私からのプレゼント、ということにしてくれ。ロンドンから直送でお連れし
た。喜んでもらえると思ったが、どうかな？」

なぜ帝都——いや、それはどうでもいい。この父が本物なら、ほかに訊ききたいことが
山ほどある。母のこと。家のこと。結社のこと。そして、アンリのこと。

無数の疑問符が脳を埋め尽くし、もどかしいほど言葉にならない。それはあちらも同
じらしく、エドガーは苦笑を浮かべた。

「アンリのときも思ったんだけど、何から話していいか、わからないものだね」

「私も……私も、わからない……っ」

泣き出すシャルを抱き寄せて、エドガーはそっとささやいた。

「つらい想い^{おも}いをさせたね」

そうだ。つらかった。孤独だったこともある。痛み^{もた}に悶え、苦しんだ夜も。シャルが今まで我慢して、必死に抑え込んできたものが、一気にあふれ出した。

「わたし……わたし、がんばって……っ」

「うん」

「いっぱい、がんばって……シグメントなんか、一度死んじゃって……!」

「君が私の娘であること、誇りに思うよ。シャルロット・ブリュー」

もう言葉にならない。わあああつと声をあげ、シャルは泣いた。

山より高いプライドを持つシャルが、人前にもかかわらず、幼児のように泣きじゃくる。フレイがもらい泣きして、自分の家族たちを抱きしめた。

「さあ、もう泣かないで。積もる話は後にして、まずはアンリを迎えに行こう。みんな、力を合わせて、この危機を乗り越えるんだ」

父が言外に含んだ意味を、成長したシャルは理解する。

涙を払って、皆の前に進み出る。大泣きを見られて、気恥ずかしい。だが、それゆえに吹っ切れた面もある。恥は十分にかいた。ならば、怖れる^{おそ}ものはない。

「……ここでみんなにスピーチするのは、二度目よね。一度目は夏の頃——時計塔を壊しちゃったとき。私は自分のあやまちを謝った」

シャルが何を言い出したのか、聴衆は耳を澄まして聞く。

「今日も謝らなくちゃいけないと思って、さつきまで、ごめんなさいばかり言ってきた。だけどみんなは……こんな私を、受け入れてくれた」

なら、言うべきは『ごめんなさい』ではない。

「ありがとう。グリフォン女子寮で一緒だった人には、特にお礼を言いたい。アンリによくしてくれてありがとう。そのアンリが今、毒霧を操ってるわ」

ぐるりと講堂を見回して、一人一人に顔を向ける。

「本当に、身勝手な話だけど……私、アンリを死なせたくない」

声が震えるのを自覚する。この先を言うのは、とても勇気が要った。

「アンリを撃った方が早いってわかってるのに、みんなの命を危険にさらして……アンリを助けたいと思ってる。……どうか、わがままを許してください！」

腰を折って、頭を下げる。シグムントが振り落とされ、ふわりと床に着地した。

今度こそ、罵声が飛んでくるのを覚悟していた。危機をもたらししたのはおまえたちなのに、挙げ句勝手を言うのかと。受け入れてやった恩を仇で返すつもりかと。

だが、シャルの頭に降りそそいだのは、万雷の拍手だった。

びくっとして顔を上げる。何が起こっているのかわからず、戸惑っていると、オルガが親しげにシャルの肩を叩いた。

「君の方針にケチをつける者なんて、ここにはいない」

「……どうして？」

「現在学院に残っているのは、何度も実戦を切り抜けた者——智勇兼ね備えた者たちだ。腰抜けはとくに退学したか、休学している」

学生たちに笑いが広がる。それは自負と、自信のあらわれだ。

「まして学院は実力主義。君の一撃が切り札となる以上、我らは君に従う。もちろん、君には責任も生じるぞ。指導者の重責、君も味わってみるといい」

また拍手が飛ぶ。惜しみなく、滝のように。

涙ぐむシャルを見て、オルガは笑った。

「今日は泣き虫だな。涙を拭け。これより銀薔薇^{ばら}、ならびにリヴァイアサンを討つ！」
「ええ！」

学生たちの盛り上がりは最高潮に達し、たった今担ぎ込まれたばかりの負傷者が、何事かと目を白黒させていた。

人の輪の中心に立つシャルを、シグムントとエドガーが目を細めて眺める。

「これは君のおかげかな、シグムント？」

「それは違う。ここにいない二人組のおかげであり、魔王ウェストン男爵のおかげであり、キンバリー女史のおかげであり、花柳かりやうさい斎女史のおかげであり」

「はは、お礼を言つて回るのも大変そうだ。だけど、まずは君に言いたいんだ」

エドガーはシグムントを抱き上げ、正面から言つた。

「ずっと娘を護り、導まもってくれて、ありがとう」

「なに。それは礼には及ばない」

シグムントもまた、正面からエドガーに答える。

「エレイン以後、私も同じように護られ、導かれてきたのだ。私はブリュートともにある。この先もずっとな」

二人は笑みをかわし、うなずき合つた。

「仕事を急ごう。今夜は君と飲み明かしたい」

「それは楽しみだ」

シグムントはとぼけた顔で、ぺろりと舌なめずりをした。

『その馬鹿^{ばか}を絶対、野放^{のばな}しにはしないでくれよ！』

そう念押しして、アリスは地上に向かって行つた。

だが、雷真^{らいしん}はあきらめない。アリスがいなくなると、早速、硝子^{しょうこ}に頼み込む。

「硝子さん……とにかく傷の手当てを……」

「もちろんするわ。そのために呼ばれてきたんだもの」

「ありがたい……何分で、終わる……？」

「三時間は見て頂戴^{ちようだい}」

「……そうか。なら、治療は後で……いい」

ベッドを降りようとする。硝子が色をなし、らしくもなく声を荒らげた。

「何を馬鹿なこと言ってるの！ 横になりなさい！ すぐやるわ！」

「さっきの話……ぼんやりとだが、聞こえてたんだ……」

雷真^{らいしん}は相棒を振り向き、瞳をのぞき込みながら言った。

「学院……やべえんだろ……？」

嘘^{うそ}をつけばすぐにわかる。夜々^{やや}は顔を背け、返事を拒否した。

「いろり……どうなんだ……？」

「……地上は猛毒にさらされています。人が歩ける環境ではありません」

「その毒……結社の仕業だろ……日輪の方か？」
ひのわ

「……いえ」

「シャルと……アンリの方か……」

雷真は天井を仰ぎ、自嘲を浮かべた。

「アンリとシャルにや……謝らねえとな……足引っ張れだとか、護まもってやるとか抜かし
て……何にもしてやれねえでよ……！」

日輪にばかり気を取られ、ブリュー姉妹の危機を見逃した。

許されることではない。今からでも間に合うだろうか……？

起き上がろうとする雷真を、夜々が必死に押さえ込む。

「無茶むちやです雷真！ 本当に、無理です！」

「……そうらしいな」

これまでもさんざん無茶してきた雷真だが、今日はまともな処置もされていない。少し動くだけで、胸の中が引きつり、かろうじて固定されている血管が破れそうになる。

いや、たぶん破れているのだ。誰かが魔力で擬似的につないでくれただけ。失血量が多く、体温も低い。このまま出て行けば、確実に死ぬ。

「硝子しょうこさん……何とか五分で……できねえか……大雑把おおざっぱで、いいから……」

「……処置には一時間はかかる。絶対に」

「それじゃ駄目だ……戦いが終わっちまう……！」

「戦うなど言っているのよ！」

「だが、俺おれが行かねえで——」

「こらえて！」

硝子の声があまりに悲痛で、雷真のわがママが引っ込んだ。

「お願い」

すぎるように言う。雷真は冷水を浴びせられたような気がした。

とっさに夜々を盗み見る。硝子の態度が意味することを、今さら思い出した。

——もし雷真が無茶をすれば、夜々がまた『命をわけて』くれるかもしれない。

今の夜々には決定打ともなりかねない。だから、戦うなど言っているのだ。

「夜会には間に合わせるわ。もちろん、立っているくらいしかできないでしょう。で

も、坊やのお友達が勝ちを譲ってくれる可能性もある。可能性は残ってるの。だから今

は大人おとなしく横になって。……お願いよ」

「だが……それじゃ、アンリはどうなる……!?」

魔女は強大だ。行かなければ、救ってやれない。

——いや、そうじゃない。認めよう。じっとしていたくないのだ。

アンリとシャルを放置して、安全な場所で治療を受けている自分が、許せないのだ。

だが、硝子しょうこの言うこともわかる。夜々ややのことを思えば、とても逆らえない。

「俺おれにできることは……もうねえのか……!?」

「……あるわ。地上のことは忘れて、己の魔力で、少しでも傷を癒やしなさい」

「魔力で……治療？ そんな高度なこと……俺には無理だ」

「できるわ。坊やのお師匠さまにはできるんでしょう？」

雷真らいしんははっとした。切れかけの腱けんをつないでもらったことがある！

だが、あれは『人体という迷宮を知り尽くした』グリゼルダだからこそ、できた芸当。今の雷真にはとても不可能――

(……いや、あきらめるな。思考停止するな)

グリゼルダが教えてくれた剛体、霊視てんがん、天眼てんがんのスキルがある。

使えるようにしてくれた、紅翼陣こうよくじんがある。

何より、一度は雷真の体で実演してくれた。

もともと雷真は剣術道場にいた。接骨かつぽうや活法かつぽうは嗜たしなんでいる。それに、今は硝子がいる。ほんの少しでも硝子を手伝うことができれば。治療力を高められたら……。

「局所麻酔で……やってくれるか？」

「いいえ、麻酔はなし。いろいろの冷気で冷やすだけ」

いろいろと夜々が目を丸くした。麻酔なしでの開腹手術など、正気の沙汰ではない。

「麻酔を使うと魔力が乱れる。痛覚だけ都合よくまぎらせる——そんなことができるのは、坊や自身だけよ。自分の体なんだから、神経までも統制してご覧なさい」

なるほど、と思った。人体という迷宮の謎を解き明かす鍵は、そこにある。

「これは……とびっきりの、無茶だな？」

「外に飛び出して犬死にする方が、よっぽど簡単でしょうね」

「……痛えのはもう、慣れっこだしな」

雷真は覚悟を決めた。想像を絶する苦痛だろうが、硝子を信じて身を任せる。

「頼むぜ……硝子さん。俺はまだ……ここでは……死にたくない」

「私は神さまじゃないわ」

硝子はつれなくそう言って、それから、かすかな笑みを浮かべた。

「だから一緒に、人の死力を尽くしましょう？」

それで十分だ、と雷真は思った。

硝子は雷真の胸を消毒し、メスを手に取る。

冷たい銀色の輝きが、すっと滑り込むように、雷真の胸に入ってきた。



Chapter 7 銀色すみれ

1

大講堂に活気が満ちる。戦力と物資の確認、部隊編成、偵察、解毒法の検討など、学生たちのそれぞれが知識と能力を持ち寄って作戦開始に備えている。

シャルも意気軒昂だ。エドガーが不思議そうに語りかけてきた。

「笑っているね、シャル。怖くないのかい？」

「そんなことないわ。実戦はいつだって、とても怖いわ」

「とてもそうは見えないけれど……」

「怖いけど、嬉しいの。プリューの娘らしいところ、ようやく見せられるんだもの！」

エドガーが目を見張る。そして、頼もしそうにうなずいた。

「君が魔剣闘法グラムパニャを身につけてしまったのはとても残念だけど、嬉しくも思うよ。今の君の姿を、母にも見せたいと思ってしまった」

じん、とシャルの胸が震える。父はシャルの肩を叩き、穏やかな口調で言った。

「銀薔薇は私に任せてくれ。近くにアンリがいたら、一緒に無力化できないか試してみる。だけど、問題はそこにいなかったときだ。そのときは——」

「人形の側そばにいるわよね。大丈夫、上のあれは私とシグムントでやつつけるわ」

シャルは明瞭に言う。これは勇気か蛮勇か、エドガーは見定めるような眼めをした。

「本当に大丈夫かい？ 上空は地表より毒が濃いように見えた」

「突き抜けちゃえば大丈夫。シグムントはあの毒、へっちゃらなのよね？」

「うむ。気体を吸うぶんには、まったく問題がないな」

シグムントは涼しい顔で答える。自然界に存在する毒であるがゆえ、魔術師であつても抵抗しにくい一方、自動人形オートマトンにはさしたるダメージを与えない。

「諸君、いよいよ反撃のときだ」

オルガが朗々と声を響かせた。ざわめきが静まり、学生たちが気を引き締める。

「講堂にいるのは学生二九八名。残りは各所に散らばっている。無事を信じたいが、このような気密結果が用意できたかどうかは不明だ。それでも——無事を信じよう。我らはこれより、生存者の救出に向かう」

学生たちがうなずく。どの顔にも覚悟があつた。

「ここを指令部とし、私はここで指揮を執る。要救助者を発見した場合も、できなかった場合も、ここに戻って手当てを受け、確認した場所を報告してくれ」

そうして皆で手分けして、学内全部をチェックする手はずだった。

「救助した者はスレイブニルの〈距離操作〉^{ストライド}で市街地まで運ぶ。進路上の障害物は人力で排除してもらうが、その際、羽虫を碎かぬよう注意されたい。搜索の際も同様だ。凍結、溶解、燃焼系で処理するのが望ましい」

「……また俺に〈足〉をやれつてのか？ 俺は運び屋じゃねえぞ」

ヴェイロンが不平を言う。オルガは苦笑いを見せ、恋人の胸にもたれかかった。

「スレイブニルで攻撃したのでは、羽虫を碎き、毒を拡散させてしまふ。だが、移動手段を提供してくれるなら、仲間が助かる。私は君の力を皆に見せつけたいんだ」

「……面倒くせえな。だが、おまえがそう言うなら」

「ちよつとそこ！ 貴女^{あなた}たちがいちやついてると周囲の意欲が減退するんだけど！」
シヤルが突つ込むと、笑い声上がり、学生たちの緊張がほぐれた。

それもオルガの計算なのだろう。しれつとして言葉を続ける。

「現状、通信手段がほほない。各隊はリーダーの指示に従い、統制の取れた行動を心がけて欲しい。運よく教官と合流できた者は、教官の指示を優先しろ」

医学部の学生が進み出て、羽虫の残骸が入ったガラス瓶を掲げた。

「毒について説明します。強心配糖体の一種——ジギタリスや鈴蘭^{すずらん}の毒に近いようです。体験した方もいるでしょうが、嘔吐^{おうと}、頭痛、めまい、重症化すると心不全を起こし

ます。軽症ならば、水を摂取し、清浄な環境で安静にしていれば、症状が改善します。

霧を吸い込むと、羽虫の残骸が気管を傷つけ、出血することがわかっています」

「伝承の通りなら数分で死ぬぞ。学生の死体はまだ見つかっていないが……」

なぜ死体が見つからないか、という謎もまた、解明しなければならぬ。

「敵性魔術師を発見した場合、攻撃せずに報告してくれ。繰り返すが、攻撃は必要ない。銀薔薇ならびに怪物を撃破するのは――」

オルガが手を挙げ、シャルとエドガーを示す。

「我らが栄光王と、英国の雄エドガー・プリュー殿下。諸君の勇氣と賢明さに期待する。準備のできた者から行動開始！」

学生たちが五、六人ごとの班にわかれ、出入口へ向かう。

気体操作の魔術を持つ者、結界や防衛術に長けた者が中心となり、一応は対化学兵器戦の準備をしている。工学部がどこから酸素ボンベや試作品のガスマスクを調達してきたが、絶対的に数が足りない。靈薬エリクサーを携行できるのはいい方で、袋に空気を詰め込んだだけの者や、タオルを巻いて手製のマスクにした者も多い。

明らかに無謀。犠牲を最小限に抑えるためには、シャルがアンリを止めるしかない。

玄関口では上級生が気密結界の番をしていた。出撃のためにそこを開ければ、ホールの中に毒素が入り込んでくる。講堂の外は黒々として、夜間のように暗い。

「おい、上を見ろ！ 外！」

誰かが叫ぶ。シャルも空を見上げ——ぎょつとした。

最初に思ったのは、認識の錯誤ではないか、ということだ。空中にある物体は距離感が狂い、大きさを見誤る。だが、天を覆うほど巨大なものを、見間違えはしない。

「どこが……羽虫よ……!?」

上空にあったのは、途方もなく長大な、大蛇のごとき怪物だった。

昨夜のヨルムンガンドとは規模が違う。全周七キロの学院を一周して余りある。無数の羽虫が集合して、一体の怪物のようにふるまっているらしい。虫のはばたきが突風を起こし、彼らの摩擦が雷電を生み、稲光が閃いた。

その威容はまさしく、神話の悪しき龍そのもの。

学生たちの意気がくじける前に、エドガーが気楽な調子で言った。

「では、私が最初の突破口を開こう。あれをやるよ、シグムント」

「——心得た」

楽しげな返事。シグムントがエドガーの腕に止まり、滅元素を生成し始める。

「みんな、これからちよつとまぶしくなるけど、害はないから抵抗しないで。これが私の得意技——」

「活殺結果」だ

エドガーの魔力が解放される。宣言通り、あたり一面に光がともった。

初めはまばらに、やがて激しく、ぼつ、ぼつ、と鬼火が乱舞する。講堂だけではなく、輝きはガラスの向こう、はるか先まで広がっていた。

「これ、滅元素……よね？」

シャルは鬼火に触れてみる。万物を消滅させるはずの滅元素が、まったく肌を侵さない。むしろ、包み込まれるようなあたたかさを感じた。

光が弾け、視界が白く染まる。やがて光が収まると、夕焼け空が見えていた。

そこだけ怪物が消滅したのだ。敵の勢いは衰えず、すぐさま穴を埋めてしまう。

だが、エドガーの力を知るには十分だった。何よりも恐ろしいのは――

(敵だけ選別した……!?)

かつさつつかい

活殺結界とは、「結界破りに長^たけている」だけではなかった。エドガーは結界内の活殺を支配し、『生殺与奪の権を持つ』ようだ。

学生たちの士気が再び盛り上がる。彼らは勇ましく、我先に飛び出して行った。

彼らが発すると、シャルの周囲には見知った顔が残った。

司令部詰めを命じられたフレイとロキ、ヘイゼル。そしてヴァイツゼッカー姉妹。双子は完全武装の騎士を連れ、のん気に窓の外を指差していた。

「あれ、クジラかなー？」「ワニじゃない？」「ナマコかも！」

そんなことを言い合っている。意外と緊張感がない。

「あれって、ちっちゃい虫なんだよね」「気持ち悪いねっ」

「蚊とかブヨみたいなの機械の虫よ。吸ったら、肺の中を噛まれるわよ」

「つきやー!」

二人の背後からシャルが脅かす。シャルは微笑^{ほほえ}んで、二人にたずねた。

「あなた、ひょっとして……私を手伝ってくれるつもりなの?」

「やらないわけにいかないよね」

「お姉さんだからね。私たちなら空飛べるしね!」

思えば、前に銀薔薇^{ばら}とやったときも、この二人が一緒だった。

「友達かい?」

エドガーに訊^きかれ、シャルは自信を持って、うなずいた。

「友達よ!」

エドガーは娘をまぶしそうに見つめ、シグメントをシャルに返した。

シャルは魔竜の質量を増やし、その背に飛び乗って、父を振り向いた。

宙に舞い上がりながら、怖くて訊けなかったことを訊く。

「お父さま、これだけ聞かせて! お母さまは、無事なの?」

地上に残ったエドガーは、微笑んで手を振った。

どういう意味だったのだろうか? どんどん小さくなる父の姿を毒の霧が覆^{おお}ってしま

う。双子の騎士がすべり込んできて、羽虫の群れからシャルを護った。

母の無事は確認できなかったが、シャルに迷いはない。

あふれる勇気を力に変えて、シャルとシグムントは天を目指した。

2

その終末じみた光景を、グローリアは恍惚として眺めた。

「何と素晴らしい……天が死の臭気に覆われていく……！」

一面、闇色の霧。時折り見える空は赤く、人類の黄昏を思わせる空模様だ。金属の粒が碎ける音、無数の羽音が渾然一体となり、亡者のうめきのようにも聞こえた。

グローリアはイージスⅡを三方に配し、自軍を守る壁としている。今のところ、部隊は毒霧の影響は受けていない。

「ふふ、すべてが順調です。ただ一点、シャルロットを逃したことをのぞいてはね」
ため息が漏れる。少女たちが毒にまかれて死ぬ前に、雷電が走り、完全統制振動を操る者が少女たちを連れ去った。

「あれは〈剣帝〉^{けんてい}の仕業ですね。子どもらしからぬ技量よ」

精鋭をも出し抜き、手出しもさせない鮮やかさ。今さらだが、彼は学生の域にない。

「アンリエット。精霊女王たるそなたが、彼に気付かなかったのですか？」

「……申し開きの言葉ありません」

「ああ、責めているわけではありません。そなたはよくやってくれています。……顔色が優れませんね？　姉を攻撃したことで、気がとがめましたか？」

「いいえ。陛下のご厚情を賜りながら、そのお慈悲を理解せず、あまつさえ裏切りを働くなど愚の骨頂。（こつちやう）あのような者、もはや姉とも思いません」

アンリはきっぱりと否定する。グロリアは目を細めた。

「そう申すものではない。あれも今は惑っているだけ——わたくしも大人（おとな）げがありませんでした。そなたが姉を捕らえ、教導してやりなさい。姉妹仲むつまじく、そろって仕えてくれれば、わたくしも嬉（うれ）しく思います」

その情景を想像したのか、アンリの心がわずかに動いた——ようだ。

自分でも気付いたようで、戸惑った様子で、ゆるみかけた頬（ほ）に触れる。

直後、その顔がゆがんだ。頭痛に襲われたらしく、こめかみを押さえる。

「す……みません、お話の途中で……！」

「よい。そなたは娘も同然。そなたなくして、わたくしの幸福はありません」

もったいなくも女王自ら、アンリを抱き、支えてやる。アンリは辛せそうに微笑（ほほえ）んだ

が、痛みはどんどん劇しくなっているようで、呼吸が乱れ始めた。

今アンリが倒れたら、リヴァイアサンが制御を失う。

部隊に緊張が走る。グローリアはGLR兵を呼び寄せ、指示を出した。

「龍毒を吸ったのかもしれませんが。酸素の精製を急ぎなさい。それから、あるだけの解
放剤を投与せよ。敵の反撃に備え、アストライアの配合を多めに」

GLR兵は機械的に「御意」と応え、ぎよっとして顔を上げた。

「あるだけ、とおっしゃいましたか？ この上まだ〈エンハンサー〉を……？」

「都市を龍毒で覆ってしまうのです。さすれば誰にも、どこにも、逃げ場などない」

愉悦が込み上げる。ひよっとしたら、学院を支配したあるとき以上に気分がいい。

「わたくしを受け入れなかった学院も、都市も、国も、思えばくだらぬ与太者の集ま
り。薔薇を退けるついでに、〈改革断行〉といきましょう。ふふふ！」

戸惑うGLR兵に代わり、ディラックがグローリアの前に進み出た。

「グローリアさま、大変失礼ながら、その……お気は……？」

「確かです」

「では、何かの比喩でしょうか。機巧都市を龍毒で覆うというのは、正直に申しまし
て、賢明な策とは思えません。都市住民は帝国の宝です」

「そなた、愚息の兵の分際で、わたくしに意見するか」

ディラックは沈黙した。なかなか賢明な男だ。

エドマンド陛下が寄越したこの兵なくして、グローリアが軍の拘禁を脱することはできなかった。決して安くはない取引だったが、それでもエドマンドの温情とも言える措置であり、グローリアの方が勘違いをしている構図になる。

文句のひとつも言いたいはずだが、ディラックは言わず——見切りをつけた。

「畏れながら申し上げます。リヴァイアサンがこれほどの力を持つとは、想定外でした。我ら〈レガシー〉隊は己を守るので手一杯、もはやお役に立てません」

「撤退したいと申すか。腰抜けめ。どこへなりと消えるがよい」

「ありがとうございます。——撤収！」

合図と同時に動き出す。伝説級を連れた部隊は、驚くほどの逃げ足を發揮して、すぐに見えなくなった。臆せず霧に飛び込み、風上へと消えていく。

GLR兵に不安が広がるのを見て取り、グローリアは鷹揚に言った。

「何を怖れる。わたくしを救い出した時点で彼らの仕事は終わっています。彼らは援軍に見せかけた監視役——愚息に手の内をさらす必要はありません」

だから追い払ったのだ、という含み。

兵に安堵が広がる。精強な機巧師団に比べると、いかにも怯懦な反応だ。

このような弱兵しか持たない我が身が、急に滑稽こっけいに思えた。こんなことなら、軍を頼みとはせず、金薔薇のような兵团を組織しておくべきだったか。

だが、今さら言っても詮なきこと。グローリアが頼みとするのは、結局のところ、自分自身と、精霊女王と、神話の怪物のみだ。

GLR兵がアンリへの薬剤投与を始める。アンリはうめき、もがいた。

それでも苦痛に耐え、管を自ら押さえて、投与を受け続けようとする。その忠誠、苦しげな表情に、グローリアは傷が癒えるような錯覚おちいに陥った。

過去に失ったものを、少しでも、取り戻したような気分になる。

事実、大きな成果が期待できる。都市を死滅させ、夜会をつぶせば、学院が神性機巧マシンドールを手にもすることもなく、薔薇たちの賭けも『なかったこと』になる。

都市壊滅の報は貴族院を震撼しんかんさせ、誰もグローリアに逆らえなくなる。逆らうようなら、もうひとつふたつ都市をつぶす。数十万の死体を見てから降伏するのは、何とも間拔けな手順前後だ。かくしてグローリアは王となり、〈予見〉の条件を満たす。

ジャガーノートとリヴァイアサンを持つ以上、大戦での勝利も約束されている。その先は世界皇帝だ。そうなれば、きつと埋め合わせることができる——何もかも。

そのとき、周囲に鬼火がわいた。

何者かの魔術攻撃と判断し、イージスⅡの魔防を起動する。それが致命的な判断ミ

ス。鬼火が壁に触れた途端、大爆発を引き起こした。

兵がなぎ倒され、銃器が消し飛び、機械犬が全頭スクラップになる。先頭のイーリスⅡも頭部を消されてしまった。心臓はかろうじて無事だが……。

（かろうじて？ いえ、そうではない！）

敵は敢えて、致命傷を与えなかった。その証拠に、兵は装備を失っただけで、一人も死んではない。これが誰の仕業か、グローリアはもう理解している。

思った通り、驚異的な力を持つ魔術師が接近してくる。アンリがリヴァイアサンに攻撃を命じ、城塞のような尾で魔術師を圧殺しようとした——が。

敵の周囲に光の残滓が漂い、怪物の尾を消滅させてしまう。

グローリアは目をむいた。今や、周辺の精霊はアンリの支配下にある。敵は魔剣を持つ歩いてる様子もない。なのに、敵は魔剣闘法を使っている！

アンリが点滴の針を抜き、「陛下」とグローリアを呼んだ。

先ほどまでの苦悶が、嘘のように消えている。その代わり、まるで精気がない。アンリは目の前の彼にも無反応で、機械のように平坦な声を出した。

「リヴァイアサンの減耗が三割に達しました。増産しなければなりません——この距離ではロスが大きく、非効率です。リヴァイアサンの近くに行っても？」

「——結構です。ですが、絶対に死守なさい」

「待つんだ、アンリ！」

魔術師が距離を詰めてくる。だが、彼であっても、このアンリをとらえるのは容易ではない。アンリは己の守護精霊ガイゲイアンの特性を使い、魔術回路もなしに転移した。

転移で逃げ回りつつ、羽虫を呼び寄せる。羽虫はアンリの手元で結合し、フルフェイスのかぶとになった。色は不思議と黒ではなく、白銀に輝いている。

アンリはグローリアの眼前に転移し、うやうやしくかぶとを差し出した。

「どうぞ、我が君。龍毒から御身をお守りいたします」

「ほう——そのような機能が？ ありがたく使わせてもらいましょう」

虫がからまり合った不気味な仮面を、グローリアは躊躇ちゅうちゆなくかぶる。甘い芳香が肺を満たし、呼吸がすつと楽になった。

GLRの対毒マスクより、よほど精度が高い。呼吸に詰まることなく戦えるのは大きな利点だ。それにこの仮面は都合がいい。敵から表情を隠してくれる。

——この男にだけは、今の自分を見せたくない。

グローリアの装着を確認すると、アンリは転移で離れて行った。

「あの転移はわたくしにもできぬ。そなたにもできぬでしょう、エドガー？」

魔術師に問う。その名を聞いた途端、GLR兵が浮き足立った。

直前の攻撃で、脅威は十分、理解している。この敵がその気になれば、耐毒マスクの

みを消滅させることもできるのだ。

次々と敵前逃亡するのをとがめず、グローリアはエドガーだけを見つめて言った。

「ずいぶん無粋な再会もあったもの。女王の御前ですよ。ひざまずくがよい」

「私の前にいるのは、將軍でもなく、王妃でもない、ごく普通の女性です」

「ふん……非殺のエドガーも、リヴァイアサンだけはどうしようもなかったようですね。ずいぶん数を減らしてくれた。何億の彼らを殺したのです?」

「私は残酷な男です。心臓をつぶさないというだけで、手足をもちで転がすようなこともする。勝手な基準があるんですよ。人の心を持つものは殺さない。ですが、人の心を持たないものはむごたしくすりつぶしてもいい。貴女^{あなた}はどちらでしょうね?」

「人の心が聞いてあきれる。わたくしを指弾する資格がそなたにあると?」

「善悪論争は日を改めて。今日のところは、とにかく娘を返してもらいたい」

「いわれはありませんね。あれはもう、わたくしのものです」

両者の魔力がぶつかり、大地に蜘蛛^{くも}の巣状の亀裂が走った。

二体になったイーリスⅡを呼び、グローリアはブロードソードを抜く。

^{あなた}
「侮^{あなだ}られたものよ。自動人形も連れず、わたくしに勝てますか?」

「殿下は先ほど、上の娘にこうおっしゃったそうですね。『策略で妃殿下將軍を上回ろうなど、十年早かった』と」

「確かに言いました」

「では、仕返しです。武勇でプリューに勝とうなど、一二〇年早い」

「見せるがよい。その武勇！」

魔^ま靴^{くつ}の刃を叩^{たた}きつける。大地が砕け、土砂が下から上に降った。

そうして、地獄のごとき風景の中、魔女と大魔術師の戦いが始まった。

3

シャルはシグムントを駆り、双子とともに霧の上へと飛び出した。

息は止めていたが、頭痛がひどく、手足の動きが鈍^{にぶ}っている。フレイはアンリが手加減してくれたと言ったが、とてもそんな感じはしない。

リヴァイアサンが鬱^{うつ}陶^{とう}しそうに胴体を寄せてくる。羽虫はただ群れているのではなく、互いに手足をからめ、結合していた。密度は極めて高く、重量も想像を絶する。

「当たったらぺちゃんこよ！ よけて！」

「無理だよシャル！」「魔剣で消し飛ばして！」

双子が叫ぶ。シャルは撃たず、くぐってかわした。猛毒の突風にあおられながら、どうにか距離を離す。息が切れるのを見て、シグムントが冷静な意見を述べた。

「あの二人の言う通りだ。ラスターカノンでなぎ払おう」

「だめよ！ あれだって……あんなのだって……自動人形でしょ！」

「そうとは限らん。よく見ろ」

ぐるっと旋廻し、脱落していく羽虫の残骸を見せる。

「身じろぎひとつで、何万ではきかない数が死ぬ。連中に個別の自我はない。そうであれば、あんな行動はできない」

「お魚だって魚群を構成するわ。増えすぎたレミングは集団自殺するのよ」

「……難儀だな。自我があるなら、君の精霊感応力エコーズセンスで感知できるのではないか？」

その手があった。シャルはロッテを呼び起こし、感覚を同調させた。その結果――

「感情精霊が全然いない……。これは機械……だわ」

虫であっても感情に類するものを持つ。だが、これには感情も、知性もない。条件反射と、本体からの命令のみで行動している。そうとわかれば容赦はいらない。

「ラスターカノン！」

光の奔流が龍の巨体をなぎ払う。だが、新たな羽虫が傷を埋め、巨体を復元する。その過程で羽虫がぶつかり合い、毒粉となって大気を汚染した。

（嘘！ これって逆効果……!?）

しかし、撃たないわけにもいかない。とにかくラスターカノンを連発する。そのうち

にめまいがして、シグメントから転げ落ちそうになった。

「っ……毒が回ってきた……！ アンリ！ どこ!? アンリ！」

叫びながら、撃ちまくる。そのがむしゃらな行動は、決して無駄ではなかった。

ある瞬間に、精霊が手を貸してくれなくなった。

「また支配権コントロールを奪われた……！ アンリだわ！ こっちにくる！」

果たして、扉が開くように虚空が裂け、アンリが転移してきた。

シャルが何か言うより早く、機械的に手を向ける。

シャルは本能的にシグメントを反転させた。空間が圧縮され、ずしんつ、と重たげな音が響く。羽虫の群れがそこだけ消え失せ、正方形の穴があいた。

（つぶした……!? これ、〈扉〉の力……!?）

扉——それは別世界への入口。固く閉ざせば、己を守ることもできる。重厚な鉄扉に挟まれれば、肉がつぶされ、骨を砕かれる。

攻、防、機動力を兼ね備えた異能、それがアンリの精霊ちからだった。

だが、シャルはもつとも動揺したのは、その性能ではなかった。

「アンリの心を全然感じない……！ これじゃ、さっきの方が全然でしたわ！」

「うむ……私にも見て取れる。今のアンリは機械仕掛けの人形のようにだ」

虚ろな瞳はシャルを突き抜け、ずっと遠くを見ているように思えた。

「王妃に何かされたな。あの場にはGLRの研究者がいた」

ずしん、ずしん、と立て続けに扉が閉まる。油断すれば、リヴァイアサンにつぶされる。両者の攻撃をかわしながら、シャルはアンリを見極めようとした。

「ねえ！ あれが、チェンジリングなの!?」

「シャル、考えるのは後だ。戦いに集中しろ」

「それって、伝承の話でしょう？ 子どもが妖精にさらわれて、別人にすり替えられて……しばらくすると、帰ってきた方——つまりニセモノの方が死んじゃうの！」

シグムントは首を地表に向け、自然落下で速度を稼いだ。

まだ汚染の進んでいない、市街地の方へ逃げながら、告げる。

「精霊感応力エコーズセンスを持つ子どもには、まれに人格の豹変ひょうへんや心神耗弱こうじやくが起こる。強い精霊を持

ちながら、支配できなかったとき——君がロツテと心を通わせることができず、かと言って決裂もできず、未熟なまま共存し続けていたら、起こり得た」

「それを妖精の〈魅了〉って言うんでしょ？」

「そうだ。〈魅了〉とは、心とらわれること。君がロツテの言葉に感化され、己の言葉として口にするようになったとき、周囲には君の人格が変わったように映る」

「じゃあやつぱり、アンリのあの状態は……！」

「魅了、すなわちチェンジリングだ。あのままでは遠からず、自滅して死ぬ」

アンリが地表に転移し、こちらに向けて〈扉〉を開いた。

シグムントは加速がつき、止まらない。扉に飛び込みそうになったとき、双子の騎士が割り込んできた。

二体の騎士人形が槍やりを合わせ、完全統制振動フルコントロールでシグムントを受け止める。慣性が消え、ベクトルが反転し、シャルは何の衝撃も受けずに空中に逃れた。

助かった……とは言えない。リヴァイアサンの巨体が眼前にあったからだ。

挟撃を仕込まれていた。岩盤のようなボディで、三人と三体が大地に叩たたき落とされる。地盤が沈み、地形が変わり、付近の建物が巻き添えを食って崩壊した。数百トンもの羽虫がつぶれ、猛毒が駅前のストリートにあふれる。

だが、シャルはまだ死んではいなかった。

ラストカノンが霧と巨龍を切り裂く。それで圧死はさけられたものの、双子は力を使い切り、目を回した。騎士二体も魔力切れが近い。

「ああ……旧市庁舎が……聖堂も！」

美しかった街並みが、見る影もなく瓦礫がれきの山だ。シャルは絶望的な気分になった。

今さらながらに敵の強さを知る。この状態のアンリを気絶させるのは、思っていた以上に難しい。まして、シャルは精霊の加護を失っているのだ。

ロッテの〈鏡〉だけなら、使えないこともない。だが、鏡を保持してくれる精霊がい

なければ、空中に浮かせることもできない。

「シャル……アンリから目を離すな……！」

血だらけのシグムントが首を起こす。その鼻先に、アンリが転移してきた。

手をかざす。シグムントの頭が《扉》に挟まれ、縦長に変形した。めきめきめきっと骨が砕ける音が響き、血しぶきが飛ぶ。シャルは妨害しようとしたが、精霊術^{ジン・マスタリー}を封じられ、シグムントを拘束されては、救う手段がない！

そのとき、くぐもった声で誰かが叫んだ。

「アンリエットは……攻撃をやめる！」

ガスマスクを装着した、小柄な影がアンリの背中に飛びつく。

まさかの直接攻撃。呪文は言ったが、肝心の黒刀もなく、身ひとつでアンリに組みつく。案^{あん}の定^{じよう}、ヘイゼルは念動で叩^{たた}きのめされ、瓦礫^{がれき}の中に転がった。

嫌な角度で背中を強打する。それでも彼女は、震える足で立ち上がった。

「私が言うのは、おかしいけど……アンリエット・プリューは……その名前の少女は……こんな子じゃない！ 私が好きな、あの子は！」

そんな訴えに、アンリは耳を貸さない。リヴァイアサンの巨体がヘイゼルに迫る。

だが、それはガラつく熱線が焼き払った。炎を噴^ふき上げ、空中で大剣^{まわ}が廻る。炎が羽虫に引火し、山火事のように燃え広がった。

膝から崩れるヘイゼルを、マスクをした男子学生が抱き止める。

「こんな奴^{やつ}でも、見殺しにしては後味が悪いからな」

「その声——ロキね？　きてくれたのね！」

「う。私も！」

オオカミ犬にまたがり、マスクをしたフレイが駆け込んでくる。ラビもまた、形の合わないマスクを無理やり装着させられていた。

フレイはラビの背中からマスクを取り、次々とこちらに放^{ほう}つてくれた。

シャルは双子と騎士に手渡し、最後に自分も口に当てた。空気をろ過するフィルターではなく、酸素を吸わせるだけのカラクリだが、呼吸できるのはありがたい。

ジブリールを脅威に思ったか、アンリはリヴァイアサンを上空に引き戻し、損害を確かめるような素振りを見せた。あくまでリヴァイアサンが大事というわけだ。

「ヘイゼル、頑張ったね……」

気絶したヘイゼルを、フレイが愛^{いと}しげに抱きしめる。

「気持ち、わかる。アンリは優しくて、あったかい、素敵な子だよ」

「……そうよ、私の大好きな妹はこんなことしない。だから取り戻すわ。疲れてるところ悪いけど、みんなの手を貸して！」

シグムントの巨大化を解き、サイズを縮めながら言う。ロキはすぐに意図を察した。

「対抗手段があるんだな？」

「あるわ。一分——三〇秒、時間を頂戴^{ちやうだい}！」

「いいだろう。オレたちの命、おまえに預ける」

二つ返事で言ってくれる。アンリがさせじと猛攻を加えてきた。

リヴァイアサンの尾が、爪が、叩きつけるように降ってくる。そのたびに猛毒の滝が生まれ、ハリケーンが襲来したような騒ぎになった。

こんな怪物を相手に、できることなどほとんどない。降りそそぐ瓦礫^{がれき}と羽虫をしのぐので精一杯だ。それでも双子、フレイ、ロキは三〇秒の時間を稼^せごうとする。

シャルは仲間たちに背中を預け、己の作業に没頭する。シグムントと感覚を同調させ、上空からラスターセイバーを吐かせる。狙いは地上、てんで見当違いの場所だ。アンリも不審に思ったらしく、標的をシャルに変更した。

だが、仲間たちがそれをさせない。隙^{すき}あらばアンリに肉迫し、取り押さえようとする。いつしか、アンリが転移で逃げ回る展開になった。

いける。シャルは確信し、大地に深く傷痕を刻み続ける。

「シャルロット！ 中断して退避しろ！」

ロキが鋭い警告を飛ばす。シャルは何事かと振り向き——気付いた。

リヴァイアサンの頭部が、こちらを向いていた。

あまりに、大きい。紅い^{あか}眼球は学院の貯水池くらい大きい。牙は氷山のような規模で、シャルを食いちぎるところか、つぶしてしまえる大きさ。口から吐息が漏れるたび、甘い香りが漂い^{たひよ}、空気がきらきら光った。

その頭部の、頬と喉に当たる部分が膨らんでいる。

息を吸うような動き。内部で多量の羽虫を碎き、毒を蓄えている。

頭部は直径三百メートル超。その幅の〈竜の息〉が発射されるのなら、その威力は想像もつかない。シャルには受け止める手段がなく、ロキが対処すれば、アンリが自由になる。フレイは魔防の維持で手一杯。双子はもう魔力切れだ！

（ここに雪月花^{せつげつか}が——あいつがいてくれれば、手が足りるのに！）

やがて、リヴァイアサンが特大のプレス^{はな}を放った。

石畳を粉塵^{かんじん}に変え、音速の速さで暴威が迫る。シャルは死の訪れを待った……のだが、衝撃波も、猛毒も、仲間たちの手前で食い止められた。

空気が逃げ道を探し、凄まじい^{すさ}速度で真横に流れる。稲穂が踏まれて横倒しになるように、建物がはるか先まで倒壊した。

恐ろしく精密な魔法円が多数、びっしり空中に浮かび上がっている。

ずらりと並ぶ黒コート。魔術師協会^{ネクタル}の面々が百名規模で魔防を多重展開していた。そ

の防壁に強化の魔術式を刻んだのは、機巧物理学のスペシャリスト――

「あそこ！ キンバリー先生だわ！ ウェストン先生もいる！」

グリゼルダの肩を借りて、ようやく立っている。半死人といった様子のキンバリーが、意外なほどの大音声で怒鳴った。
おんじきう

「いい加減にしろ、アンリエット！」

アンリの動きが止まる。ぼかん、としているように見えた。

キンバリーはグリゼルダに支えられ、よろめきながらも一歩、踏み出す。

「こんなくだらないことは、もうよせ。……そして、帰ろう。あの部屋に」

銃弾で撃たれたように、アンリが大きくよろめいた。

こめかみを押さえ、苛立^{いらだ}たしげな目をキンバリーに向ける。

「おまえたちはっ……なぜ……邪魔をする……！」

「さあ、アンリエット。一緒に、帰――」

「消えろ！」

アンリがてのひらを向け、握りつぶすような仕草をする。守護精霊^{ガーディアン}が力を発揮し、視^み

えない扉がキンバリーを狙った。百人がかりの魔防が破れ、精霊が侵入してくる。

だが、キンバリーは圧殺されない。アンリの精霊力が、唐突に消え失^うせていた。

「ぎりぎり……完成ね」

ひたいに浮いた汗をぬぐい、シャルがゆっくりアンリを振り向く。

アンリが何度も手を握る。だが、精霊力は発揮されない。

「無駄よ。機巧都市このまちの精霊はもう、私の味方になってくれた。こんなふうになー」
変わってシャルの腕から突風が生じ、アンリを弾き飛ばした。

「……私にはまだ、リヴァイアサンがある」

感情の消えた瞳で、アンリが巨龍に手を伸ばす。怪物が再び息を溜め始めた。
だが、今度はこちらにも武器があるのだ。

シャルは鏡を天に配し、滅元素を反射させて、大きな渦を作り上げる。ここまでの無理がたり、魔力はもうない。だが、尽きることも決してない。なぜなら――

十字架の戦士がシャルの周囲に円陣を作り、両手をこちらに向けていた。

トランスファー

魔力賦与。彼ら超一流の魔術師たちが持つ、莫大な力が送られてくる。ロキも、フレ

イも、双子の姉妹も、ヘイゼルさえ、それに加わってくれた。

（ありがとう……みんな……ありがとう！）

己の内側から、尽きたはずの力が沸きあがってくる。

シャルはアンリを見据え、ありったけの想いを込めて、心の引き金を引いた。

黒と白。敵と味方。二色の力が空間を焼く。プレス対プレス、正面からの撃ち合い

は、神話の光景に似て、莊嚴そうごんですらあった。

リヴァイアサンは怪物だった。大きさも、強度も、単体での破壊力も、領域支配能力も、増殖できる能力も、まさしく神話級と呼ぶに相応ふさわしい。それを操るアンリもまた、伝承に語られるような、精霊の女王と言つてよかった。

だが、シャルは思うのだ。強いだけの力など、一二〇年にわたる魔竜との信頼や、父祖伝来の魔剣闘法や、人間同士が手を取り合うことや、友達存在に比べたら――

（見劣りするわ！）

全長十数キロに及ぶ神話の怪物は、その吐き出した奔流ごと引き裂かれた。

巨大な体躯たいくの八割以上を消し飛ばしている。天を覆おおう羽虫の霧が晴れ、美しい夕焼け空がのぞいた。その余韻にかぶせるように、清らかな歌声が満ちていく。

（鮮やか……！ アリスの差し金ね……！）

ここにはいない仲間のことを思いながら、シャルは真後ろに倒れ込んだ。

後頭部を瓦礫がれきに強打する代わりに、ふにょんとやわらかい物体が受け止める。

普段は腹立たしいそのポリウムが、今だけは心地よい。フレイの胸で気を失いそうになっていると、視界のすみにロキのあきれ顔が入った。

「控えめに言つて――今の一発は、度肝を抜かれた」

「……そう？」

「一対一の殺し合いならともかく、戦場でおまえと敵対するのはごめんだな」
彼にしては最上級の誉め言葉だ。シャルはくすぐったくなった。

「今のは特別よ……。協会の人たちがくれた力だもの……」

ロキは地面、シャルがラスターセイバーで描いた巨大な〈地上絵〉を示す。

「これは結局、何だ？ 精霊力を強化する魔術式か？」

「ええ、そう……精霊を統べる〈王錫〉のルーン……」

「う。シャル、すごい。こんな複雑そうなの、よく覚えてたね？」

フレイが誉めてくれる。シャルは笑って否定した。

「そこまでお利口じゃないわ。だけど、お祖母さまが……護ってくれた」

ふところから金のペンダントを引っ張り出す。トップに彫られている紋様こそ、祖母がくれた魔寄せのルーン。妖精の庭に入ったときから、ずっと携えていたものだ。

ペンダントを見た途端、仮面のようなだったアンリの無表情が壊れた。

ガラス玉のような瞳が、ずっと、正気の光を取り戻す。

アンリは瓦礫の街をぼんやり眺め、最後にシャルを見て、震え声でつぶやいた。

「お……姉さま……私……？」

その仕草、その表情、その声音。

どう見ても、シャルが知っている、妹アンリのものだった。

「アンリ——元に戻ったのね!? よかつ——」

「ああ……あああああああああ！」

アンリが顔をかきむしる。爪が食い込み、たちまち血だらけになった。

薬物で錯乱したのだろうか。シャルは飛び起き、アンリのもとへ走った。

数秒、遅い。アンリがすべての力を注ぎ、己の守護精霊ガーディアンに働きかける。

止まって、と願ったが、エリクサー霊薬で拡大されたアンリの力は、ルーンの地上絵があつてな

お、シャルの上をいった。

黒く、巨大な扉が虚空に生じ、左右からアンリを挟む。

分厚い断面がびったり閉じるのを、シャルはどうすることもできなかった。

4

魔靴まじんの斬撃をいなし、魔石の稲妻をかわす。激しい攻防でGLR兵は散り散りとなり、今では魔女とエドガーの一对一となっている。

戦いのさなか、エドガーは何度もリヴァイアサンの様子を確認した。アンリの姿を探している。シャルは無事、妹を見つけ出せただろうか。

グローリアが心理を読み取り、からかうように言った。

「そなたの娘の何と健気けなげで可愛いかわいことよ。あの娘はわたくしを決して裏切らず、死すまで命令を遵守する。今もああして、リヴァイアサンを養い続けている」

「彼女が健気で可愛いことは、誰だれよりも私が知っています。ですが、貴女あなたのご命令に彼女が従うのは、あと数分といったところですよ。私の読みでは」

「ずいぶん読み違いもあったもの——そら！」

グローリアが軽く身を退く。虚を突かれた一瞬に、銃声が響いた。

兵がまだ残っていたらしい。拳銃も一丁、見逃していたか。銃弾は見事にエドガールの肩に命中し、出血をもたらしした。

「愚かなこと。娘に気を取られ、魔防すら間に合わぬとはね。兵を殺さなかったばかりに、そのような傷を負うのです」

「殺しはどうにも……慣れないものでね」

「一人殺せば慣れますよ。この世のすべてはそうあります」

「……一人殺せば慣れると言うなら、私は生涯、慣れずにいようと思います」

「一兵も殺せぬ者に、格上を倒すことなどできません」

「その意見には賛成しますが、失礼ながら、格上うえは私です」

「空威張りよ。薔薇ばらの師団に手も足も出なかった男が、今さら何を申す」

エドガーは苦笑した。兵を念動で殴り倒しながら、噛みしめるように言う。

「金、黒、銀、灰、青、白、紅——七大家と一四眷属を一度に相手取るのは不可能でした。ですが、不思議ですね。今日の前にいるのは、銀薔薇おひとりだ」

「——」

「我が名はブリュール、女王陛下より一角獣の紋章を賜りし騎士家の者。薔薇の一輪くらい、摘み取る力はあるつもりです」

それほどの男だからこそ、薔薇は罌を張り巡らせ、味方に引き入れようとした。

風の精を呼び寄せ、すべるように飛ぶ。敵との距離を詰めたのではなく、後退するのでもなく、エドガーは真横に動いた。

彼が何を回避したのか、皮肉にも怪物と毒霧のせいで、察知が遅れる。

グローリアが燃える流星をとらえたのは、秒速十数キロで飛来する物体が、残り数キロに迫ってからだった。

「流星——!？」

エドガーの右腕は義手であり、魔術回路が仕込まれている。

魔術回路（占星術師）——流星爆撃！

スターゲイザー

メテオストライク

グローリアは残った力のすべてをつぎ込み、隕石の直撃に耐えた。

運動エネルギーは速度の二乗に比例する。熱と重さ、遅れて襲う衝撃波で、岩盤がめくれ上がる。やがて破壊の嵐がおさまったとき、そこにはクレイターができていた。

埋もれるようにして、グローリアが倒れている。二体のイージスⅡはオーバーヒートし、煙を噴いて活動停止。対するエドガーは無傷で、自分を撃ったGLR兵を抱え、命を救ってやっていた。グローリアも魔力を使い切ったが、外傷はない。

……無論、エドガーが仕損じたわけではない。

生かされたのだ。グローリアは血走った目でエドガーをにらんだ。

「先ほど……そなたが……兵の銃弾を食らったのは……！」

魔防が間に合わなかったのではない。

敢えて、魔力を回さなかった。あの瞬間、エドガーは流星の軌道を制御していた。隕石で個人を狙うとなると、針の穴を通すような精密作業となる。

敵の能力を見極め、生き残る程度に加減した。それも、隕石を叩きつけるような大雑把な魔術で。彼我の力量差は歴然、グローリアの完敗だった。

「……とどめを刺すがよい」

「それはできません。貴女にも、人の心がありましたから」

「そのようなもの、ありはせぬ」

「ありますよ。傷ついているのがその証拠です。願わくば罪を償って——いや」

エドガーは急に碎けた口調になって、グローリアに笑いかけた。

「こう言った方がいいかな。君を殺したくはないんだ、シャーリー」

グローリアが目をむく。二人のあいだを、黒い北風が吹き抜けた。

「何年も気付かなかったよ。君は名も、顔も、声まで変えてしまったんだね」

グローリアは答えなかった。

エドガーはクレーターの中に降り、グローリアに近付いて行く。

「殿下——いえ、銀薔薇さま。私はずっと、貴女たちに抗うこと（あらが）をあきらめていたんです。妻子を安全に取り戻す方法などないし、結社のどこに囚われている（とら）とも知らない。異界に囚われていたら、私の守護精霊（ガーディアン）でも侵入は困難。協会はアテにできず、下手をすれば長女にも累（ゐ）が及ぶ。対抗魔術や、伝説級の迎撃もあるでしょう。一人の兵も殺さず妻子を連れて逃げるなど、とても不可能だとね」

できない理由はいくつもあった。やらないことを正当化する材料は、いくつも。

だが、そんなエドガーの尻を、蹴飛ばしてくれた少年がいる。

「まず『やる』と決めてしまうこと。そうすれば、手段は後からついてくる。やることを前提に考えれば、『不可能』は『困難』に過ぎません。それを思い出させてくれたのは、後先を考えない無謀な少年と——ほかならぬ貴女です」

「……………!?」

「爵位も持たない勉強嫌いの少女がですよ？ 魔術師となり、將軍となり、王妃の地位を得て、いつしか薔薇の席まで手に入れ、あぐく帝王になろうとしている。善悪はともかく、貴女の実行力を思えば、私が超えるべき壁など小さなものでした」

エドガーは軽く会釈をして、ほがらかに言った。

「大いに勇気づけられました。だから、お礼申し上げます」

「……そなたは二度、私を殺した！ 一度目は魂を！ 二度目は誇りを！」

グローリアが仮面の上から口を抑える。嗚咽おえつをこらえたのだとわかるまで、少し時間がかかった。エドガーほどの男でも、女性は謎の塊かたまりだった。このグローリアが敗北に涙するなど、考えられなかったから。

グローリアは仮面の下に涙を隠し、王族らしい落ち着きを取り戻した。

「わたくしがなぜ帝王の地位を欲したか、そなたにはわからぬでしょうね？」

「——すみません」

「よい。……そなたはこの先も、非殺の誓いを貫くつもりか」

「そのつもりです」

「わたくしの一生は……くだらぬ夢でした。ですが、人の慰めとなるものは、すべからくくだらぬもの。わたくしは……満足しています」

「……殿下？」

「最後まで手を抜かず——仕上げといきましょう」

グローリアが飛び起き、エドガーの首を狙った。

魔剣まけんが宿れば、手刀すら必殺の威力を持つ。エドガーはとっさに風の精を叩きつけた。グローリアの動きから、相手の余力を見積もっている。ぎりぎり止められるであろう一撃を、グローリアは止めようとせず、自ら進んで顔を差し出した。

仮面が割れる。その下からのぞいたのは、涙に濡れた、はかなげな微笑だった。

あつけに取られるエドガーの前で、肺一杯いっぱいに毒霧を吸い込む。

「——ああ、実に、小気味よい」

エドガーは救助しようとしたが、今度こそ魔防が阻んだ。機能停止寸前のイージスⅡが、最後の役目を果たし、魔防を展開する。

「覚えておくがよい。そなたが掲げた非殺の戦歴——唯一の汚点は、わたくしです」

ごぶつ、と血を吐く。すんなりとは死ねない。ただれた肺から何度も何度も血を吐き出し、しだいに脈が弱まって、ようやく呼吸が止まった。

死に顔は苦悶くもん。しかし、満足しているようにも見える。

銀薔薇ぎんばらことグローリア（妃殿下將軍）。平民から身を起こし、軍事で頭角をあらわし、王家に嫁ぎ、結社に通じて銀薔薇の座を得て、一度は玉座にまで手をかけた。最期はたった一人の兵に見守られ、実戦の中で死んだ。

文字通り、駆け抜けるように生きた女だった。

5

「右手と左手、どっちが好き？」

母の突拍子もない質問に、幼いアンリは上手く答えることができなかった。

「……右手？」

「アンリは右利きだものね。じゃあ、左手はなくなってもいい？ 嫌い？」

それは困る。母はエドガーのシャツを引っ張り出して、アンリにかぶせた。

「ね、ボタンを留めてみて」

言われた通りにやってみる。上手くできず、アンリは困った。

「これ……逆……」

「男物だからね。じゃあ、次はアイロン！ 左手でかけてご覧なさい」

熱の入っていないアイロンを左右に動かし、アンリは気付く。

左手の方が、布の扱いが上手い。位置を整えるのも、伸ばすのも、右手では上手くできない。右手がアイロンを持つときでも、左手がなければ作業に手こずる。

「ね、どっちも大事でしょ？」

「左手の方が上手なことも、あるんだね……」

「……そうね。だけど、私が言いたいのは、ちよつと違うことかなあ」
母は再びアンリを抱き上げて、膝に乗せた。

「どっちも大事な貴女あなたの体よ。傷つけば痛いし、血が出るわ」

「――」

「私とお父さまが貴女たちを思う気持ちも、おんなじよ」

そのときの母の微笑ほほえみは、蜂蜜入りの紅茶と同じ味がした。優しく、甘い。それは茶葉の苦味の中でこそ、感じるものだった。

シャルの方が年上だから、万事に優れているのは仕方ない——そんな子どもだまも騙しの道理を、母は言わなかった。舞台俳優だった母は、知っていたのだ。いずれ、経験では埋められない差を実感する日がくる。素質や才能が姉妹を隔てるときが。

母がくれたのは、今だけ効果絶大のまやかしではなく、いつまでも効く弱い薬だった。それは確かに価値ある言葉だったが、アンリにはわだかまりも残った。

当時は言葉にならなかったことが、今ならできる。アンリはあのとき、こう思ったのだ。弱い者、劣る者は、常に左手の地位に甘んじなければならぬのかと。

今、アンリの前には深い闇が横たわっている。

自分がどうやら生きていて、『扉の向こう』にかくまわれていることを、アンリは苦々しく思った。いつそ扉がつぶしてくれれば、自分で幕が引けたのに。

ひどく混乱している。自分が誰だれなのか、どこからきたのか、わからない。世界が揺らぎ、グロリアに従うという意志も揺らいだ。もうどうしていいか……わからない。

ここは寒い。何も視みえない。だが、外に出るのは、怖い。自分がしてしまったことの恐ろしさに、アンリはもう薄々氣付いている。

「シルヴァリ！ どこ！」

『ここにおります、我が君。我はいつでも貴女あなたの側そばに』

暗闇に銀の甲冑かちゅうが浮かび上がった。変わらぬ輝きに、アンリは安堵あんどする。

『さあ、日の当たる世界に生まれよう。機巧都市を制圧しなければ』

「そんなの、したくない！」

言ってから、自分の言葉にはっとした。

そうだ。そんなことはしたくない。私はそんなことしたくなかった！

「貴女は、私を救ってくれと言ったよ……!?」　なのにどうして、あんなひどいこと……みんなを苦しめて……たくさん殺して——こんなこと、しちゃいけないのに——まぶたの裏に浮かぶのは、壊滅した街並み。毒で死んでいく動植物たち。

「私は一体、何をしたの……!?」　あんな怖い自動人形オートマトンを使って……貴女を使って！」

取り乱すアンリを抱きしめ、シルヴァリは優しく言った。

『貴女ばかりが不安なのではありません。グロリアさまでさえ、不安と焦燥しやうそうに苛さいまれる日があります。崇高な目的を持つ者は、誰だれしもそうなる運命なのです』

「陛下も……不安に？　なら……お救いしたいわ。お慰めしたい」

『できますとも。貴女ならば』

シルヴァリは甘ったるい調子で、くすぐるようにささやいた。

『今や貴女は姉を上回る、優れた精霊使いジンマスタでいらつしやいます』

雷に打たれたような気がして、アンリはしばし放心した。

「……そっか……そうだったんだ」

固く閉ざされていた秘密の扉を、不用意に開いてしまったような、そんな感覚。

今、ようやく、わかった。

本当は求めていたもの。決して認めたくなかったもの。姉に対するわだかまりの正体。そして何よりも、自分がこうなつてしまった理由。

押し寄せる感情の波に翻弄ほんろうされる。それは後悔であり、粘りつくような自己嫌悪だった。

『どうされたのです、我が君。何をお嘆きに？』

「……おかしいね、シルヴァリ。私たちはつながってるはずなのに……貴女にはわか

らないんだね、私の気持ちがい！」

泣きながら、笑う。笑って、振り払う。

アンリはシルヴァリの手を逃れ、暗闇の中で泣き崩れた。

自分が誰に支配されていたのか、理解した。

グローリアの精神操作？ 違う！

シルヴァリに支配された？ それも違う！

アンリを支配し、人格をのっとり、変えていたのは。

「自分……だったんだ……！」
わたし

自覚のないまま、心の底で望んでいたのか。プリューの名に相応しい武威ふきわを示し、栄光をつかみ、姉のような賞賛を浴びたいと、願う気持ちがあったのか。

姉と同じくらいに憧れ、大好きだったフレイを生贄いけにえに指名した。

それは本当に偶然か？ アンリはずっとフレイの鍛錬に付き合っていた。どんな力をつける彼女を見て、思ったんじゃないのか？ うらやましいと——妬ましいと！
だとしたら、何て……何て、嫌な人間なんだろう？

アンリは両手で顔を覆い、肩を震わせ、むせび泣いた。
おお

意識が鮮明になり、記憶、感情、人格が、アンリのもとに返ってくる。己を取り戻すにつれ、やってしまったことの重さが、逆にアンリの理性をあやうくした。

「どうして私に……お姉さまみたいな力がないか……わかったよ。私みたいな人間に力があったら……みんなを不幸にしちゃうからだよ！」

『ああ、我が君、どうかお気を鎮めください』

「だったら心は、力を否定する！」

扉が閉まり、シルヴァルリの腕を挟む。甲冑に亀裂が走り、肉をおしつぶした。

アンリにも激痛が走り、同じところが内出血する。それでも、アンリは拘束を緩めない。足首を、腰を、次々に扉で挟んで、戒めようとする。

『おやめください！ 我は貴女の力の根源です！』

だから、やめない。シルヴァルリを己の奥深く、扉の向こうに閉じ込めるのだ。

従順だったシルヴァルリが、突然牙をむいた。

拘束をはねのけ、逆にアンリを拘束する。

『聞きわけのない方ですね。我が手を貸さず、誰が貴女を救うのです？』

アンリの体が扉に挟まれ、万力のように締め上げられた。

『貴女は不安で取り乱しているだけです。今、落ち着かせてあげましょう』

シルヴァルリがアンリの顔に触れる。ガントレットの指が触れた途端、暴力的なほど

の安心感を覚えた。優しい声が聞こえる。安らぎなさい。扉の奥に隠れていなさい。貴女を傷つけようとするすべてのものから、我が貴女を護りましょう——

扉の内側は我が家に似ていた。自分の部屋で安らぎたい。怖いときは、膝を抱えて震えていたい。だって、私はこんなに弱くて、可哀相かわいそうなのだ。守ってもらいたいし、助けてもらいたい。そうしてもらって当然ではないか？

（ち……違う……っ）

本当に私は可哀相だったのか？ 救われなければならない存在だったのか？

そんなことはない。だって、シグムントは言ってくれた。『君は、君が思う以上に素晴らしい少女だ』と。だが……ああ、その信頼を、アンリは裏切ってしまった。

（もういっそ……自分で自分を、殺したい……！）

そうだ、消えてしまおう。私みたいな嫌な人間は、いなくなってしまう——
そのとき、『悪ぶって逃げるな』、と誰かの声がした。

鼓膜の奥に、かつて言われた通りに、雷真らいしんの声が響く——自分の心と向き合え。

（私、十分向き合ったよ……悪い子だって認めたのに、それじゃだめなの……っ!?）
だが、雷真がくれた言葉の中には、その返事もあったのだ。

『それがおまえのすべてなのか？』

——すべてでは、ない。

アンリはぼろぼろ泣きながら、本当の気持ちを口にした。

「帰りたい……っ。前の私に戻って……みんなのところに……帰りたいよ……っ」

『そうしてまた、皆の足手まといになるのですか？』

シルヴァリが冷たく問う。それだけで、アンリの意志は揺らいでしまう。

『我を否定しても無意味です。我に身を委ね、もう安らぎなさい』

「いや、それでは困るんだ」

かちやりと錠の外れる音がして、誰かが〈扉〉の中に入ってきた。

闖入者は、父エドガーだった。父は安心させるように微笑んで、

「アンリ、君はまだ少女だし、何よりも私の娘だ。まだ全部を背負わなくていいんだ

よ。困ったときには親を頼ればいい。これから、ずっと側にいるからね」

エドガーの背後に精霊が出現する。やんちゃそうな少年の姿で、大人の背丈ほどもあ

るスケルトンキーを担いでいた。どうやら〈鍵〉の精らしい。

アンリは目を見張った。シルヴァリの異界に、ほかの精霊が侵入している！

シルヴァリは無数の扉を生み出し、少年を阻もうとした。少年は軽やかに身をか

し、開錠し、次々に突破していく。

そうして眼前までくると、今度は鍵を逆に回して、シルヴァリに錠をかける。

これまで生み出した扉がすべて、シルヴァリを閉じ込めるものとなる。シルヴァ

りはどんどん遠ざかり、闇の中に沈んでいった。

『我が君！ 本当によろしいのですか!?』

敵^{かな}わぬと見て、シルヴァルリはアンリに訴えた。

『今の貴女^{あなた}には大いなる才能が——精霊女王^{クリスタリア}の資質すらあるのです！ 大魔術師となり、歴史に名を残すことも不可能ではないのですよ!? シャルロットではなく貴女が！ また日陰者に戻るのですか!? 輝かしい姉のおまけみたいな存在に！』

「……ねえ、私はアンリ^{わたし}だよ。なのにどうして、貴女はお姉さまになりたがるの？」
守護精霊^{ガーディアン}が怯む。アンリは一步も退かず、むしろ踏み込んで言った。

「私は私の足で、私の人生を歩いていくの。お姉さまに比べたら、地味で、堅実で、変化に乏しい、退屈な生き方に見えるかもしれない。だけど、私はそれが好き」
自然と表情がやわらぐ。アンリの脳裏に浮かぶのは、キンバリーの研究室で過ごした、メイドとしての日々だ。

本の整理をして、机を磨いて、ファイリングをして。

ときどき誉め^ほめられて。

西日の差す部屋で、一緒に紅茶を飲んで。

座ったまま寝こけるキンバリーに、そっと毛布をかける。

あの静けさの中に、アンリの安らぎはあった。

「私は小さな幸せを大事にあたためて、守り通す生き方がしたい。それは女王陛下の生き方や、エレインさまの生き方に劣らず、素晴らしい生き方だと思うから」

アンリは勇気をふるい起こし、きつ、とシルヴァルリをにらみつけた。

「私の幸せを壊すって言うなら——私は戦うよ。貴女^{あなた}とでも」

左手に甘んじるのではない。

選んで勝ち取るのだ。その場所を。

シルヴァルリがわずかに首を引く。強大な守護精霊^{ガーディアン}が、気迫負けしたようだ。

アンリは語調をやわらげて、優しく語りかけた。

「ねえ、貴女には見えなかった？ お姉さまだけじゃなくて、フレイさんや、ロキさんや、ヘイゼルちゃんや、それにキンバリー先生が、私を取り戻そうとしてくれた」

「……それはそうでしょうとも。貴女は災厄そのものだったのです」

「私が迷惑なだけなら、殺せばいい。なのに、誰も殺そうとしなかった。それはきつと、弱い私が勝ち取ったものだよ。強い貴女じゃなくてね」

無力で地味な私が、自分の力で手に入れたもの。

およそ人間が手にするもののなかで、もっとも価値がある、と思えるもの。

ほら、大きいでしょう？ というふうに見る。

シルヴァルリはもう、抵抗しなかった。

閉じていく扉の向こうで、愛想を尽かしたように嘆息する。

『どうやらもう、何を申しても無駄なご様子』

「うん。でも私、いつか貴女にもわかってもらいたいな……」

『愚かなことをおっしゃる。それは無理な相談で——』

「だから、きつと迎えにくるね。自分の力で、いつか貴女を」

「……………!?」

「ずっと私を護まもってくれて、ありがとう。今度会うときは」

最後の言葉は、微笑ほほえみとともに告げる。

「お友達になろう?」

扉が閉まり、どこからか巨大な錠前が降りてきた。

少年が最後の施錠をする。がちやりと響く金属音に混じって——

お待ちしております、と聞こえた気がした。

Epilogue 夢から醒めて

あのととき既に、祖母は己の死期を悟っていたのだろう。

滅多に人を入れない私室に、幼い姉妹を招いて、祖母イライザは言った。

「今日は貴女たちに宝物を授けましょう」

てつきり叱られると思っていた姉妹は、きよとした。

祖母が宝石箱を開き、中身を見せてくれると、戸惑いはもう吹き飛んでいた。

リングにペンダント、ペンデュラムにタブレット、懐中時計——後に形見分けでもら

うことになる、まばゆい宝飾品の数々。その中に、特に目を惹く品が二つあった。

ひとつは金のペンダント。小ぶりのトップはコインのようで、繊細なルーン文字が刻まれている。もうひとつは銀のリングで、優美な曲面にやはりルーンが刻まれていた。

「その昔、アーサー王が精霊の女王からもらったものです」

「ほんと!？」

「どうでしょう。真偽はいつか、貴女たちが自らの手で解き明かしてください。さて……どちらを、どちらに授けるか」

祖母が姉妹を見る。普段なら迷わず銀を選ぶアンリも、このときは少し躊躇した。意匠がすみれの花で、とても可愛く見え——つまり気に入ったからだ。

イライザは金のペンダントを取り、シャルを見た。

「シャル、貴女にはこの〈王錫〉のルーンを与えます。精霊たちとより深くつながることができるよう。アンリ、貴女にはこのリング、〈王城〉のルーンを。精霊たちがずっと貴女を護ってくれるように」

銀のリングを、そっとのひらに落としてくれる。嬉しいと思う一方、祖母にとって、金はやはり姉向きなのかな、と思わずにはいられなかった。

そんな自分が恥ずかしくて、アンリはごまかすように笑う。

「わたし、精霊ってよくわからないな」

やつれた顔に上品な笑みをたたえ、祖母は言った。

「わからなくてもよいのです。たとえ姿が見えなくても、声が聞こえなくても、常に貴女は護られている。苦しみの中にあるときも——お城のお姫さまみたいにね」

——今なら、信じられる。祖母がリングを選んでもくれたのは。

アンリの気持ち、わかってくれたからだ。

父に肩を抱かれ、アンリは扉の外に出た。

目の前には凄惨な現実が広がっていた。荒野と化したストリート。大気には黒いもやが混じり、大地は汚染されている。この大災害はグローリアの仕業——ではすまされない。洗脳されてようが、薬物の副作用だろうが、アンリは人類の脅威だった。精霊力を封じて、いつ取り戻すかわからない。人々はアンリを恐れ、憎むだろう。

「私……魔術師協会に逮捕されちゃうよね……？」

「護るよ。子どもをこの手で護るのが親の務め——以前、叱られたっけね」

笑っている。穏やかな父の顔を見ていると、それだけでもう、立ち向かって行こうと思えた。それに、アンリを待っていてくれるのは、父だけではない。

「アンリっ、アンリっ」

姉が転がるように駆けてくる。魔力を使い果たし、ふらふらだ。瓦礫につまずき、転びそうになるのを仔竜が支え、ともにこちらに向かってくる。

シャルは躊躇もなく、アンリに飛びついた。

アンリは自問する。抱きしめ返す資格が、自分にあるだろうか——

そんなためらいは、姉が漏らした「ふえっ」という嗚咽で、どうでもよくなった。

「よかつ……よかつ……うわああああん！」

泣きじゃくる姉を、アンリはそっと抱きしめる。

「……よくないよ。私、大変なことをしちゃったもの」

「このくらい何てことないわ！ 私だって時計塔壊しちゃったわ！」

「それとは違うよ！ だって私、たくさんの人を殺して……っ」

「大丈夫！ 大丈夫なの！ 大丈夫じゃないけど、大丈夫！」

泣き顔で父を見る。エドガーはうなずき、ゆっくり話し出した。

「まだすべてを確認できたわけじゃないけれどね。君は誰だれも殺していない」

慎重に言葉を選んだように思えた。気にはなったが、ひとまず犠牲者が少ないのは確かなようだ。だが……なぜ？

「学院の先生たち——学院長も目の色変えて市民を護まもってくれたわ。灰十字の戦士も大

勢きてたのよ。それに、フレイも言あなってたけど、貴女あなたやっぱり手加減してたのよ。あの

霧、みんなけっこう吸っちゃってた。なのに平気だったのは——ほら！」

天を示す。上空の霧は白っぽく、粉雪のようにきらきらと輝いている。

まるで星が降るように、光の粒子が降りてくる。

「あれ……何？ いい匂い……」

「羽虫の中には、中和剤になる種類のもいたの」

あと思った。自分ではない自分が、グローリアに与えた銀のかぶと——

あれがどういう仕組みなのか、このアンリはわかっていなかった。だが、シルヴァル

りにはわかつていたのだ。羽虫には二種類が存在することを。

考えてみれば、抑制のきかない〈繁殖〉兵器など、実用に堪えない。人類滅亡をさけるため、偉大な先人は汚染を食い止める手立てを用意していたのだ。

「二種を混ぜると、化学反応して無害になる——らしいわ。だから貴女、きっと人の近くでは無害な方を増やしてたのよ」

「それ……私じゃないよ……!」

目頭が熱くなる。それは、シルヴァリがやってくれたことだ。

不器用な守護精霊は最後まで、人知れず、アンリを護^{まも}ってくれていた。

「もちろん怪我^{けが}した人は大勢いるし、不動産を失^なくした人もいるけど——弁償したら今度こそブリューは破産だろうけど——だけど! ひとまず! これで一家集合よ!」

シャルが後ろを示す。協会の戦士に護られて、一人の女性が立っていた。

出て行ってもいい? いい? とうかがうような表情。やがてこちらの視線に気が付き、恥ずかしそうに近付いてきた。

「貴女^{あなた}たち、すっごく強くなったのね。私、びっくりしちゃったわ」

「お……母さま……?」

「綺麗^{きれい}になったわね、私の天使!」

抱きしめられる。懐かしいぬくもりに、アンリの胸が詰まった。

「お帰りなさいっ……お母さま……！」

「お帰り、アンリ」

どっちがどっちに言っているのか、もうわからない。ましてプリュー邸からはずいぶん遠い。だが、父と、母と、姉と、妹と、そしてシグムントがいる以上、我が家に帰ったのと同じことだ。

「アンリばかりずるい！ お母さま、私も！ 私もハグして！」

「まあ。シャルったら、ちっちゃい子みたい」

「今日くらい、赤ちゃんでもいいわ！」

姉が二人のあいだに割り込んできて、両方を抱きしめる。アンリは家族にもみくちゃにされながら、赤ん坊のように泣いた。

その左手の人差し指で、銀のすみれが光る。

きらめき始めた星々を、そっと包み込むように。

ひとしきり再会を喜び合った後で、夫婦のあいだに微妙な空気が流れた。

「今日まで本当に……苦勞をかけたね、ミレイユ……」

魔女を圧倒した人物とは思えないくらい神妙に、エドガーが夫人に頭を下げる。

「君を護りきれなかったこと、心の底から……申し訳なく思うよ。君を幸せにすると約

東して英国に連れてきたのに……後悔しているんじゃないかい？」

「……そうね。今かなりがっかりしてるところ」

「ごめん——」

謝る口を指で押さえて ミレイユは怒った顔で言った。

「これって悲劇よ。シェークスピアも真っ青よ。今の私が不幸のどん底で後悔してるように見えるなら、二十年連れ添った夫が、まるで私をわかってないってことよ？」

すねたような口ぶり。それから、弾けるような笑顔を見せる。

「私、今日が一番、幸せよ」

「……君のそういうところが、母の意固地を打ち負かしたんだったね」

「あら？ 人の心に忍び込むのは、貴方の得意技でしょ？」

エドガーは苦笑して、過去を懐かしむような目をした。

「あれはひどい言いようだった。『旅先で引っかけた女』だの『浮き草稼業の芸人』だの。母は古い人だから、役者は堅気の商売に思えなかったんだろう」

「だけど、お義母さまは公正な人だった。すぐに私を認めてくれたわ」

「すぐ……かな。相当引きずってたと思うけどね……」

「そこはそれ、息子を持つ母親ってそういうものよ」

あっけらかんとして言う。エドガーはまぶしそうにミレイユを見た。

「君と一緒になれて、私は世界一の幸せ者だと思うよ」

「もちろん知ってるわ」

笑い合う。夫婦のやり取りを姉妹はハラハラしながら見守っていたが、ついにシャルがやる気を失くした。

「やってられないわ！ 完っ全に二人の世界じゃない！ いつまで新婚気分なのよ！」

「それは言い得て妙だな。あの二人の周囲だけ、魔術で時を止めたかのような」

シグムントが楽しそうに言う。シャルも、アンリも、釣られて笑顔になった。

「ねえ、お姉さま。私たち、妹か弟ができるかもね？」

「ひっ!? やめてよ、親のそういう生々しい話！」

「夫婦円満でいいじゃない。……二人とも、よかったね。私はこれから、家族にいつばい迷惑をかけちゃうかもしれないけど——」

シャルがアンリを抱え込み、続きを言わせない。姉の気遣いが嬉しくて、アンリはまた泣きそうになった。だが、続くシャルの台詞は、びっくりするくらい冷たかった。

「でも私、ひとつだけ許せないことがあるの」

「ごめんなさい！ 殺そうとしたこと……だよね？」

「そんなのどうでもいいのよ！ 正気じゃなかったんだからしょうがないわよ！」

「じゃあ……なに？ フレイさんを殺せて言ったこと……?」

シャルはあっちに視線をやり、こっちに戻し、さんざんためらってから、

「貴女、また大きくなってるじゃない……！」

結局、言った。すごくどうでもいい——アンリにとっては——ことを。

シャルは獐猛な獣のような眼をして、アンリの胸をにらんだ。

「これで差は二インチ……？ いえ、二・五インチかしら……!?」

「しょ、しょうがないことだよ。これこそ、私の意志じゃどうにも」

「教えなさいよ秘密を！ どうやって——はっ、あの薬!? あの薬なのね!?」

シャルが言っているのは〈解放剤〉のことに違いなかった。

「ふふ……そう、そういうこと……あれをバケツ一杯、体にブチ込めば……！」

「やめてお姉さま！ 正気に返って！」

「独り占めする気!? シグムント、この魔女を叩きのめすわよ……！」

「ど、どうしようシグムント。お姉さまの人格が崩壊——これってチェンジリング？」

魔剣の竜は声をあげて笑い、星の降る空を気持ちよさそうに飛んで行った。

その光景を、ロキは苦笑まじりに見守っていた。

疲弊し、瓦礫に座り込んだヴェイロンが、眠たげにあくびをする。

「あっちはいい画だな。こっちはさんざんだってのに……」

「貴様は迎えがきているだろう。いい画の仲間入りをすればいい」

あごをしゃくる。瓦礫を軽やかに跳び越えて、オルガが現れたところだった。会話を聞いていたのか、オルガはからかうように言った。

「おや、私たちの相思相愛つづりをひがんでいるのか、〈剣帝〉^{けんてい}？」

「誰^{だれ}がだ。殺すぞ」

「ひがまずとも、いい画の役者は君の後ろにもいるだろう」

フレイを示す。フレイはアンリに話しかけようか、遠慮しようか、迷っていた。こちらに気付き、もじもじとする。ロキは気恥ずかしくなって、一蹴した。

「くだらん！」

フレイは『がーん』と衝撃を受け、ラビにしがみついて、いじけた。



オルガは声を潜め、ロキの耳元で言った。

「伯爵夫人の身柄は黒薔薇のもとにあったはずだ。彼女はどんな様子だ？」

「……さあ。なぜオレに訊く？」

シラを切る。そこはまだ、馴れ合う気にはなれない。

オルガが見透かしたように笑う。そこに、「ねえ！」と声がかかった。

澆刺はつらつとしたシャルが、素直な笑顔を浮かべて近付いてくる。

「今日はありがとう。お父さまを連れてきてくれたの、ヴェイロンだったわね」

「……オルガに頼まれて距離を縮めただけだ。礼はそっちに言え」

「それならアリスだな。私はアリスに頼まれて——いや、功の多寡たかなら中和剤を発見し

たパーシヴァル教授か。怪物を支配し、中和剤を増殖させたエリアーデ教授か」

「もー誰だれに言えばいいのよ！ みんなありがとうーっ！」

復旧作業中の人々に大声で叫ぶ。あちこちで笑い声があがった。

シャルは赤面して、オルガに向き直った。

「お母さまの居場所、機密だったのよね？ お父さまも協会も、何年も探して、見つけ

られなくて……。それがどうして、見つけられたのかしら？」

あなた 貴方たちは詳しいでしょう、という目でヴェイロンとオルガを見る。ヴェイロンは面

倒くさそうに、適当にあしらった。

「知るか。内通者が協会にリークしたんだろ」

「内通者って——あ、オルガ？」

オルガは否定せず、かと言って明言もせず、曖昧あいまいに応えた。

「私は金薔薇の孫だ。その気になれば、探る手段はあるかも知れないな」

「……そんな危険なこと、やってくれたのね」

「やったとは言っていない。だが、私はいつでも、君たちに報いるつもりでいるよ」

黄金を思わせる、麗うるわしい微笑はほえみ。シャルは友情を感じたようで、また涙ぐんだ。

Tレックス
「暴竜の目にも涙だな。おつりがくるのなら、ぜひ頼みたいことがあるんだが」

「何でも言って！」

「ほう。ほうほう。君はブリュー家の者だ。二言はないな？」

「えっ？ あつ、その……ええとっ」

オルガは逃がさず、シャルの肩を抱いて『頼み』をささやいた。シャルの顔が青くなる。意味がわからず、ロキとヴェイロンは互いに顔を見合わせた。

「な……むっ……無理よ！ そんなの絶対無理だわ！」

「『何でも言って』と言ったじゃないか」

「し、従うとは言っていないもの」

「ほう。誇り高きブリー家^{ブリー}の者は、詭弁^{きべん}を弄^{ろう}するのか」

「ぐ……ぬぬぬっ」

「まあ、すぐには言わない。何はともあれ、今日のところは一件落着……かな？」

「……いいえ」

シャルは厳しい顔になり、悲壮感すら漂^{ただよ}わせ、かぶりを振った。

「私にはまだ、助きたい友達がいるから。それに……」

ちらりとロキに視線を寄越^{よこ}す。

「あのバカ、ちゃんと夜会に出てくる……わよね？」

「オレが知るか。だが、まあ、死んでいなければ、出てくるだろう」

「……そうよね。そうなんだけど」

二人は知っている。たとえ瀕死^{ひんし}の重傷だろうと、雷真^{らいしん}ならば、今日の戦いに参加した。アンリがあんな目に遭わされていて、彼が黙って見ているはずがない。

なのに、最後まで姿を見せなかった。

シャルは不安を感じているようだ。ロキもまた、案じていないと言え、嘘^{うそ}になる。

「出てきてもらうさ。あいつが現れなければ、オレの夜会は永遠に終わらない」

「何よそれ！ どういう意味!?」

「……バカが。何を興奮している」

今夜の開始時刻までは二時間、終了までは八時間もない。
果たして、雷真は夜会の舞台に上がるのか。

これだけの大災害が起きてなお、今宵も夜会の幕は上がる。



地下の太空洞にある、聖堂のような建物——ギユネスのねぐらの前。

昨夜、灰薔薇シスマによって、貫通するように破壊された。砕けた天から光が降り、柱のようになっていた。その光の中に立ち、赤羽天全が言った。

「……詩吟と同じ、同型反復進行だな。今日、女王の權威は覆り、異邦人が受け入れられ、浄化の歌が地に満ちて、星が降った。明日、玉座のかたわらに神性機巧が生まれる」

どこか嬉しそうな主の背中を、火垂はじっと見つめた。

魔術師にして人形師、学院創設以来の天才マゲナスの正体は、赤羽天全だった。

夜々が先ほど口にしたことが、火垂の胸にわだかまっている。

スコードロン
戦隊とは、何なのか。

あの夜、赤羽一門に何があったのか。

天全が父母を、そして妹を、殺したというのは本当か。

火垂ののもっとも古い記憶は、ほかでもない、あの夜のものだ。

天全の手で目覚め、彼に従って、燃え盛る赤羽空観の邸を後にした。

戦隊の材料になった少女は、あの夜、解体されたという。戦隊が目覚めたのもあのと
き、あの場所。ならば、最後の組み上げを行ったのも……？

妹の名は、撫子なでしこと言ったらしい。

火垂はたるは無意識に自分の顔に手を当てた。この顔を見るたび、雷真らいしんの様子が変わって
た。最初の頃は驚きが勝り、近頃は妙に優しい目をする。

一度などは、こうも言った。

『俺おれの妹に何してくれてんだよ』

火垂の中で、何かがつながる。

（この顔は、まさか……）

「……やれやれ。おまえたちにまで、知れたがりの虫が伝染したようだな」

気がつくのと、天全てんぜんがこちらを向いていた。仮面のないその顔を正面からはっきり見る
のは、ずいぶん久しぶりに思えた。

鎌切かまきりが前に出て、主あるじの前で膝を折る。

「すみません、マスター。我らも……知りたいことができました」

火垂^だだけではなく、姉妹たちも落ち着きがない。天全は観念したように、しかし腹立たしげではなく、穏やかに笑った。

「明日語ったのでは、おまえたちの覚悟^{にぶ}が鈍^{にぶ}るだろう。すべてを知った上で、今宵^{こよひ}のうちに覚悟を決め、明日の決戦に臨め」

「……マスター、それでは」

「いつかの約束を果たすときがきた。おまえたちに、すべてを語るときが」
ざわつと戦^{スコードロン}隊^{スコードロン}たちに動揺^{スコードロン}が広がった。

彼がこんなにあっさり折れてくれるとは、誰^{だれ}も思っていなかった。

「おまえたちがなぜ『有る』のか。いかにして『在る』のか。ことの起こりと終わりを、今より語ろう」

かくて、〈愚者の聖堂〉にて、赤羽^{あかばね}天全は語り始めた――

あとがき

夜会終わる終わる詐欺いいい！

青ざめながらこんにちは、海冬レイジです。お待たせしておりますマシンドール14巻をお届けします。待たせてごめんなさい！

今回はシリーズ中でも異色な感じになりました（お話の主役が——のところ！）。実は作者の中で、ずっとくすぶっていた疑問がありました。

機巧少女は毎度、雷真らいしんがかなり頑張ります。もちろん周囲の助けを借りるのですが、彼がきっかけとなってお話が動く、RPG的な構造です（ヒロインに関してはルート分岐で全員攻略可能な恋愛ゲームをイメージしました）。

では、主人公が動かないと、この世界はまったく動かないのか？

作中でシグメントが近いことを言うのですが、脇役たちは常に、永遠に主人公の世話にならないといけないのか？ 何度も助けられて、心境の変化も体験してるのに？

今回のお話で、その疑問にある種の解答を例示できていたら嬉しうれ……まあでも主人公はもう少し頑張れよって思——次回！ 次回頑張るよ雷真は！

予定では次回、ついに夜会が決着します。

夜会の幕引きがどうなるかは見えています。ここまでついてきてくださった貴方^{あなた}に早
くお見せしたくてたまらない！ 一点、心配なのは書き上がるかどうか——そこかよ！

毎度言ってしまいましたが、シリーズのクライマックスは大宇宙からの『終わらせまい
とする強大な力』と戦わなくてはなりません。それはネタ切れやプレッシャーだけでは
なく、健康上の問題であつたり、プライベートだつたり、会社関係だつたり、言わば
『人智を超えた抵抗力』であり、作家や編集者個人ではどうにもならないことも多
く……。ご存知の通り、この戦いで多くの作品が斃^{たお}れます。

幸いにして海冬レイジ、皆様のラブパワーに支えられ、デビュー以来、大宇宙に敗北
したことはありません。機巧少女も持ちこたえています！ このままあと二冊、俺^{おれ}は断
固として絶対防衛線を死守しますよつ。

——って海冬、今さり気なく大事なこと言ったよね？

その空気を感じてくださっている方も多いかと思いますが、機巧少女はクライマック
スに突入しております。今回解決しなかったあれそれ、そして夜会と復讐劇^{あぐしゅう}、残り二冊
で美しく（※予定）まとまる予定です。ある意味、上中下巻構成です。

残り二冊、引き伸ばしなしの16巻完結を考えておりますが、まあ海冬レイジのやる

ことなので、書き過ぎちゃって二冊で収まらない可能性はある……っ。

次巻は衝撃的な感じのアレになるとありますが、これも海冬レイジのやることなので、作者を信じて、最後までお付き合いいただけたら幸いです！ 裏切らないよ！

ちなみに今回、コミック版で高城さんたかぎが作ってくださった（アンの過去エピソード）を小説化しています。あんまりにも素晴らしかったので、お願いしてノベライズさせていただきましたよ！ やったぜ大満足！ 高城さんいつもありがとうございます！

今回もたくさんの方のお力添えで、ぎりぎり本にすることができました。

担当さんとするろおさんには本当に申し訳なく……お二人の寿命をいただいてる気がしておりますすみません。もちろんデザイナーさんや校正さんにも無理をお願いすることになり……なり……ああああ海冬レイジしつかりしろよ！

それでもこうして本になったのは、支えてくださった皆さま方と、今本書をお手に取ってくださったあなたの貴方のおかげです。いつもありがとうございます！

（お手紙くださった方、ありがとうございます。お返事できなくてごめんなさいっ）
ではまた次回、今度こそ夜会決着！ の15巻でお目にかかることを祈りつつ――

こんにちは、絵の人です。
今回は例の怪物さんより、お婆様が怖かったッス。
この調子で海冬さんにはホラー作家に…
て、それはないか。



著者

海冬、レイジ（かいとう・れいじ）

お待たせしてすみません……

るろおさんのスケジュール破壊したの俺！

ごめんなさい……！

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。

イラスト

るろお

暑いより寒い方が好きなので

そろそろ快適な季節につっ

機巧少女は傷つかない14

Facing "Violet Silver"

2014年10月31日発行 ver.1.0

著者 海冬レイジ

発行者 三坂泰二

編集長 万木壮

発行所 株式会社KADOKAWA
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）

編集 メディアファクトリー
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10:00～18:00まで

©Reiji Kaito 2014

<http://www.kadokawa.co.jp/>

※無断で複製・複写・データ配信などを行うことは、かたくお断りいたします。

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
MF文庫J

機巧少女は傷つかない14 Facing "Violet Silver"

発行日 2014年10月31日 初版第一刷発行